

3 遺構外出土遺物

当該遺跡から出土した縄文時代のものと考えられる土器は1,719点、石器は382点を数える。土器については長泉事務所における接合作業を経た結果、点数は著しく変化している。土器及び石器の出土分布図でも理解できるように、土器及び石器とも1区及び2区に集中する。

(1) 土器・土製品

第I群：早期(第136・140図 第34表 写真図版55)

縄文時代早期の土器を第I群とした。この早期代と思しき土器は量的に隣接する富沢内野山Ⅰ西遺跡と比較して甚少である。胎土中に纖維を含む。

1類(燃糸文土器)

83は口縁部のみの破片資料である。口唇部を丸く仕上げ、口唇部直下から燃糸を網目状に施したものか。1類に該当する遺物は83の1点のみである。

2類(条痕文土器)

84・86を2類とした。84は口唇部のみの破片資料である。外面には条痕が施されている。86は胴部のみの破片資料である。内外面共に横位の条痕が施されている。

3類(神ノ木式)

神ノ木式土器と推定された土器群を3類とした。85は底部のみの破片資料である。内面に条痕が施されている。

第II群：中期初頭(第137・140図 第34表 写真図版55)

縄文時代中期初頭の土器を第II群とした。出土位置は1区A T38グリッド付近に集中する。87は直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈折させ、口唇部は平坦に仕上げている。外面は縄文を施した後に、逆「V」字状に棒状工具で沈線文を複数施す。その間際に波状文も見られる。また口唇部直下にも横位に波状文を施している。88は87と同一個体か。

第III群：中期前半～中葉(第138～144図 第35表 写真図版55～57)

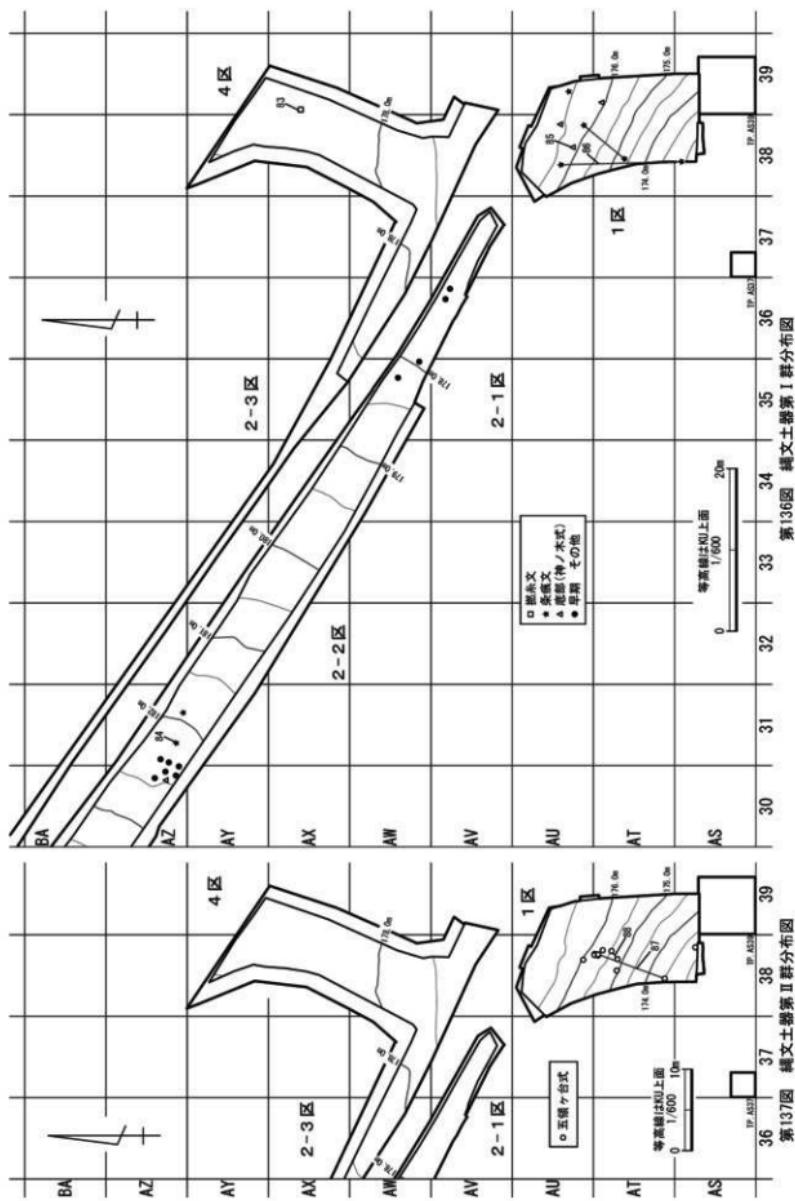
縄文時代中期前半から中期中葉の土器を集成した。この遺跡の最盛期にあたる時期の遺物で、土器群の主体を占める。1～5類に分類される。

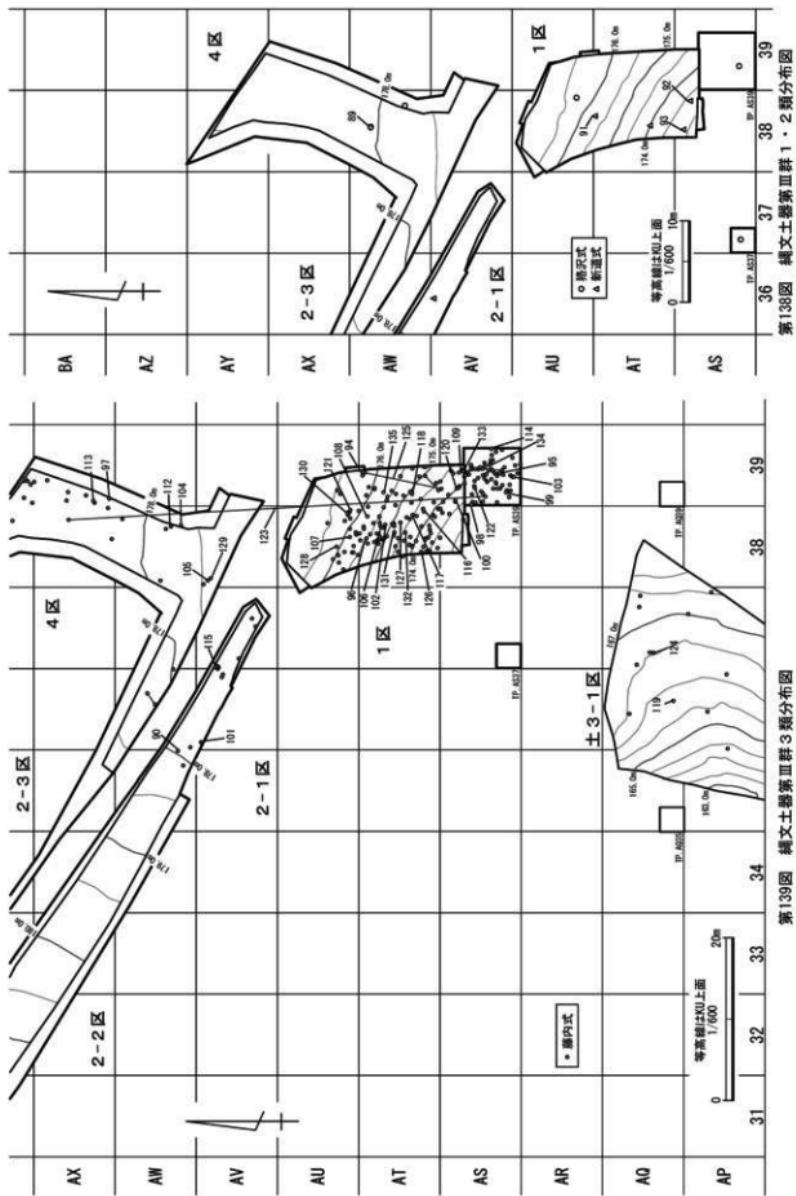
1類(洛沢式)

89を1類とした。やや斜位の低い隆帯の脇に、先端が角状をなす棒状工具で連続刺突した角押文が施されている。その脇には三角押文か。

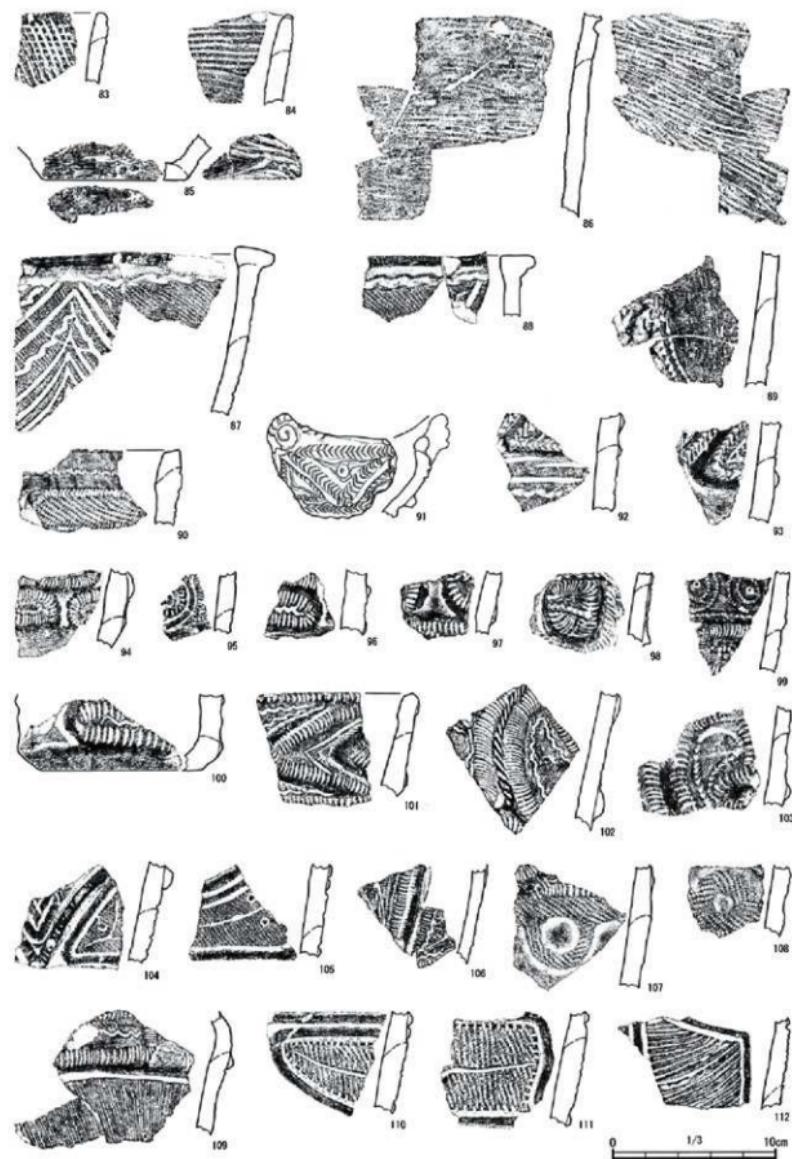
2類(新道式)

91～93を2類とした。91は口縁部のみの破片資料である。口縁部に渦巻き状のモチーフが貼り付けられている。そのモチーフとその脇の口唇部には刻目が施されているが、ナデにより消えかかっている。口唇部直下には細い粘土紐を貼り付け、三角形の区画をなす。さらに三角押文を施した上で、内部に円形モチーフを抱くような三叉文を配置している。92・93は91のように、脇に三角押文を施した隆帯等が





第138図 編文土器第III群1・2類分布図



第140図 繩文土器第I群～第III群1～3類

見える。

3類(藤内式)

90・94～135は3類とした。出土位置はA S・A T38・39グリッドに濃い分布を示す。また4区、富沢内野山I西遺跡1区にも散布が認められる。90は口縁部のみの破片資料で、平坦な口唇部を持ち、器面調整の最後にミガキで丁寧に仕上げられている。口唇部直下に三角押文を施している。その下位には梢円形状の区画か。三角押文で縁取られた区画内には縄文が充填されている。

94～99は幅の狭いキャタピラ文が施された資料で、そのうち94～97は胴部のみの破片資料である。粘土紐を貼り付けて低平な隆線に仕上げ、脇にキャタピラ文を施している。梢円形の区画を設けたものか。98は隆線で円形の区画を設けている。区画内隆線脇にキャタピラ文を施し、最後に横位の角押文か。99は脇を細かな三角押文とキャタピラ文が施された低平な隆線が見える。隆線より上位には三角押文で円形の文様が施される。円形中心部は細かな竹管状の工具で円形刺突文が施されている。

100～103は幅の広いキャタピラ文が施された資料である。100は底部のみの破片資料である。平坦な底部から胴部を直立させている。胴部下端部に隆帶で梢円形に区画し、内部にキャタピラ文と波状文を施している。101は口縁部のみの破片資料である。この口縁部は直線的で、口唇部端部外側にキャタピラ文を施している。口唇部直下には粘土紐を「く」の字状に貼り付け、ナデ調整して低い隆帶に仕上げている。隆帶の脇はキャタピラ文と三角押文が施されている。「く」の字状の区画の隙間に波状の沈線文が充填されている。102・103は胴部のみの破片資料である。隆線や低い隆帶が大きく蛇行する。それらの脇にはキャタピラ文が施されている。区画内には前者は波状文、後者には三角押文が施されている。102の隆線には刻目文が施されている。

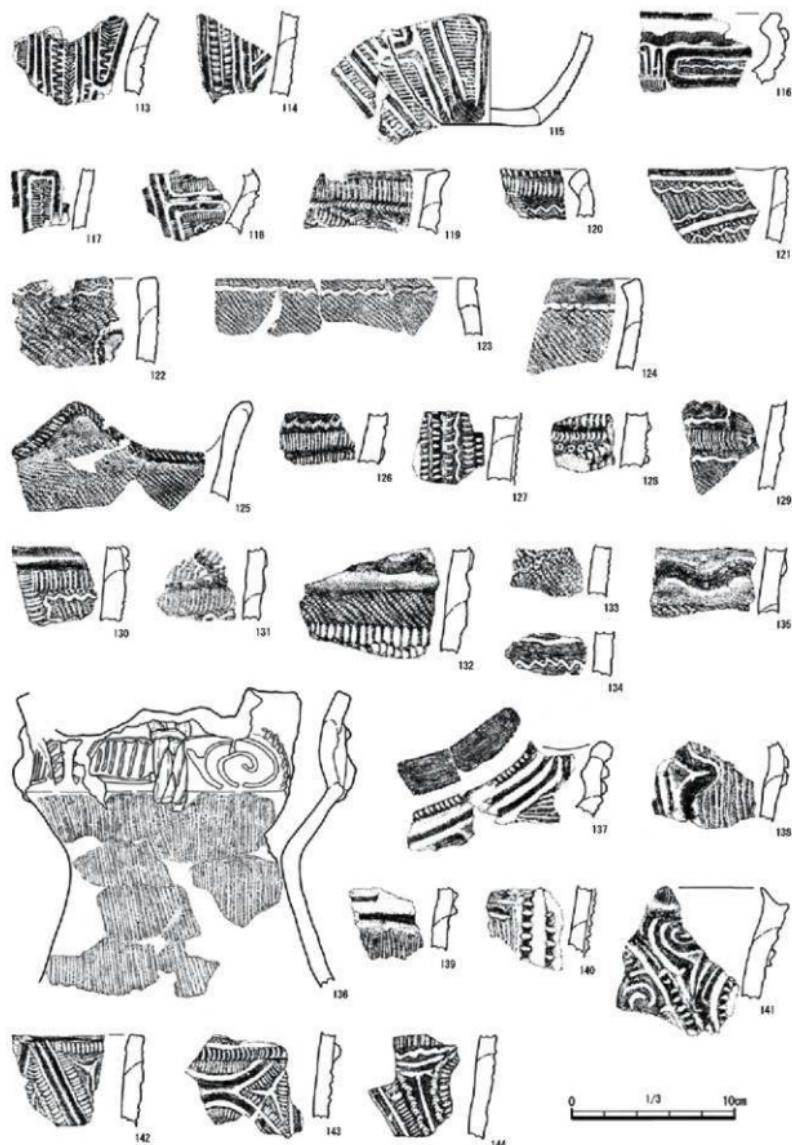
104～108は縄文が施された資料である。そのうち104・105は文様から同一個体と考えられる。隆帶及び低平な隆帶で三角形の区画を成したものか。区画内には縄文を施したうえに、三叉文を施している。その脇には竹管状の工具で円形刺突文を施す。106はやや斜位に隆帶を設けている。隆帶で区切られた区画内に縄文が施されている。107・108は環状を呈する低平な隆帶に縄文が施されている。両者の隆帶とも指頭による磨り消しで仕上げられたものか。109は胴部中位付近の破片資料か。横位に粘土紐を貼り付け、低い隆帶なし、その上部にキャタピラ文を梢円に施す。その内部に波状文を施している。隆帶より下位には縦位に条線文を施した後に、隆帶脇に沈線文を施している。

110～112は半截竹管状の工具を用いた隆帶により区画が設けられた資料である。110は梢円形、111・112は四角形に区画され、110・111は区画内に縄文を充填し、区画中央に横位の沈線文を施す。112は区画内に斜位の条線文を充填する。

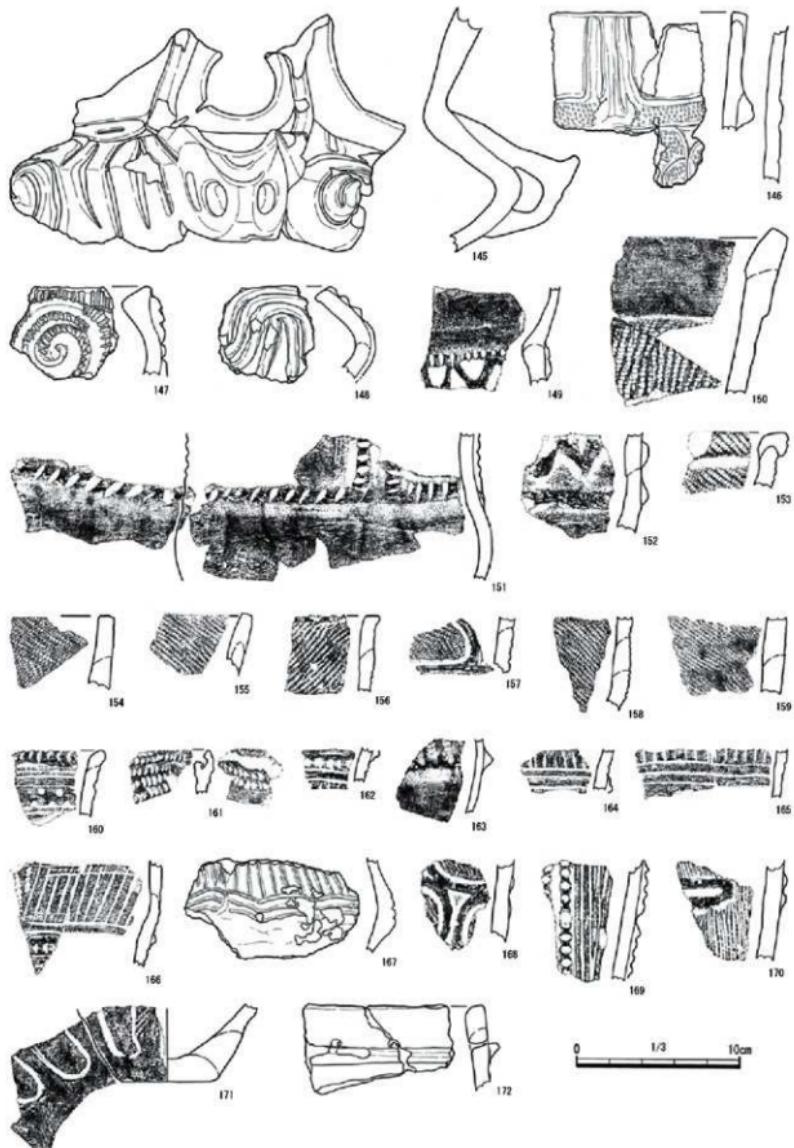
113～115は半截竹管状の工具を多用し、縦位方向の文様が卓越した資料である。113・114は胴部の破片資料である。縦位に半截竹管状の工具により平行沈線を施している。前者はキャタピラ文、交互刺突文が施されている。114は角押文か。115は底部から胴部下位が残存した資料である。平坦な底部から胴部をやや内湾気味に立ち上げている。縦位に半截竹管状の工具で平行沈線文を施し、長三角形状の区画内、沈線文毎の間際に沈線文で充填する。低平な隆帶には刻目か。

116～118は隆帶等により狭長な長方形に区画された資料である。パネル文か。116は内湾した口縁部のみの破片資料である。波状に巡らせた隆帶には連続して小刻みに爪形文が施されている。半截竹管状の工具による平行沈線で、狭長な長方形の区画を設けている。区画内にはキャタピラ文と波状の沈線文が充填されている。117・118は胴部のみの破片資料である。半截竹管状の工具による沈線文で長方形の区画をなし、区画内にキャタピラ文と三角押文を施している。

119・120は隆帶等による区画がなされていない資料である。119は口唇部を強く外方に引き出した口

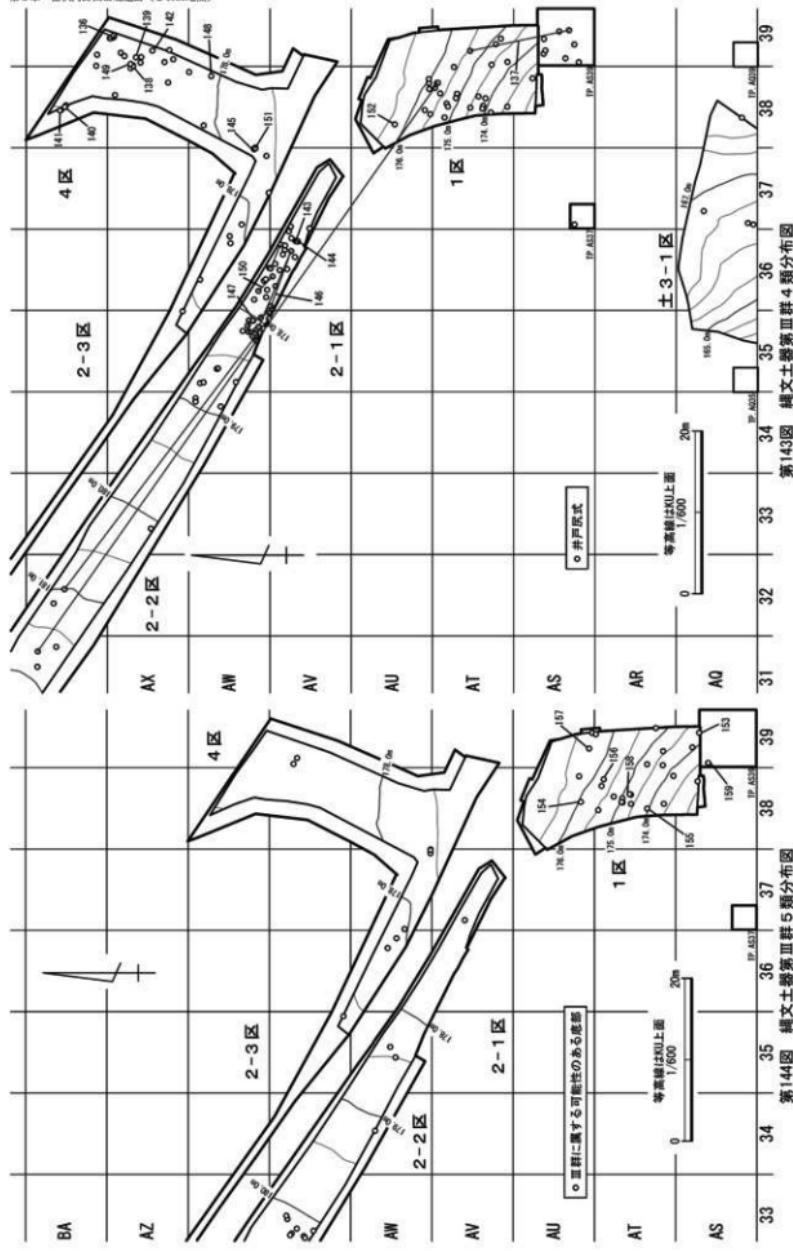


第141図 縄文土器第Ⅲ群3・4類



第142図 縄文土器第III群～第VI群

第3章 富沢内野山田北道路(C.R.36地点)



第144図 繩文土器第III群 5類分布図

縁部である。口唇部直下に幅の広いキャタピラ文、その下位に三角押文が施されている。キャタピラ文と三角押文の接点が微隆起線状の効果を生んでいる。

121～125は主に繩文を施した口縁部のみの破片資料である。125以外は口唇部は平坦に仕上げている。121は波状口縁の波底部付近か。口唇部直下に沈線文を施し、その下位に繩文を施す。繩文を施した後、波状文を施している。122・123は口唇部直下より繩文を施し、後者は三角押文を波状に施す。124は微かに内湾する口縁部で、口唇部を強く押して平坦に仕上げている。口唇部直下はナデのみ。口唇部より約1.5cmの位置に横位の波状文を施し、下位の繩文を区画する。125は波状口縁の波頂部から波底部にかけての資料か。折り曲げ、肥厚させた口唇部外面を隆帯となし、刻目文を施している。

126～135は胴部のみの破片資料である。三角押文、キャタピラ文、円形刺突文等の文様が施されている。

4類(井戸尻式)

136～152を4類とした。出土位置は1区・2～1区・4区に比較的多く分布する。特にAV・AW 35・36グリッド付近は濃い分布を示す。

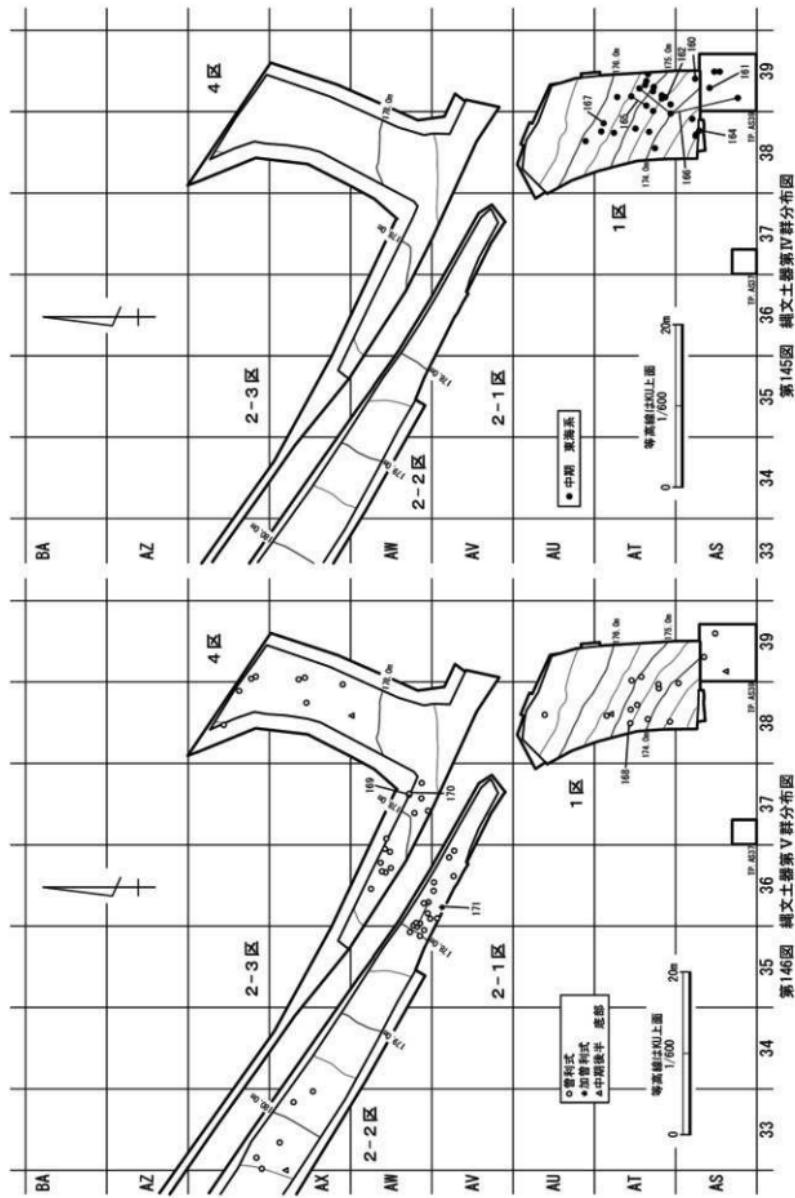
136は口縁部から胴部下位付近まで残存した資料である。残存状況から胴部下位は算盤玉状に膨れていたものと推定される。膨れた胴部下位が胴部中位付近で括れ、また胴部は直線的に立ち上がり、直立気味に屈折、口縁部はやや外反する。口唇部は平坦に仕上げている。口縁部で文様は特に見られず、胴部上位は粘土紐を貼り付けて隆帯としている。中には粘土紐を編上げて隆帯としたものもある。隆帯で区画された部位には棒状工具で渦巻き文や横円文等が施されている。下半部は条線文を施す。

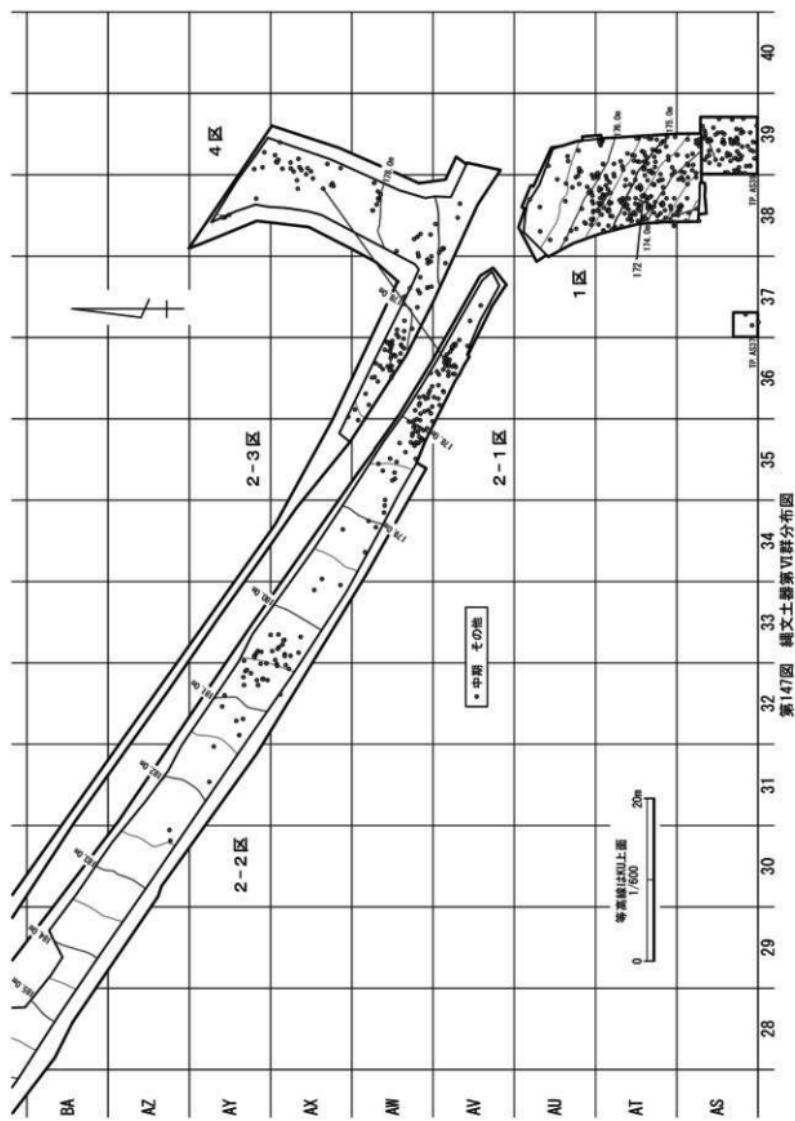
137～140は条線文を施した資料である。137は波状口縁の波頂部から波底部にかけての破片資料か。波頂部は本来、突起を2個付けたものか。口唇部は断面を「T」字状に仕上げ、外面側は刻目文を施す。口唇部に沿って半截竹管状の工具を用いた隆帯を2条施し、その下位に横位条線文を施す。138～140は縦位の条線文が施されている。141は外反する口縁部か。口唇部は内面側縁部を強く鋭く、外面側縁部を弱くかつ太めに引き出す。口唇部直下には斜位に隆帯を貼り付け、刻目文を施している。その間際に渦巻き状のモチーフが描かれている。

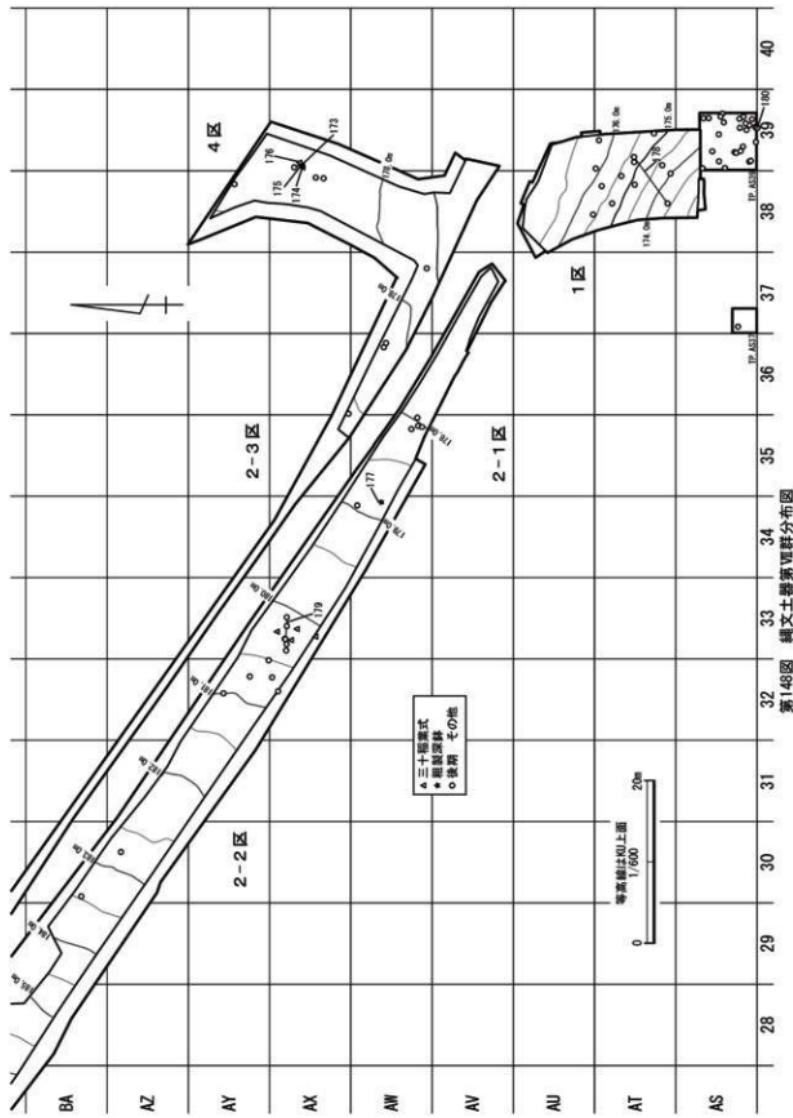
142～144は三角形の区画内に三叉文が施された資料である。胴部から口縁部へ直線的に立ち上げている。口唇部は平坦に仕上げている。口唇部直下より半截竹管状の工具による平行沈線文で三角形の区画をなし、区画内中央に三叉文が施されている。

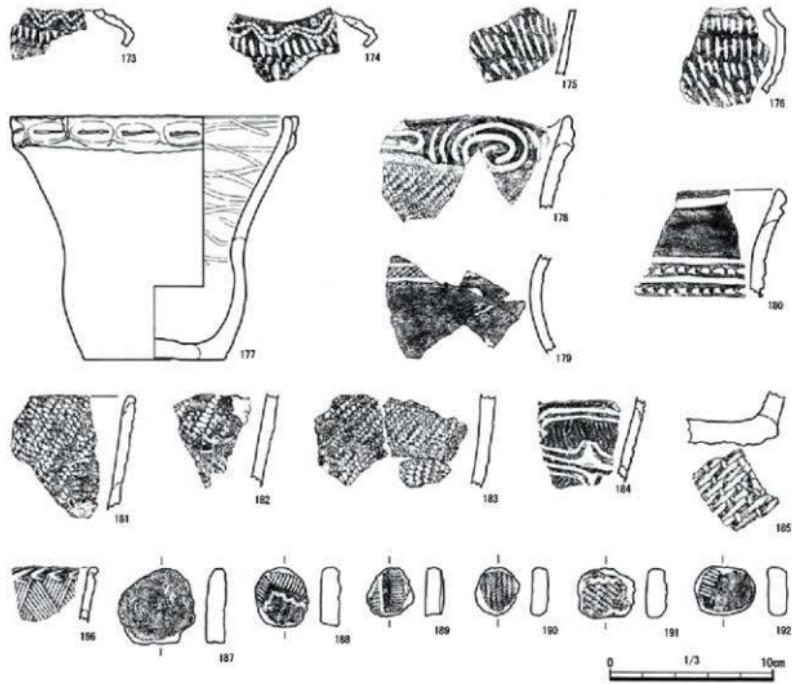
145は口縁部から胴部上位が残存した資料である。口縁部には装飾突起が付けられていたが失われ、内面側の透かし穴のみ残存する。装飾突起の下位には眼鏡状の突起が設けられている。その突起の左右に間隔をおいて渦巻き状のモチーフが配置されている。同一個体の破片が多く出土しているが、残存状態が悪く、復原できなかった。

146は口縁部から胴部上位まで残存した資料である。胴部から口縁部まで直線的に立ち上がり、口唇部は平坦に仕上げている。口唇部から約5cmの位置に低平で幅広な隆帯を横位に巡らせていている。また口唇部から横位の隆帯へ3本の低平な隆帯を垂下、接続させている。接続部には鼻状の突起を設けている。横位の隆帯には細く鋭い棒状の工具で刺突文を施している。また隆帯の脇は指頭によるものか沈線を施す。横位の隆帯より下位にも何らかのモチーフが描かれ、刺突文が施されている。147・148は内湾する口縁部のみの破片資料である。147は渦巻き状に隆帯が貼り付けられている。隆帯は細い竹管状の工具による刺突文が施されている。148は粘土紐を貼り付けているが、大きく褶曲させている。149・152は胴部のみの破片資料である。両者とも横位の隆帯と鋸歯状の隆帯を貼り、前者の横位隆帯には刻目が施されている。150は口縁部から胴部上位にかけて残存した資料である。口縁部まで直線的に立ち上げ、









第149図 繩文土器第VII群～第X群・土製品

口唇部は平坦に仕上げている。口唇部から約4.5cmの位置に段が設けられ、それより下位に縄文を施している。151は胴部下位が残存した資料で、136と同様算盤玉状に膨らんだ胴部下位である。横位に隆帯を貼り付けた後に、2本の隆帯を縦位に接続する。隆帯には刻目文が施されている。

5類(その他)

153～159は5類に分類した。主に縄文のみ施文された資料で型式名が判然としない。153～156は口縁部、157～159は胴部のみの破片資料である。157は縄文を施した後に、半截竹管状の工具で施文か。

第IV群：縄文時代中期前半(第142・145図 第34表 写真図版58)

第III群と時期としては重複するが、縄文時代中期前半の東海系と思しき土器群を抽出・集成して第IV群に分類した。出土位置は1区でもAU38グリッドより南東に限定される。

160～167は第IV群に分類した土器である。そのうち160・161は口縁部のみの破片資料である。160は口唇部付近を軽く外反させる。丸く仕上げられた口唇部には刻目文が観察されるが、調整最終時のナデにより消えかかっている。口唇部直下には半截竹管状の工具による横位の沈線文が施され、沈線文同士の間隙に刺突文が施されている。161は口唇部の突起付近か。特異な形状を呈する。内外面共に刺突文

が施されている。162～167は胴部のみの破片資料である。そのうち162～164・166は粘土紐を貼り付けて、隆帯を設けている。162は隆帯直下に刺突文と平行沈線文、163は鈎状に迫り出した隆帯の上位に、浅い刺突文が施されている。164は半截竹管状の工具で縦位に沈線文を施した後に、横位に沈線文を施す。隆帯は破片下端部に辛うじて残存する。166は横位の隆帯の上位に刺突文が施される。また隆帯より上位はやや斜位の平行沈線文を施した後に、横位の沈線文を施している。165は半截竹管状の工具による沈線文が施されている。167は半截竹管状の工具で連弧状の沈線文を横位に施した後に、縦位の沈線文を施す。連弧状の沈線文の下位に微かに瘤状の隆起が2箇所認められる。

第V群：縄文時代中期後半(第142・146図 第34表 写真図版58)

縄文時代中期後半の土器を集めて第V群とした。判明した型式等から1～2類に分類した。

1類(曾利式)

168～170は1類とした。いずれも胴部のみの破片資料で、隆帯を貼り付けている。169は縦位に2本の粘土紐を貼り付けて隆帯となし、刻目を施している。隆帯に並行して半截竹管状の工具により、沈線文を施している。

2類(加曾利式)

171は2類とした。沈線文を施した後に縄文を施している。底部には縞物等の圧痕は見られない。

第VI群：縄文時代中期(第142・147図 第34表 写真図版58)

縄文時代中期と考えられるが、型式名等判然としない資料を集成した。出土位置はAY33グリッド杭付近、AW35・36グリッド付近、AX38・39グリッド付近、AU38・39グリッド以南に濃い分布が見られる。172は口縁部のみの破片資料である。直線的に立ち上げ、口唇部は平坦に仕上げたものか。口唇部から約2.5cmの位置に粘土紐を貼り付け、鈎状に仕上げている。またその上位に3ヶ所ほど穿孔がなされている。小破片のため判然としないが、所謂有孔鈎付土器とも考えられる。

第VII群：縄文時代後期(第148・149図 第34表 写真図版58・59)

縄文時代後期と考えられる土器を集めた。文様等から1～3類に分類した。後期と思しき資料はAT38グリッド以南に比較的多く散布する。

1類(三十稲葉式か)

173～176は1類とした。三十稲葉式と並行期の土器か。173・174は口縁部のみの破片資料である。大きく内側へ屈折した口縁部で、口唇部直下には押引波状文を、その直下に縦位の沈線文を連続して施す。屈折部には竹管状の工具による円形刺突文が施されている。内面は粘土紐の輪積み痕が磨り消されずに残っている。175・176は胴部のみの破片資料である。いずれも細く断面の丸い棒状工具で、短い沈線文を一面に施している。また176は内湾する胴部への施文のため、やや刺突気味に工具が器面にあてがわれている。上位、内側へ屈折する箇所には同じ工具で刺突文を施している。器厚の薄さや胎土、施文から173～176は同一個体の可能性がある。

2類(堀之内式)

178～180は2類とした。178は緩やかな波状を呈する口縁部か。胴部と口縁部の境界は段をなす。緩

やかな波頂部直下に棒状工具で渦巻き文を施す。段より下位には縄文を施している。179は胸部のみの破片資料である。平行沈線文を施した後に、縄文を充填したものか。180は口縁部のみの破片資料である。緩やかに外反させ、口唇部は丸く仕上げている。口唇部直下に沈線文を施す。口唇部から下位約4cmの位置に、複数の横位沈線文を施す。沈線文の間隙に半截竹管状の工具で刺突文を施す。

3類(その他)

177は3類とした。胸部は底部下位付近でやや膨らみ、中位付近で括れる。括れから胸部は直線的に立ち上げる。口縁部には更に粘土紐を貼り、指頭でナデつけて浅い窪みを連続して付ける。窪み毎の境界には指頭のナデにより隆起し、装飾効果を生んでいる。窪みには横位の沈線文が施されているが、最後にナデ調整を施したためか、消えかけた沈線文もある。胸部外面は横位のナデ調整の痕跡が観察され、さらに胸部下半部はミガキの痕跡も微かに残る。内面にもミガキの痕跡が残る。

第VIII群：型式不明(第149図 第34表 写真図版59)

型式・時期不明の資料について第VIII群として集成した。

1類(縄文を基調として施文)

主に縄文以外の特徴が見出せない181～185は1類とした。184は半截竹管状の工具で平行沈線を描き、間隙に縄文を充填している。器厚が薄く、胎土中の金雲母が特徴か。

2類(刺突文他)

186は器厚が薄く、口唇部直下にヘラ状の工具で刺突文を施している。その下位には櫛状工具により複合鋸歯状の文様を施している。施文順序として刺突文が後である。

土製品(第149図 第34表 写真図版59)

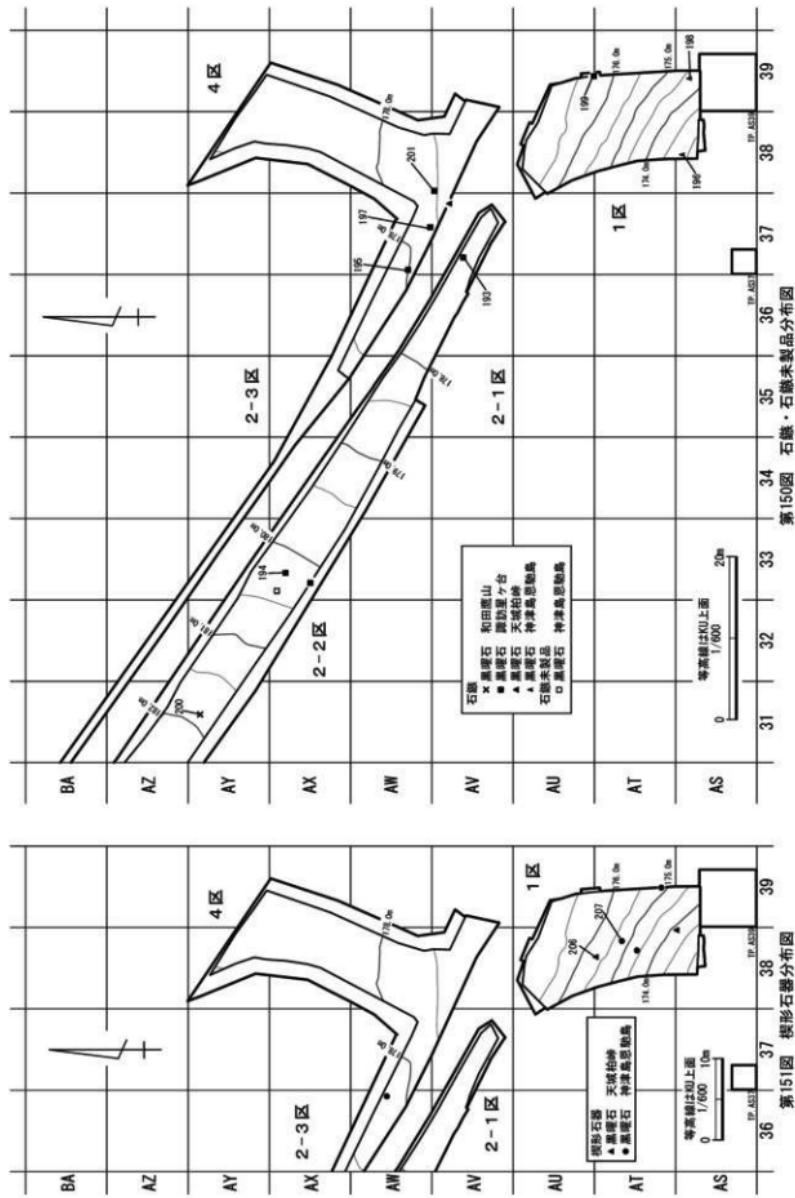
187～192は土製円盤である。土器の細片の周囲を磨り削り、小さな円盤状に仕上げたものである。遺構外から6点出土し、当該遺跡全体では12点出土している。

第34表 繩文時代遺構出土土器観察表①

擇因 番号	原 因 数 量	分類 群 別	グリ ッド	色調 (Rau)	文様調査等	織維	胎土
83	55	I 1	AJ-39	7. SYR5/4	網状の縦糸文。内面に堆積。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
84	55	I 1	AZ-31	7. SYR6/4	波紋状の縦糸文。口唇部に刮目、条縫。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
85	55	I 3	AU-38	7. SYR6/2	内面に指痕。内面に条縫。	有	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
86	55	I 2	AB-38	7. SYR6/4	内面に条縫。刺突。	有	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
87	55	II	AT-38	7. SYR6/2	棒状火呪による沈縫。波状文。縞文。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、雲母多、輝石、白色岩片
88	55	II	AT-38	7. SYR6/2	棒状火呪による沈縫。波状文。縞文。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、雲母多、輝石、白色岩片
89	56	I 1	AM-38	7. SYR6/6	施縫跡付。角押文。三角押文。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
90	56	I 3	AT-38	7. SYR6/4	三角押文。ミカド。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
91	56	III 2	AT-38	7. SYR6/4	波状火呪。渦巻き状施縫。口唇部に刮目。隆起縫跡付。三角押文。玉串三叉文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母
92	56	III 2	AS-38	SYR5/4	施縫跡付。三角押文。平継竹管状工具による沈縫。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
93	56	III 2	AS-38	SYR5/4	施縫跡付。三角押文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
94	56	III 3	AT-38	SYR6/6	施縫跡付。キヤタビラズ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
95	56	III 3	AS-38	SYR4/4	施縫跡付。キヤタビラズ。沈縫。	無	石英、輝石、白色岩片
96	56	III 3	AT-38	SYR4/4	施縫跡付。キヤタビラズ。三角押文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
97	56	III 3	AS-39	SYR4/4	施縫跡付。キヤタビラズ。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
98	56	III 3	AS-39	SYR4/4	施縫跡付。キヤタビラズ。角押文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
99	56	III 3	AS-39	7. SYR6/6	施縫跡付。キヤタビラズ。三角押文。竹管状工具による四形刺突。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
100	55	III 3	AD-39	SYR5/6	底部。施縫跡付。キヤタビラズ。波状文。内面にナデ。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
101	56	III 3	AH-36	7. SYR5/4	口縫線。施縫跡付。キヤタビラズ。三角押文。波継。外側面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
102	56	III 3	AT-38	SYR4/4	施縫跡付。キヤタビラズ。波状文。刺突。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、輝石、白色岩片
103	56	III 3	AS-38	SYR5/6	施縫跡付。キヤタビラズ。三角押文。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
104	56	III 3	AM-38	SYR4/6	施縫跡付。三叉文。次縫。円形斜尖。縞文。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、雲母多、輝石、白色岩片
105	56	III 3	AV-38	SYR6/6	沈縫。円形斜尖。縞文。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、雲母多、輝石、白色岩片
106	56	III 3	AT-38	SYR4/6	施縫跡付。キヤタビラズ。波継。縞文。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
107	56	III 3	AD-38	SYR4/4	施縫跡付。キヤタビラズ。縞文。潮痕。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片多
108	56	III 3	AT-38	7. SYR4/4	施縫跡付。キヤタビラズ。波継。潮痕。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
109	56	III 3	AS-38	SYR4/6	施縫跡付。キヤタビラズ。皮状文。次縫。次縫。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
110	56	III 3	-	7. SYR7/2	施縫跡付。波継。次縫。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
111	56	III 3	-	7. SYR7/3	施縫跡付。皮状文。次縫。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
112	56	III 3	AN-38	7. SYR7/4	施縫跡付。皮状文。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
113	56	III 3	AJ-38	SYR4/6	半継竹管状工具による平行波継。キャタビラズ。交叉刃刻文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
114	56	III 3	AD-39	SYR5/6	半継竹管状工具による平行波継。角押文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
115	55	III 3	AV-37	7. SYR7/6	施縫跡付。波継。半継竹管状工具による平行波継。内面にナデ。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
116	56	III 3	AT-38	SYR7/6	施縫跡付。波継。半継竹管状工具による平行波継。キャタビラズ。交叉刃刻文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
117	56	III 3	AT-38	7. SYR8/6	半継竹管状工具による波継。キャタビラズと三角押文。(バヘル文)	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
118	56	III 3	AT-39	7. SYR8/6	半継竹管状工具による波継。キャタビラズと三角押文。(バヘル文)	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
119	56	III 3	AD-39	10YRS/3	キヤタビラズ。三叉文。波継。竹管状工具による波継。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
120	56	III 3	AT-39	SYR7/6	口唇部下に刮目。キャタビラズ。次縫。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
121	56	III 3	AT-39	7. SYR7/4	波紋状。次縫。波状文。縞文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
122	56	III 3	AS-39	SYR7/4	口縫線。次縫。縞文。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
123	56	III 3	AJ-38	7. SYR7/3	口縫線。三叉押文。縞文。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、雲母、輝石、白色岩片
124	56	III 3	AD-37	SYR4/4	波状文。皮状文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
125	57	III 3	AT-39	SYR4/4	折りしろ口付。口唇部下に刮目。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
126	57	III 3	AT-39	7. SYR4/6	施縫跡付。波継。三叉文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
127	57	III 3	AT-38	SYR4/6	施縫跡付。キヤタビラズ。次縫。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
128	57	III 3	AD-38	7. SYR4/6	施縫跡付。キヤタビラズ。竹管状工具による四形刺突。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
129	57	III 3	AV-38	7. SYR2/3	施縫跡付。キヤタビラズと三叉押文。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
130	57	III 3	AD-38	SYR2/2	施縫跡付。キヤタビラズ。次縫。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
131	57	III 3	AT-38	7. SYR5/4	施縫跡付。キヤタビラズ。次縫。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
132	57	III 3	AT-38	10YRS/4	施縫跡付。キヤタビラズ。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
133	57	III 3	AD-39	SYR4/6	波紋。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
134	57	III 3	AT-39	7. SYR6/4	波継。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
135	57	III 3	AT-39	7. SYR6/4	施縫跡付。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
136	55	III 4	AJ-39	SYR6/6	施縫跡付。棒状火呪による渦巻き文。縞文。次縫。	無	白色粒子多、石英、白色岩片
137	57	III 4	AT-39	SYR7/6	波紋状。口唇部外側に刮目。施縫跡付。条縫。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
138	57	III 4	AJ-39	SYR4/6	施縫跡付。半継竹管状工具による条縫。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
139	57	III 4	AK-39	7. SYR5/4	施縫跡付。半継竹管状工具による条縫。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
140	57	III 4	AT-38	7. SYR4/2	施縫跡付。条縫。半継竹管状工具による条縫。沈縫。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
141	57	III 4	AT-38	7. SYR4/4	施縫跡付。条縫。口唇部下に刮目。縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
142	57	III 4	AJ-39	SYR4/2	半継竹管状工具による平行条縫。キャタビラズ。三叉文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石
143	57	III 4	AT-38	SYR4/6	施縫跡付。平行条縫。キャタビラズ。三叉文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
144	57	III 4	AV-36	SYR4/6	波紋。キヤタビラズ。三叉文。三角押文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
145	57	III 4	AD-37	7. SYR5/6	縮縫状突起。施縫跡付。沈縫。	無	白色粒子、雲母
146	57	III 4	AT-39	SYR5/6	施縫跡付。沈縫。刺突。内面にナデ。	無	白色粒子、石英、雲母
147	57	III 4	AD-35	10YRS/4	口唇部にミカド。施縫跡付。竹管状工具による刺突。	無	白色粒子、石英、雲母、白色岩片、剪片
148	57	III 4	AB-38	7. SYR5/4	施縫跡付。内面にナデ。	無	白色粒子、石英、雲母、白色岩片

第34表 純文時代遺構出土土器観察表②

桜田 番号	分類 部類	グリ ッド	色調(Rau)	文様調査等	織維	胎土
149	57	Ⅳ	AK-39	7.SYRS/6 亂帯貼り付け。斜目。内面に擦痕。	無	白色粒子多。石英、雲母多。白色岩片
150	57	Ⅳ	AK-36	SYRA/4 口縁部。綺文。外側にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
151	55	Ⅲ	4	AM-38 7.SYRS/4 亂帯貼り付け。斜目。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母。白色岩片
152	57	Ⅲ	4	AD-38 SYRA/6 亂帯貼り付け。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
153	57	Ⅲ	5	AS-39 SYRA/2 口縁部。綺文。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
154	57	Ⅲ	5	AD-38 7.SYRA/3 口縁部。綺文。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
155	57	Ⅲ	5	AT-38 SYRS/6 口縁部。綺文。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
156	57	Ⅲ	5	AT-38 SYRA/4 亂帯貼り付け。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
157	57	Ⅲ	5	AD-39 SYRA/6 半圓竹管状工具による沈縫。綺文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石
158	57	Ⅲ	5	AT-38 7.SYRS/4 内外面に指捺痕。内面にナデ。綺文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
159	57	Ⅲ	5	AS-39 SYRS/6 綺文。内面に擦痕。	無	白色粒子。黑色粒子。白色岩片
160	58	IV	AS-39	SYRA/1 口縁部に斜目文。ナデ。沈縫。斜尖。	無	白色粒子。赤色粒子少。石英、輝石
161	58	IV	AS-39	2.SYR/3 亂帯貼り付け。内面に斜尖。	無	白色粒子。石英、雲母。白色岩片
162	58	IV	AT-39 10YRS/4 亂帯貼り付け。平行沈縫。斜尖。内面に指捺痕。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片	
163	58	IV	AD-38 10YRS/3 亂帯貼り付け。斜尖。	有	白色粒子。黑色粒子。赤色粒子少。石英	
164	58	IV	AS-38 7.SYRS/3 亂帯貼り付け。沈縫。内面に指捺痕。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片	
165	58	IV	AT-39 7.SYRS/3 半圓竹管状工具による沈縫。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母。白色岩片	
166	58	IV	AT-38 10YRS/1 亂帯貼り付け。沈縫。斜尖。内面に指捺痕。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片	
167	58	IV	AT-38 7.SYRS/4 半圓竹管状工具による沈縫。内外面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母。白色岩片	
168	58	V	1	AT-38 SYRS/6 亂帯貼り付け。沈縫。綺文。	無	白色粒子多。黑色粒子。石英、白色岩片
169	58	V	1	AM-37 7.SYRS/4 亂帯貼り付け。沈縫。内面に指捺痕。	無	白色粒子。黑色粒子。石英
170	58	V	1	AD-37 SYRA/6 亂帯貼り付け。沈縫。内面にナデ。	有	白色粒子多。黑色粒子。石英、白色岩片
171	58	V	2	AV-36 SYRS/6 虹筋。道縫。綺文。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母。白色岩片
172	58	VII	AT-38 SYRA/4 口縁部。亂帯貼り付け。穿孔。有孔附付土器。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母多。白色岩片	
173	58	VII	1	AK-39 SYRS/6 押打波状文。沈縫。凹形斜刺。	無	白色粒子。石英少。雲母
174	58	VII	1	AK-39 SYRS/6 押打波状文。沈縫。凹形斜刺。	無	白色粒子。石英多。雲母
175	58	VII	1	AK-39 SYRS/6 伸狀工具による沈縫。	無	白色粒子。石英多。雲母
176	58	VII	1	AK-39 7.SYRS/6 伸狀工具による沈縫。斜尖。	無	白色粒子多。石英、雲母
177	58	VII	3	AM-34 SYRS/6 亂帯貼り付け。沈縫。内面にナデとミガキ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
178	58	VII	2	AT-39 7.SYRS/6 波状口縫。伸狀工具による波状引き。綺文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
179	58	VII	2	AK-33 7.SYRS/4 平行斜刺。綺文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石
180	58	VII	2	AD-39 10YRS/1 沈縫。半圓竹管状工具による斜尖。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母。輝石
181	59	VIII	1	AT-32 4.SYRS/4 口縫部。綺文。内面にナデ。	有	白色粒子。石英、雲母
182	59	VIII	1	AT-32 7.SYRS/4 綺文。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英
183	59	VIII	1	AK-37 SYRS/6 綺文。内面に擦痕。	無	白色粒子多。輝石多。白色岩片
184	59	VIII	1	AT-38 7.SYRS/4 半圓竹管状工具による平行沈縫。綺文。内面にナデ。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母多
185	59	VIII	1	AM-36 7.SYRS/4 沈縫。底に植物性圧痕。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
186	59	VIII	2	AD-38 SYRS/8 口縫部下面にヘラ状工具による斜尖。複合綺文。内面にナデ。	有	白色粒子。石英、雲母
187	59	VIII	-	SYRA/6 土製円盤。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母。輝石。白色岩片多
188	59	VIII	AD-39	SYRA/4 土製円盤。キャッタビラ文。三角押文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石。白色岩片
189	59	VIII	AD-38	SYRA/4 土製円盤。キャッタビラ文。キャッタビラ文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母。輝石。白色岩片
190	59	VIII	AD-36	SYR/3/1 土製円盤。綺文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英多。輝石多。白色岩片
191	59	VIII	AT-38	SYRA/4 土製円盤。次緻。綺文。	無	白色粒子多。黑色粒子。石英、雲母多。輝石。白色岩片
192	59	VIII	AT-38	SYRA/6 土製円盤。キャッタビラ文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母多。輝石。白色岩片



(2) 石器

尖頭器類(第119・120図 第29表 写真図版50)

尖頭器及び尖頭器の未製品と考えられる資料は2点出土している。これらは縄文時代草創期に位置付けられる。3は4区A Y38グリッド、調査区北壁際にて出土している。石材は箱根畠宿産黒曜石である。未製品と考えられ、側縁の一部に調整が施されている。4はAW35グリッドから出土した。石材はホルンフェルスである。先端部が折損している。風化のため剥離痕が不明瞭である。有舌尖頭器である。

石鎌(第150・155図 第35・36表 写真図版60)

193~201は石鎌である。出土しているのは全て打製石鎌の無茎鎌である。1~4区まで散発的に出土し、いずれかの位置で集中する傾向は特に窺うことは出来ない。石材は全て黒曜石である。

193・194は抉りが深く入るため、長脚鎌とも呼称されるタイプである。両者とも諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とし、片方の脚部が折損している。

195~201は抉りが浅いタイプである。195は全体として正三角形を呈する。諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とする。196・197は二等辺三角形を呈するタイプで、前者の片方の側縁には微細な剥離調整は見られない。198は鎌身部が正三角形に近いが、片方側縁の整形がやや歪である。199~201はいずれも折損が見受けられる。

スクレイパー類(第152・155図 第35・36表 写真図版60)

202~204はスクレイパー類に分類した。これらは1区及び4区でのみ出土している。

202・203は削器である。202は緑色凝灰岩を石材とし、片面は自然面が残置する。側縁部は刃部として加工されている。上半部は折損したものか。203は珪質頁岩を石材とする。縱長剥片を利用したものか。側縁部に剥離調整を施し、刃部に仕上げている。204はホルンフェルスを石材とする。抉入削器か。片面の側縁部に抉り状に刃部が加工されている。

石匙(第153・155図 第35・36表 写真図版60)

205は石匙である。石材はホルンフェルスである。片面には自然面が残置する。横長剥片を利用したもので、両面両側縁から剥離調整を施し、つまみを作り出している。

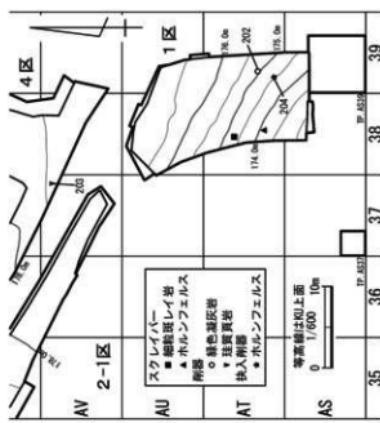
楔形石器(第151・158図 第35・36表 写真図版60)

206・207は楔形石器である。両者とも黒曜石を石材とし、前者は天城柏峠産、後者は神津島恩馳島産である。206は自然面が残置している。遺跡全体では16点出土し、5点が1区からの出土である。

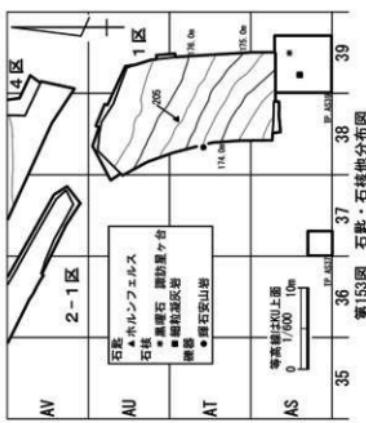
打製石斧(第156・158・159図 第35・36表 写真図版61)

208~216は打製石斧である。遺跡全体では22点出土、そのうち6点が1区で、土3地点確認調査テス・トピットAS39から出土した2点も勘案すれば、石斧の大半は遺跡南半域で多く出土したことになる。

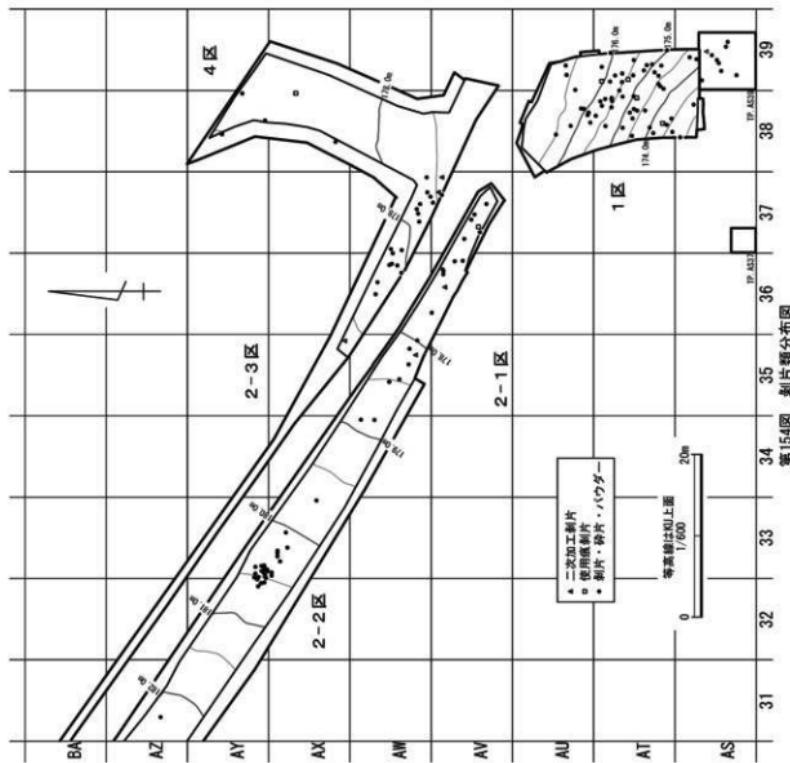
208~212はいずれも側縁部が並行するタイプで短冊形を呈する打製石斧である。208は角閃石片岩を石材とする。基端部付近が窄まり、主面の一部に自然面が残置する。刃部は折損している。209は細粒安山岩を石材とする。基端部は平坦に仕上げている。刃部は折損している。210は緑色凝灰岩を石材とする。完形で、側縁部3箇所に敲打痕の集中部が観察される。柄との繋縫痕は認められない。211・212は共に頁岩を石材とする。211は自然面が残置し、基端部が折損している。212は小型の打製石斧である。刃部の平面形はやや鋭角で、僅かに使用痕、側縁部には敲打痕が観察される。



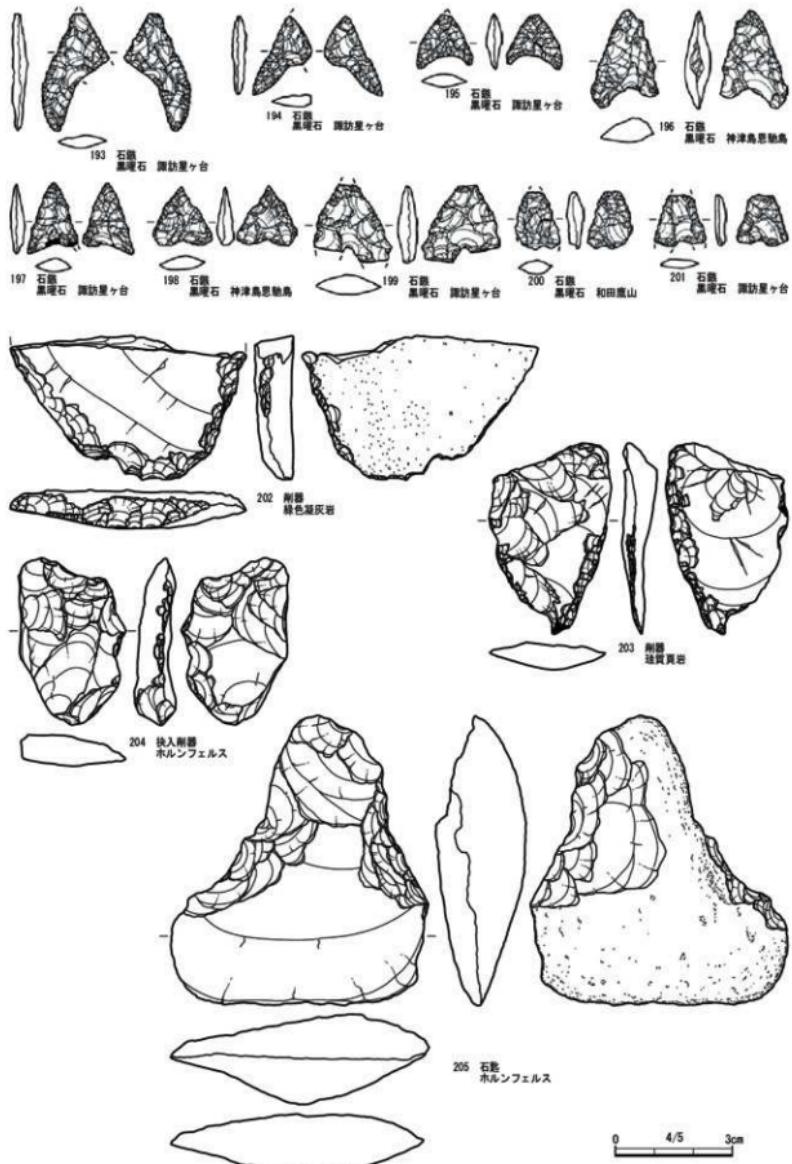
第152図 スクリーパー分布図



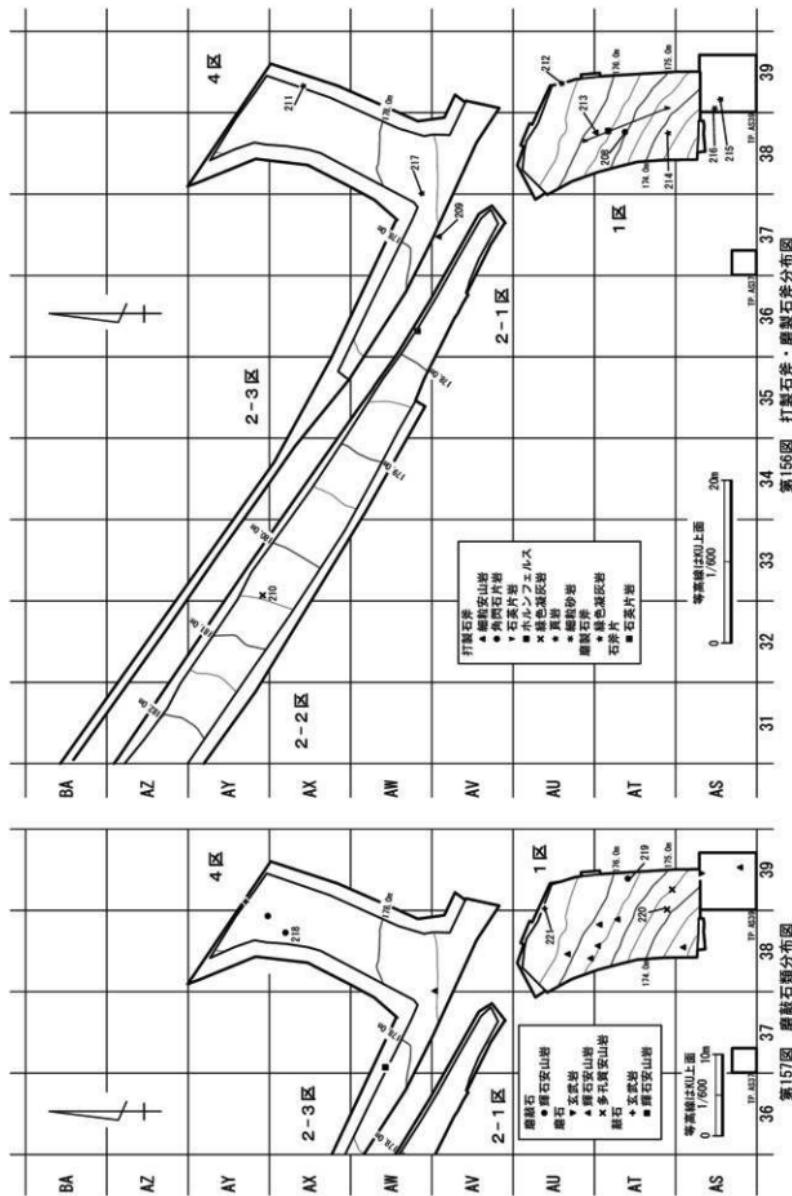
第153図 石塊・石核他分布図



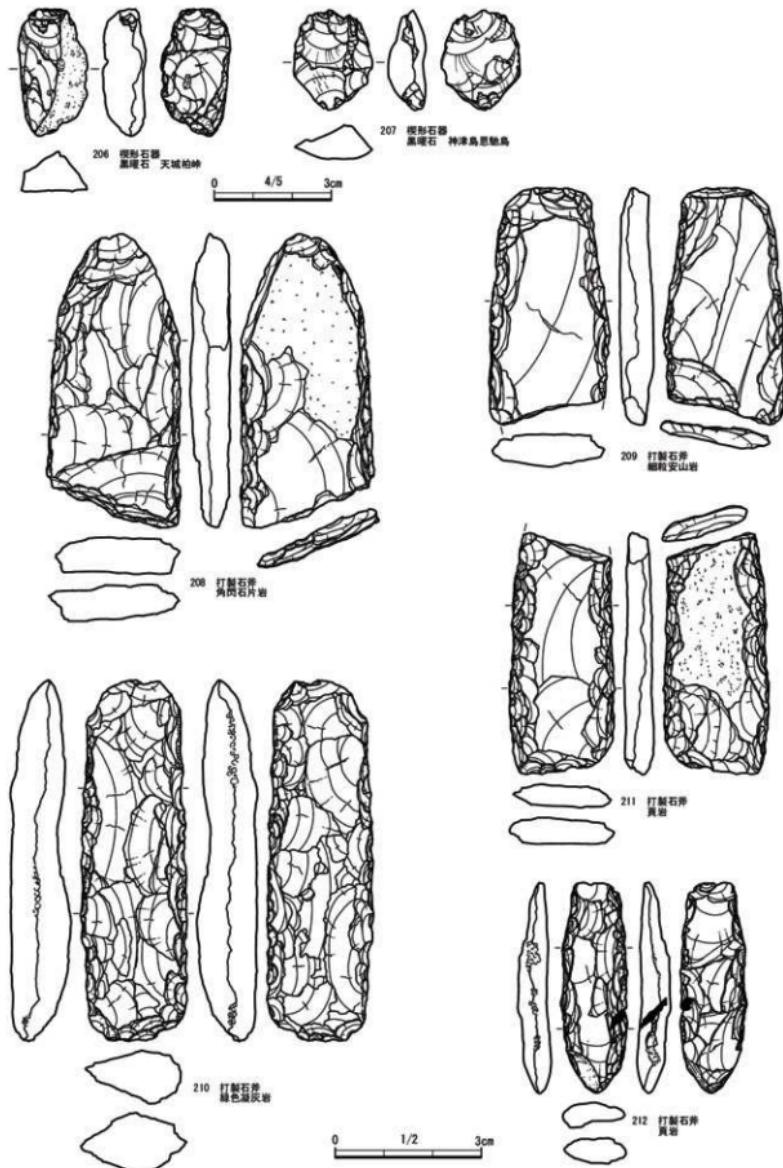
第154図 剥片類分布図



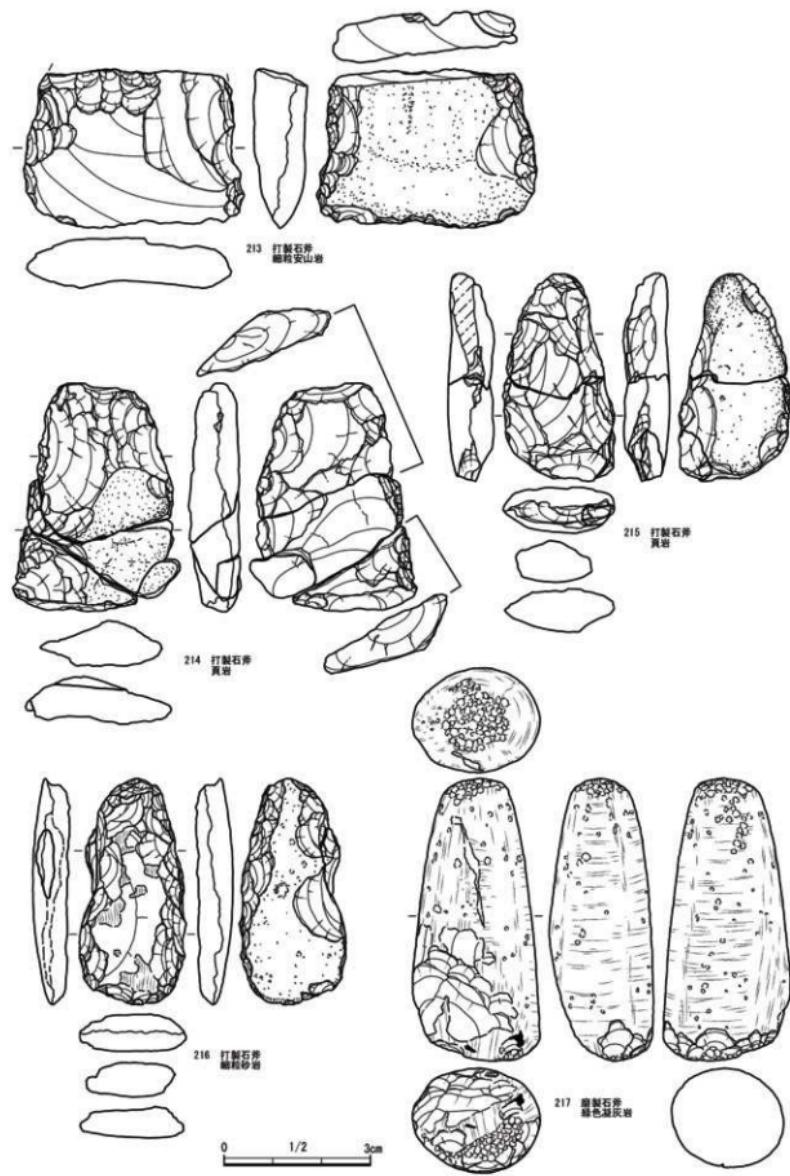
第155図 石器・石器未製品・スクレイバー類・石匙



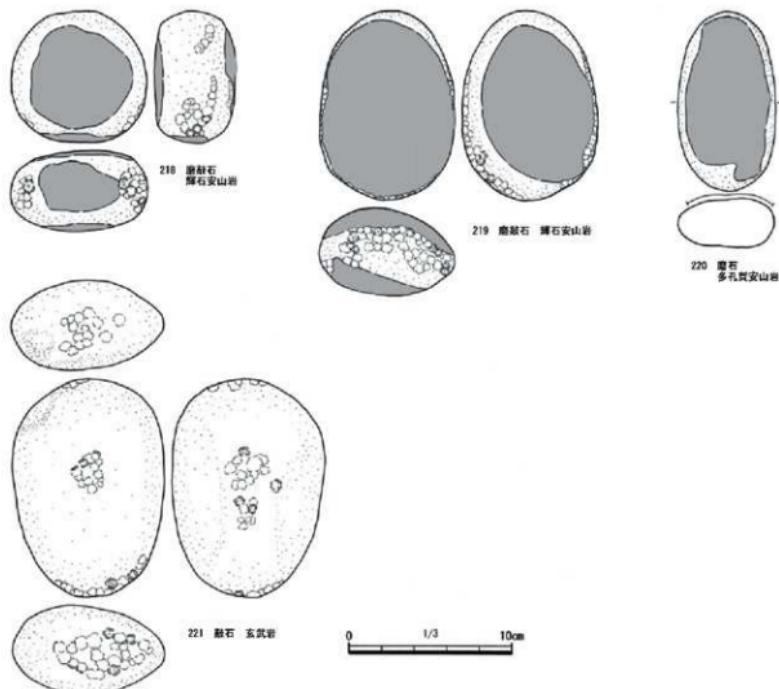
第157図 磨歯石類分布図



第158図 楊形石器・打製石斧



第159図 打製石斧・磨製石斧



第160図 磨歓石類

213~216は撥形を呈する打製石斧である。213は刃部のみの破片資料だが、残存状況から撥形石斧と分類した。片側には自然面が残置し、刃部・側縁部には剥離調整がなされている。また折損後の再加工に由来する剥離が観察される。石材は細粒安山岩である。214・215は頁岩を石材としている。両者とも基部中位で割れている。216は細粒砂岩を石材とする。器面の一部に使用による摩耗痕が観察される。

磨製石斧(第156・159図 第35・36表)

217は磨製石斧である。緑色凝灰岩を石材とする。この磨製石斧の断面形は円～橢円形を呈している点から乳棒状磨製石斧に分類される。刃部は折損している。折損後に再加工、及び敲石に転用されたことに由来するものか、折損面に研磨痕及び敲打痕が観察される。基端面にも敲打痕が観察されるが、製作時のものか転用後のものか判然としない。

磨歓石類(第157・160図 第35・36表 写真図版60)

218~221は磨歓石類である。出土位置は1区を中心に分布する。

218・219は磨歓石である。両者とも両正面は磨り面で、側縁部を中心に敲打痕が観察される。前者は平面が円形、後者は橢円形を呈する扁平な躰を利用している。220は磨石である。多孔質安山岩を石材

とする。扁平で平面が長楕円形を呈する砾を利用している。221は砾石である。玄武岩を石材とする。扁平で平面が楕円形の砾を利用し、主面及び上下基端部に敲打痕が見られる。

第35表 繩文時代石器組成表

石種	石器	石器未認定	尖頭器	スクレーバー	削器	抜き削器	石劍	石核	擦刮石器	打削石斧	磨削石斧	打削石斧片	二次打削石斧片	使用痕跡	剥片	砂片・バウブリー	擦器	磨石	磨石	計		
黒曜石	天城始神	AGKT	3																		5	
	箱根烟管	INHJ																			1	
	神津島恩馳鳥	KZOB	2	1																	39	
	御前里星ヶ台	SHOB	9						1	1											15	
	和田鹿山	WDTY	1																		1	
	産地不明																				176	
	黒曜石片		15	1					1	16							5	6	112	53	237	
玄武岩		Ba																		9	3	
多孔質玄武岩		VBa																			1	
ガラス質黑色安山岩		gAn	1																		6	
細粒安山岩		FAn							1	3											17	
輝石安山岩		An(Py)																			1	
角閃石安山岩		An(Ho)																			2	
多孔質安山岩		VAn																			2	
流紋岩		Rhy							1												1	
繩紋期レイ岩		Fd	1																		1	
鈍晶片岩		GSC																			2	
角閃石片岩		AS								1											1	
白雲母片岩		MS								1											1	
緑色片岩		GS															2				4	
石英片岩		QS									3	1									4	
ホルンフェルス		Hor	1	1	1	1	1	1	5								12	2			24	
重青色ホルンフェルス		Hor(Co)																2				2
繩紋灰岩		FT								1								3				4
緑色凝灰岩		GT					1				1	1					14				17	
頁岩		Sh									4						16	2			22	
珪質頁岩		SSh																			1	
細粒砂岩		FSS															1	2			3	
中粒砂岩		MSS															1	2			1	
	計		17	1	1	2	2	1	1	4	16	20	1	4	9	11	198	64	1	8	15	6382

第36表 繩文時代構造外出土石器計測表

棒番号	写真番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	石材	推定产地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
193	60	252	FB	AV-37	石核	黒曜石	調跡星ヶ台	(3.0)	(1.7)	0.4	0.9	
194	60	2706	FB	AK-33	石核	黒曜石	調跡星ヶ台	(2.0)	1.5	0.3	0.5	
195	60	3200	FB	AM-37	石核	黒曜石	調跡星ヶ台	(1.4)	1.4	0.4	0.5	
196	60	1507	AN	AM-39	石核	黒曜石	神津島恩馳鳥	2.5	1.7	0.6	1.7	
197	60	2853	FB	AM-37	石核	黒曜石	調跡星ヶ台	1.8	1.3	0.4	0.5	
198	60	735	AN	AM-39	石核	黒曜石	神津島恩馳鳥	1.5	1.5	0.4	0.6	
199	60	1779	AN	AM-39	石核	黒曜石	調跡星ヶ台	(2.0)	1.9	0.5	1.4	
200	60	3116	FB	AY-31	石核	黒曜石	和田鹿山	(1.5)	(1.1)	0.3	0.5	
201	60	3112	FB	AV-38	石核	黒曜石	調跡星ヶ台	(1.3)	(1.3)	0.3	0.4	
202	60	2284	FB	AT-39	削器	緑色凝灰岩	(3.5)	6.0	1.0	26.7		
203	60	3138	FB	AV-37	削器	珪質頁岩	4.3	2.0	0.7	9.5		
204	60	578	AN	AT-39	抉入削器	ホルンフェルス	4.2	2.7	1.0	13.3		
205	60	452	AN	AT-38	石核	ホルンフェルス	7.4	6.5	2.2	87.3		
206	60	366	NSC	AT-38	複形石器	黒曜石	天城始神	3.2	1.7	1.0	5.7	
207	60	518	AN	AT-38	複形石器	黒曜石	神津島恩馳鳥	2.5	2.0	0.9	3.7	
208	61	436	AN	AT-38	打削石斧	角閃石片岩	11.6	5.5	1.6	163.3		
209	61	2836	YLM	AV-37	打削石斧	細粒安山岩	(9.2)	4.9	1.3	91.8		
210	61	2643	FB	AY-33	打削石斧	緑色凝灰岩	14.6	4.3	2.5	222.0		
211	61	3005	AN	AK-39	打削石斧	頁岩	(9.9)	4.2	1.2	74.9		
212	61	2226	FB	AU-39	打削石斧	頁岩	8.6	2.7	1.2	35.1		
213	61	969	AN	AT-38	打削石斧	細粒安山岩	(6.5)	8.8	2.0	178.2		
214	61	1374	AN	AT-38	打削石斧	頁岩	9.3	6.6	2.0	151.8		
215	61	1207	FB	AM-39	打削石斧	頁岩	8.4	4.5	1.8	89.2		
216	61	1206	FB	AM-39	打削石斧	細粒砂岩	9.2	4.3	1.5	78.7		
217	60	3093	FB	AM-38	磨削石斧	緑色凝灰岩	11.6	5.0	4.3	375.9		
218	60	3025	AN	AK-38	磨削石	輝石安山岩	8.1	8.4	4.9	525.7		
219	60	672	AN	AT-39	磨削石	輝石安山岩	11.6	8.3	5.4	684.7		
220	60	584	AN	AT-39	磨石	多孔質安山岩	10.9	6.0	3.1	279.7		
221	60	2147	FB	AU-39	敲石	玄武岩	13.3	9.3	5.6	909.8		

第4節 中近世以降の遺構

1 概要

富沢内野山Ⅲ北遺跡の調査では、中近世以降に位置付けられる遺構が1区において確認された。遺構は溝・土坑である。土坑は円形土坑であり、中近世以降に位置付けられるのが一般的である。また円形土坑に切られるように溝状遺構が確認されているので、円形土坑が設置される以前に溝状遺構が機能していたものと考えられる。

2 遺構

(1) 溝状遺構(第161・162図 第37表)

当該遺跡において溝状遺構は6条、殆どが1区内の新期スコリア層上面にて確認されている。そのうち1・4・5号溝状遺構の3条がほぼ並行し、同じ方向へ延びる。

1号溝状遺構は1区AT・AU38グリッドに位置する。1区の南東から北西に縱断し、直線的に延びる溝状遺構である。検出された遺構の計測値では長さ13.6m、最大幅0.8mである。深さは0.1m程度である。この溝状遺構には硬化域が認められる点から道として機能したものと考えられる。1号溝状遺構は2・3号溝状遺構と接し、3号溝状遺構とは交差する。新旧関係では2号・1号・3号溝状遺構の順か。この1号溝状遺構と並走するのが4・5号溝状遺構である。前者は長さ5.42m、最大幅0.64mを測る。深さは0.1m程度である。後者の長さは5.62m、最大幅0.5mを測る。深さは0.1m程度である。4・5号溝状遺構とも硬化域が認められ、道として機能した可能性がある。

6号溝状遺構は1区南端付近に位置する。溝状遺構は北西方向に延びるため、1・4・5号溝状遺構との関連性が窺えるが、硬化域が検出されたとの現地所見が見当たらないため、断定は出来ない。14号土坑と重複しており、時期的に土坑より先行する。

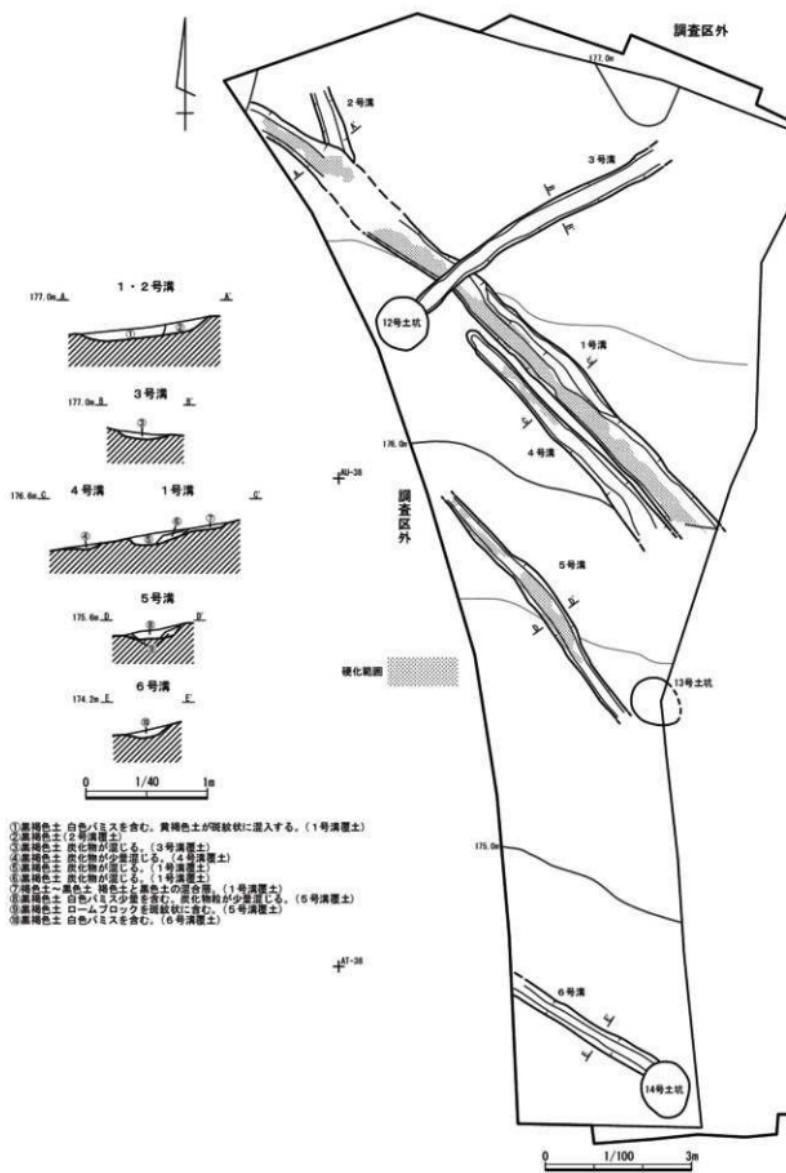
2号溝状遺構は1区調査区北西隅部に位置する。長さは1.6m、最大幅は0.49m、深さは0.1m程度を測る。この溝状遺構は1号溝状遺構から分岐するよう北北西の方向へ延びる。また1号溝状遺構と交差する3号溝状遺構は長さ5.8m、最大幅は0.48mを測る。深さは0.08m程度である。この溝状遺構は北東方向へ延びる。溝の西端は円形土坑である12号土坑と重複し、時期的に土坑より先行する。

(2) 土坑(第162・163図 第37表)

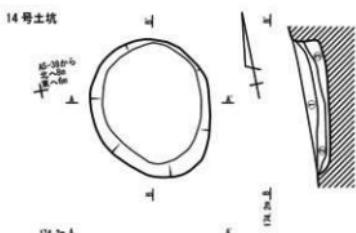
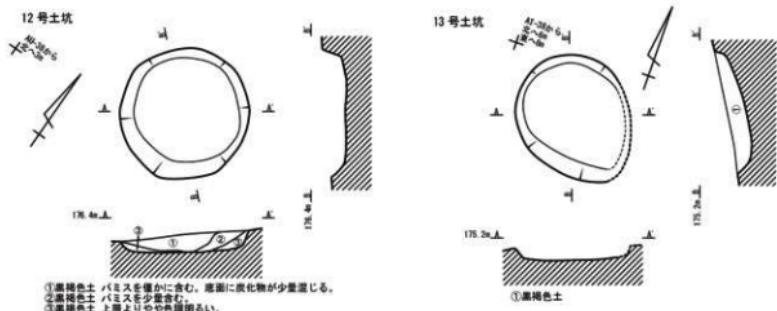
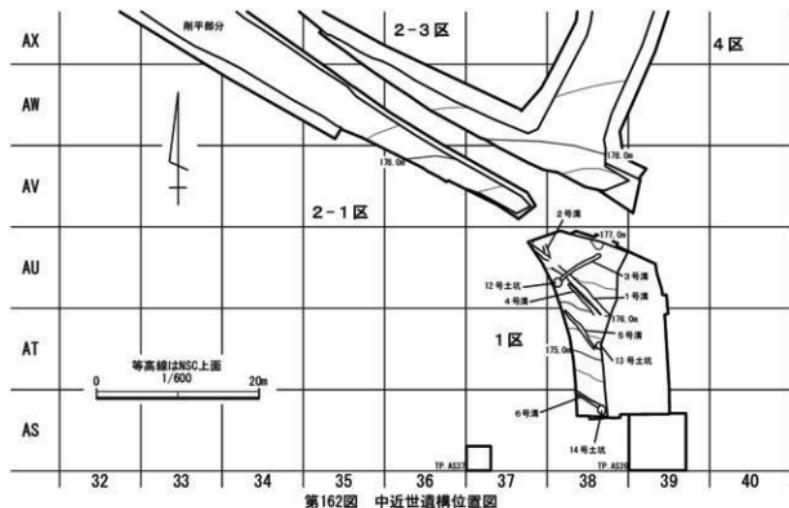
当該遺跡から弥生時代以降のものと考えられる土坑が3基確認されている。いずれの土坑も平面は円形を呈しており、所謂「円形土坑」と考えられる。いずれの土坑も新期スコリア層上面で検出され、径は0.94~1.17mを測る。深さは検出面から0.20~0.33mであり、平坦な底面を持つ。

第37表 中近世遺構計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土器	石器	礫	炭化物	計	備考
12号土坑	SF04	AU-38	NSC	1.06	1.04	0.20						
13号土坑	SF20	AT-38	NSC	1.00	0.94	0.29						
14号土坑	SF05	AS-38	NSC	1.17	1.00	0.33						
1号溝	SD02	AT-38	NSC	13.59	0.80	0.10						
2号溝	SD07	AU-37	NSC	1.60	0.49	0.10						
3号溝	SD03	AT-38	NSC	5.79	0.48	0.08						
4号溝	SD06	AT-38	NSC	5.42	0.64	0.13						
5号溝	SD04	AT-38	NSC	5.62	0.50	0.09						
6号溝	SD05	AS-38	NSC	3.55	0.44	0.10						



第161図 中近世溝状遺構



第163図 中近世土坑

第4章 富沢内野山IV西遺跡（C R36地点）

第1節 基本層序と土層の堆積状況

富沢内野山IV西遺跡は裾野市富沢内野山地先・桃園地先に位置する。前章で触れた富沢内野山III北遺跡の北側に隣接する遺跡である。当該遺跡が該当する調査区はC R36地点の内、3-1区・3-2区・5区・7-2区・7-1区（一部）である。

この富沢内野山IV西遺跡は愛鷹山東麓の樹枝状に発達した尾根上に位置するが、第2章に述べた富沢内野山I西遺跡（土3地点）が位置する谷尻から東縁部にかけての尾根が、現時点で確認されている遺跡の範囲である。この遺跡一帯は平坦地であり富沢内野山III北遺跡を隔てる地理的要因は無いものの、富沢内野山III北遺跡にて検出された遺構群は、富沢内野山I西遺跡1・2区が位置する支谷の谷尻付近を指向するものと捉えられ、富沢内野山III北遺跡及び当該遺跡の境界部となるC R36地点7区付近は遺構・遺物が散発的となり、両遺跡における生活領域の辺縁部にあたるものと考えられる。遺跡西側に内野山II遺跡が位置するが詳細は不明であるため、富沢内野山IV西遺跡との関連も不明である。

第14図は当該遺跡で最も基本的な層序を示しているものと考えられた、テストピット18北壁の土層図である。他の遺跡と同様、愛鷹箱根基本層序を基準とし、現地で分層及び土層説明がなされている。

1層は表土で腐食土である。遺跡付近の地目は多くが畑であり、耕作土に該当する。

2～4層は新期スコリアを含む層で、第2章第1節で触れた富沢内野山I西遺跡の基本層序3層に該当する。新期スコリアを含む層である2層の色調はにぶい黄褐色である。いつの降灰か定かではない。3層も新期スコリアを含む層である。層中に砂沢スコリアらしき堆積が認められたと現地所見にある。このテストピット18ではフラットな堆積は認められない。4層は暗灰黄色土層で、新期スコリアを含む層である。2層同様由来は判然としない。一方、隣接する富沢内野山III北遺跡2区付近では、カワゴ平バミス（KGP）を含む層が認められ、同じ尾根上の遺跡であるがスコリア堆積層の状況は一様でない。

5層は現地調査において愛鷹箱根基本層序でいう暗褐色土層に該当する層と位置付けている。暗褐色土層は愛鷹箱根基本層序でいう栗色土層と上位の黒色土層の漸移的土層の性格を有するものとされている。このテストピットでは上位の黒色土の堆積が判然とせず、5層自体色調的には黒褐色に近い。

6層は愛鷹箱根基本層序でいう栗色土層に該当する。色調では灰黄～にぶい黄色を呈する。

7・8層は富士黒土層である。現地調査段階ではKF1・KF2と呼称されていたが、基礎整理作業段階で見直しされ、富士黒土層に位置付けている。なお愛鷹箱根基本層序でいう漸移層が本来ならば富士黒土層と休場層の間際に観察されるところであるが、当該遺跡では5区等部分的に見られる。

9～12層は休場層である。9層は休場層上層、10層は休場層中層、11・12層は休場層下層である。12層は11層と比較して締りがあるため、ハードローム層として認識され、対照的に11層はソフトローム層と呼称している。休場層内には富沢内野山I西遺跡のように赤褐色を呈する休場層上部スコリア（YLs1）や休場層下部スコリア（YLs2）の堆積が認められるが、テストピット18付近では判然としない。当該遺跡で出土した旧石器時代遺物は9層中に多い。富沢内野山I西遺跡における第Ⅲ文化層に該当か。

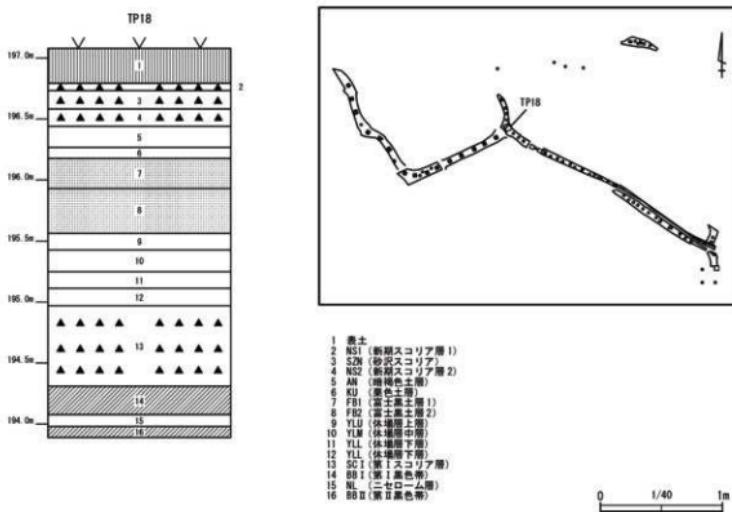
13層は第Iスコリア層である。略号はSCIである。休場層直下に認められる休場層直下黒色帶（B B0）は判然としない。

14層は第I黒色帶である。略号はBBIである。富沢内野山I西遺跡では第II文化層に位置付けられ

ている。当該遺跡における第Ⅰ黒色帯から出土した旧石器時代遺物は1点のみで、この層位より下層では旧石器時代の遺物を見出せていない。

15層はニセローム層である。略号はNLである。当該箇所ではスコリア質が特徴的なニセローム層上部と、姶良丹沢広域火山灰(AT)を多く含むニセローム層下部に分離し得ていない。

16層は第Ⅱ黒色帯に該当する。略号はBBⅡである。



第164図 富沢内野山IV西遺跡基準土層図

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

富沢内野山IV西遺跡の範囲に含まれるC R36地点3-2区・5区・7-2区において、各調査区より旧石器時代の遺物が確認された。いずれの調査区でも石器と礫の散布が確認されたのみで、礫群等の遺構は判然としなかった。しかし確認調査の際、該期のものと思しき土坑が1基のみ確認されている。地形的に当該遺跡5区付近で標高が最も高く、3区から7区にかけて緩やかに傾斜する。該期の遺物は5区の休場層に多く見出される。

2 遺構

（1）土坑（第165図 第38表）

1号土坑は平成14年度確認調査その2の際に、テストピット36内第Iスコリア層上面にて確認された。平面形は歪な長方形を呈し、底面は平坦である。計測値は長さ0.62m、幅0.45m、深さ0.19mを測る。覆土中に休場層由来土がブロック状に含まれている。覆土の状況から休場層より上位から掘削されたものと考えられ、所属する時期も縄文時代まで下る可能性がある。

3 遺物

遺物は9点を図化した。旧石器時代の石器は5区で散見されるが、石器集中として見なしていない。剥片が第I黒色層で出土しているが、それより下位層で旧石器時代遺物は未確認である。

（1）尖頭器（第166・167図 第39・42表 写真図版64・67）

1～3は尖頭器である。いずれも黒曜石を石材とする。1・3は諏訪星ヶ台、2は和田芙蓉ライトを産地とする。1は5区B H94グリッドから出土している。両面共に加工を施し、素材面は見られない。3は片面加工尖頭器で、基部は折損している。2は先端部が折損した両面加工尖頭器である。7-2区B K12グリッドの休場層下層からの出土である。

（2）ナイフ形石器（第166・167図 第39・42表 写真図版66・67）

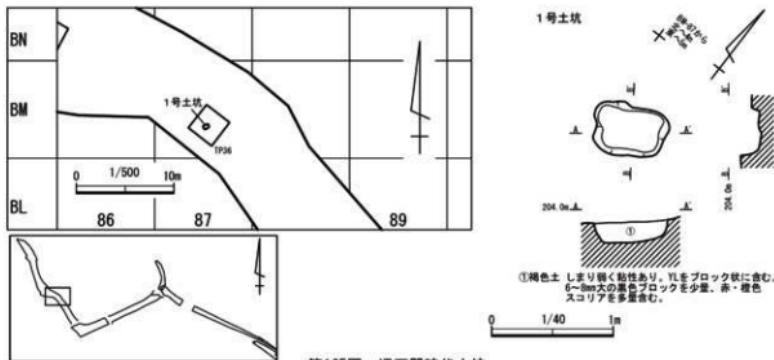
4・5はナイフ形石器である。4はホルンフェルスを石材としている。5区B G95グリッドの休場層上層から出土している。二側縁調整が施されており、素材は石刃状剥片か。5は和田鷹山産黒曜石を石材とする。先端部は折損している。基部加工がなされている。裏面には打瘤末端が残置する。

（3）石刃・細石刃（第166・167図 第39・42表 写真図版67）

6・9は石刃、7は細石刃である。6・7は黒曜石を石材とし、6は諏訪星ヶ台、7は神津島恩馳島を産地とする。9はホルンフェルスを石材としている。6は7-2区B L11グリッド杭付近から出土している。打面が失われている。細石刃である7は上端部及び下端部が折られたものか。5区B G93グリッドから出土している。9は確認調査テストピット25から出土している。

（4）搔器（第166・167図 第39・42表 写真図版67）

8は搔器である。ホルンフェルスを石材とする。縦長剥片を素材とし、裏面には打瘤が残置する。片面加工の搔器である。確認調査テストピット25から出土している。



第165図 旧石器時代土坑

第38表 旧石器時代土坑計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土器	石器	器	炭化物	計	備考
1号土坑	SF21	BM-67	SCe5-1	0.62	0.45	0.19						

第39表 旧石器時代石器一覧表

標識番号	遺物名	材種	石器	db分類番号	原産地名	埋合	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	X座標	Y座標	Z座標
1	1130	YLJ	尖頭器	高麗石	3	調査区ヶ台	BK-94	4.53	1.90	0.72	5.14	-91728.307	35969.061	200.625
2	13206	YLJ	尖頭器	高麗石	168	和田芙蓉ライト	BK-12	(7.05)	2.31	1.28	10.13	-91695.856	36072.113	196.646
3	53	鍬土中	尖頭器	高麗石	1		-	(4.64)	2.22	0.91	5.45			-
4	1227	YLM	ナイフ形石器	高麗石	209		BK-10	3.98	1.19	0.54	2.11	-91730.447	35902.060	200.491
5	13225	YLM	石刀	高麗石	169	和田廻山	BK-33	(3.41)	2.14	0.68	5.08	-91730.307	35902.060	200.491
6	13209	YLM	石刀	高麗石	166	和田廻山	BK-10	3.98	1.19	0.54	2.11	-91690.186	35659.949	197.037
7	13206	ZK	細石刀	高麗石	166	神津島恩島	BK-93	(1.50)	0.61	0.28	0.29	-91730.546	35884.157	200.796
8	1112	YLJ	細石器	ホルンフェルス	207		BK-05	5.14	3.32	0.30	26.16	-91677.549	35884.157	200.720
9	1170	YLJ	石刀	ホルンフェルス	205		BK-05	2.13	0.61	0.26	5.6	-91677.549	35805.559	197.033
2074	YLJ	劍片	ホルンフェルス				BK-08	(1.66)	1.45	0.39	1.47	-91689.980	36023.684	194.708
13108	YLJ	劍片	輝石安山岩				BK-94	4.31	2.85	0.63	7.6	-91727.713	35897.265	200.998
13112	YLJ	劍片	ホルンフェルス				BK-94	1.52	0.97	0.26	0.43	-91727.537	35898.163	201.023
13208	YLJ	劍片	ホルンフェルス				BK-94	1.66	2.86	0.72	3.64	-91727.724	35891.144	200.995

「-」は計測不能ないしは不明

第40表 旧石器時代礫属性表

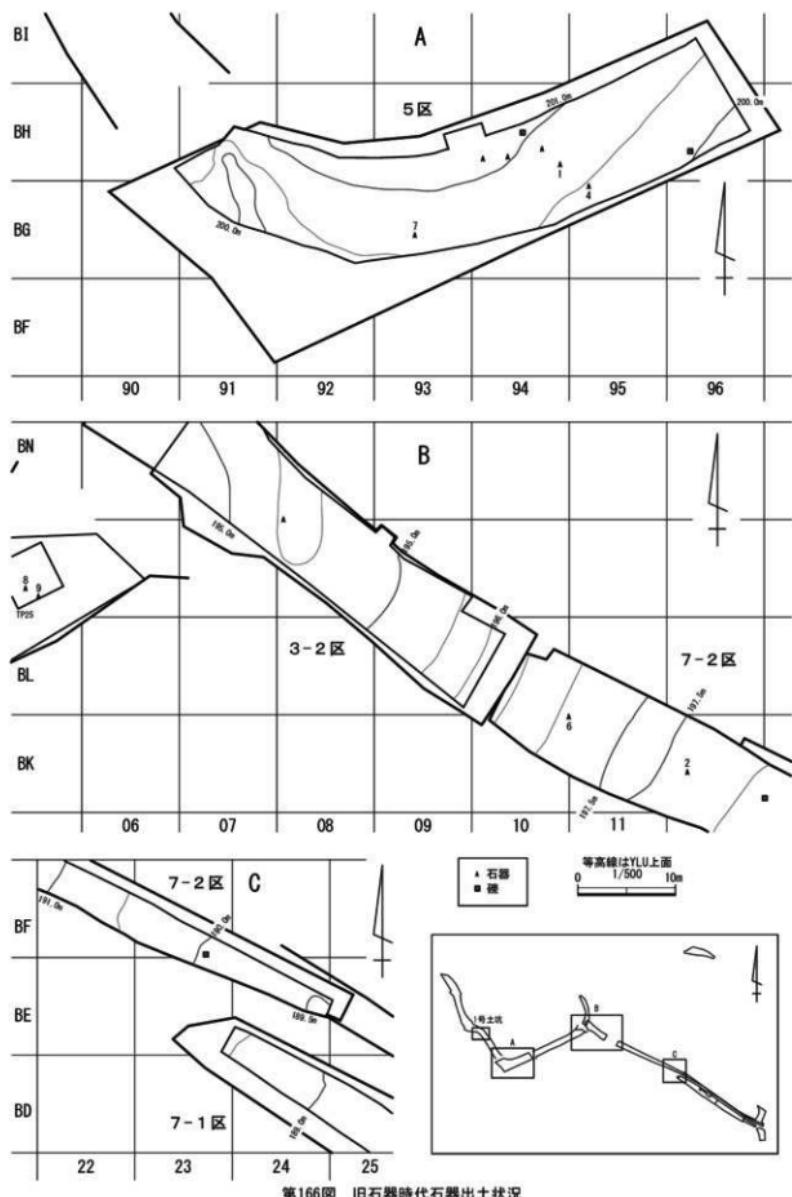
礫群番号	構成 礫数	赤化		不明	形態		石材		
		非赤化			正角	逆角			
		完形	非完形						
遺構外	5	1	3	1	5	1	3	1	

第41表 旧石器時代礫一覧表

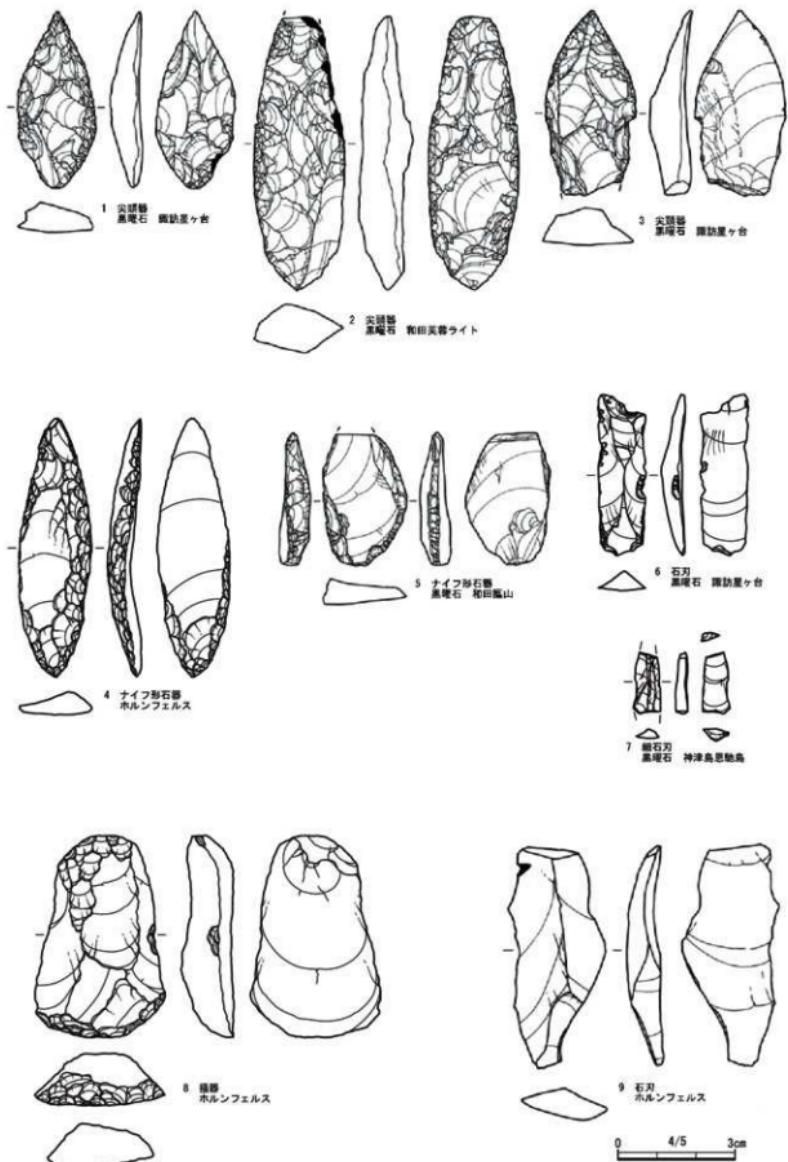
遺物番号	枚番	層位	石材	礫形態	縦幅	グリッド	破缺	完形	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	X座標	Y座標	Z座標
2014	KCw-4	細粒凝灰岩	圓角	85-18	9.5	BK-96	○	○	9.5	6.3	2.4	110	-91615.334	35783.610	202.527
13106		灰岩	圓角	85-95	9.5	BK-96	○	○	9.5	6.5	2.2	140	-91726.969	35912.405	200.104
13147		灰岩	圓角	85-94	2.8	BK-96	○	○	2.8	2.1	1.0	10kg未満	-91725.343	35925.222	200.042
13206		細粒凝灰岩	圓角	85-12	2.7	BK-23	○	○	2.7	1.8	0.8	20	-91686.537	35898.163	196.586
13208		灰岩	圓角	85-23	14.5	BK-23	○	○	14.5	11.3	3.9	680	-91746.992	36187.300	195.466

第42表 旧石器時代石器組成表

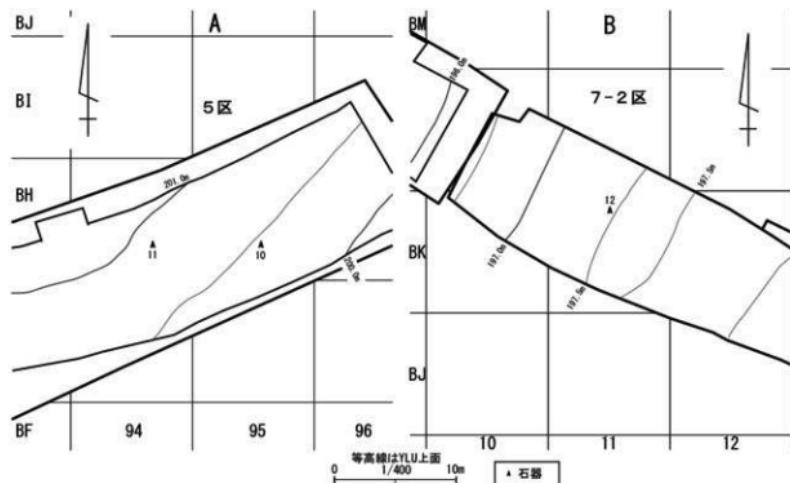
基盤石	石器	古形器	ナイフ形石器	器	細石刀	石刀	劍片	計
神津島恩島	KZ08				1			1
調査区ヶ台	SWHD	2				1		3
和田芙蓉ライト	WDMY	1						1
和田廻山	WDTY	1						1
黒曜石		3	1	1	1	1		6
細粒安山岩	FAn						1	1
ホルンフェルス	HOr		1	1		1	3	6
計		3	2	1	1	2	4	13



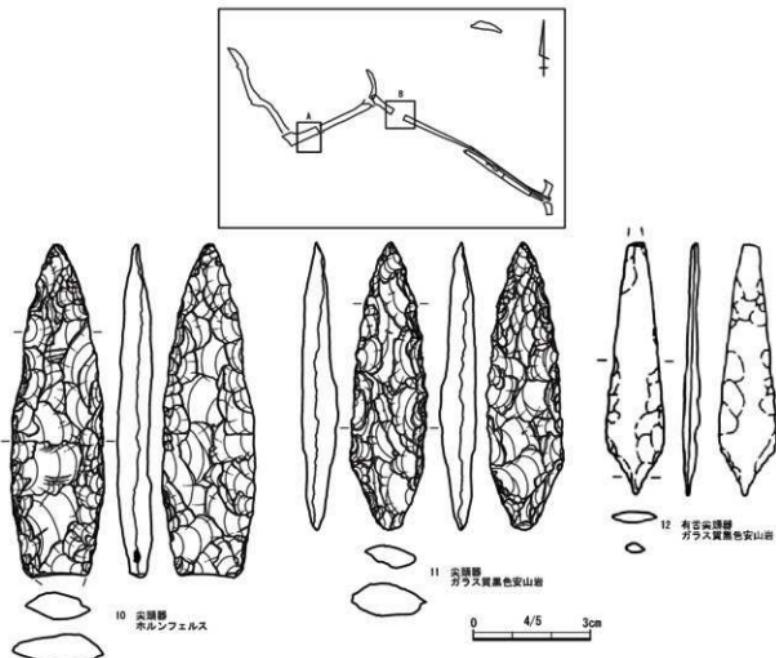
第166図 旧石器時代石器出土状況



第167図 旧石器時代石器



第168図 純文時代草創期石器出土状況



第169図 純文時代草創期石器

第3節 繩文時代の遺構と遺物

1 概要

(1) 遺構

富沢内野山IV西遺跡で遺構が確認されたのは、3-1区・3-2区・5区・7-1区・7-2区である。再三述べたように遺跡一帯は南東方向へ緩く傾斜する平坦地であるが、富沢内野山I西遺跡3・4区が位置する谷地形は富沢内野山IV西遺跡3区と5区の間隙付近にまで延び、埋没した谷地形となる。この谷尻の西側付近に該当する5区付近の平坦地は、内野山I遺跡が位置する尾根に継続する。3-1区付近は件の埋没した谷地形への地形転換に由来するものか、南西方向に緩やかに傾斜していく。このような地形の中で、縄文時代のものと思しき遺構は、集石3基、土坑10基、溝状遺構3基、炉跡13基が確認されている。また3～5区間の確認調査箇所でも2基の土坑が確認されている。

(2) 遺物

当該遺跡で確認された縄文時代の遺物は草創期・早期・前期・後期に位置付けられる。第2章で触れた富沢内野山I西遺跡では草創期の土器群が確認されているが、当該遺跡では石器のみである。また中期に位置付けられる遺物は僅少で、むしろ早期の遺物が卓越しており生活領域の変遷を窺うに至っている。土器については池谷信之氏・小崎晋氏に指導を受けている。

2 遺構と遺構内出土遺物

(1) 集石(第170・171図 第43表 写真図版64・65)

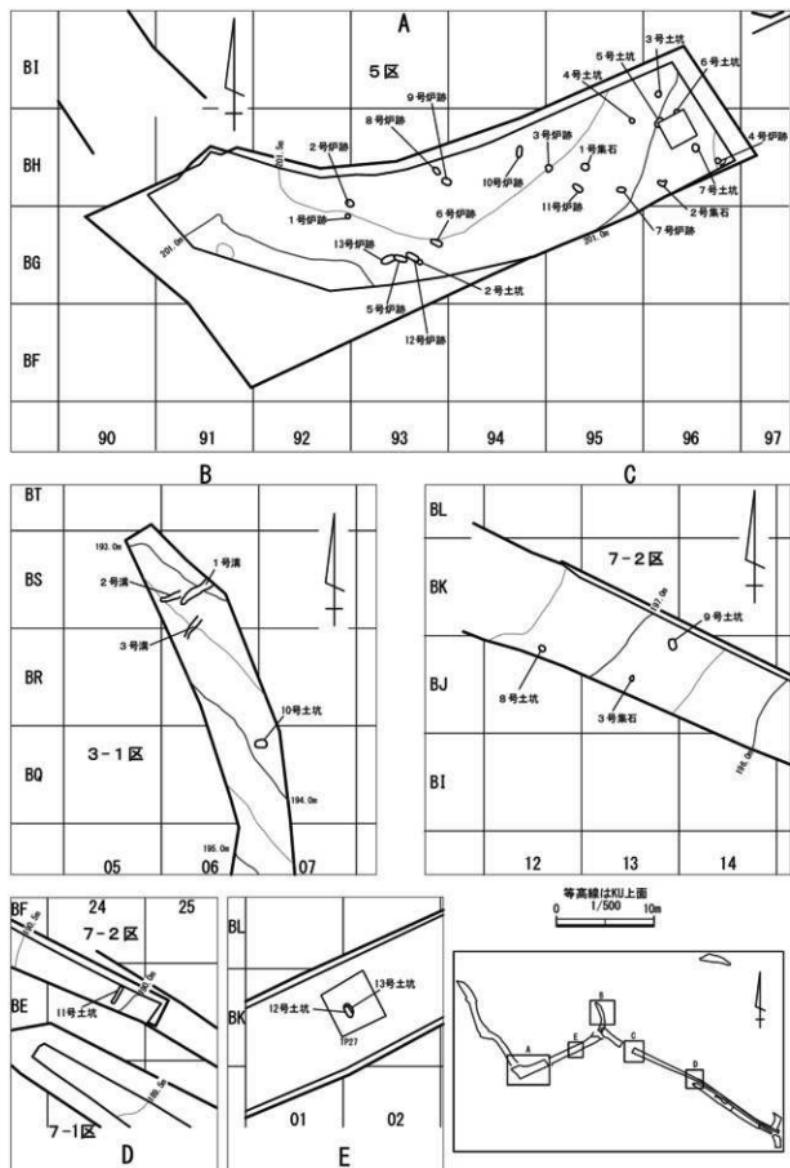
1号集石は5区B H95グリッドの富士黒土層上面にて確認された。この集石は疊10点で構成され、土坑を伴う。土坑の平面は円形を呈し、計測値は長径0.81m、短径0.73m、深さ0.14mを測る。土坑底面は平坦で、緩やかに立ち上がる。覆土は富士黒土を基調とし、炭化物が認められる。土坑内から縄文土器片が2点出土している。2号集石は5区B H96グリッドの富士黒土層上面にて確認された。この集石は疊12点で構成され、土坑は伴わない。疊が散布する範囲は1.14m×0.59mである。3号集石は7-2区B J13グリッドの栗色土層上面にて確認された。この集石は疊22点で構成され、土坑は伴わない。疊が散布する範囲は0.55m×0.31mである。

(2) 炉跡(第170・172図 第43表 写真図版65)

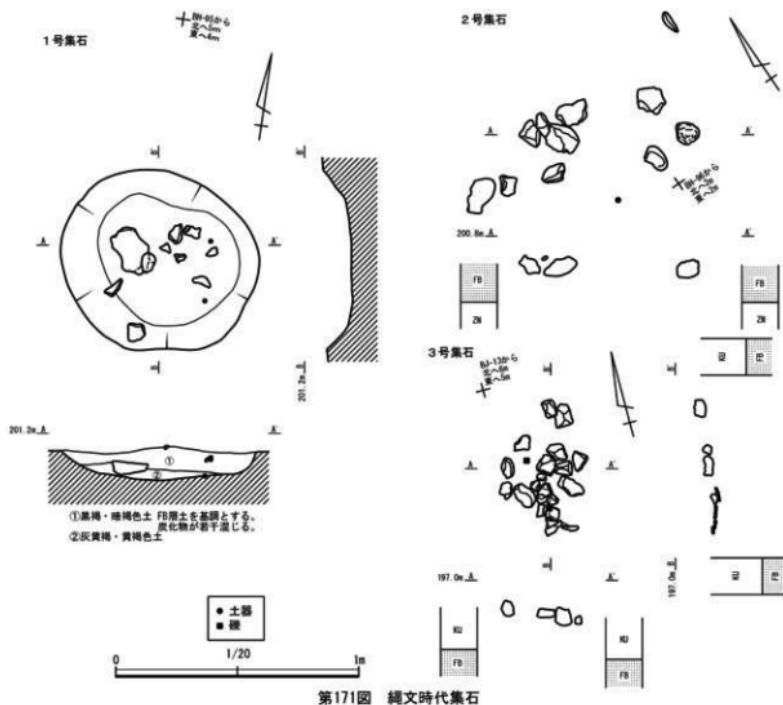
当該遺跡で確認された炉跡は13基を数える。全て5区で確認されたもので、富沢内野山I西遺跡で炉跡が2基、富沢内野山III北遺跡では住居跡内の炉跡を除き、皆無であった点を勘案すれば、濃密な分布を示している。5区内の炉跡はB I 96グリッド杭付近に集中する土坑群と分布域を分ち、主に5区BG・B H92～95付近に多く見られる。5区西辺部には見られない。殆どが漸移層上面で確認され、覆土が富士黒土を基調とする点から、土坑群と同様、富士黒土層付近で掘削・機能したものと考えたい。この炉跡はその形態から4タイプに分類が可能である。

1～3号炉跡は平面が円～楕円形を呈するタイプである。炉跡中央部に焼土が見られる。1号及び2号炉跡は近接している。

5・6号炉跡は平面が長椭円形を呈し、焼土は主に2箇所認められるタイプである。焼土は各々掘り込みを伴う。この掘り込みは円～楕円形を呈し、炉跡両端に設けられている。4号炉跡は近接する2基の炉跡で上部が削平されて焼土に伴う掘り込みが残置した例と判断されるため、本来的には長椭円形を



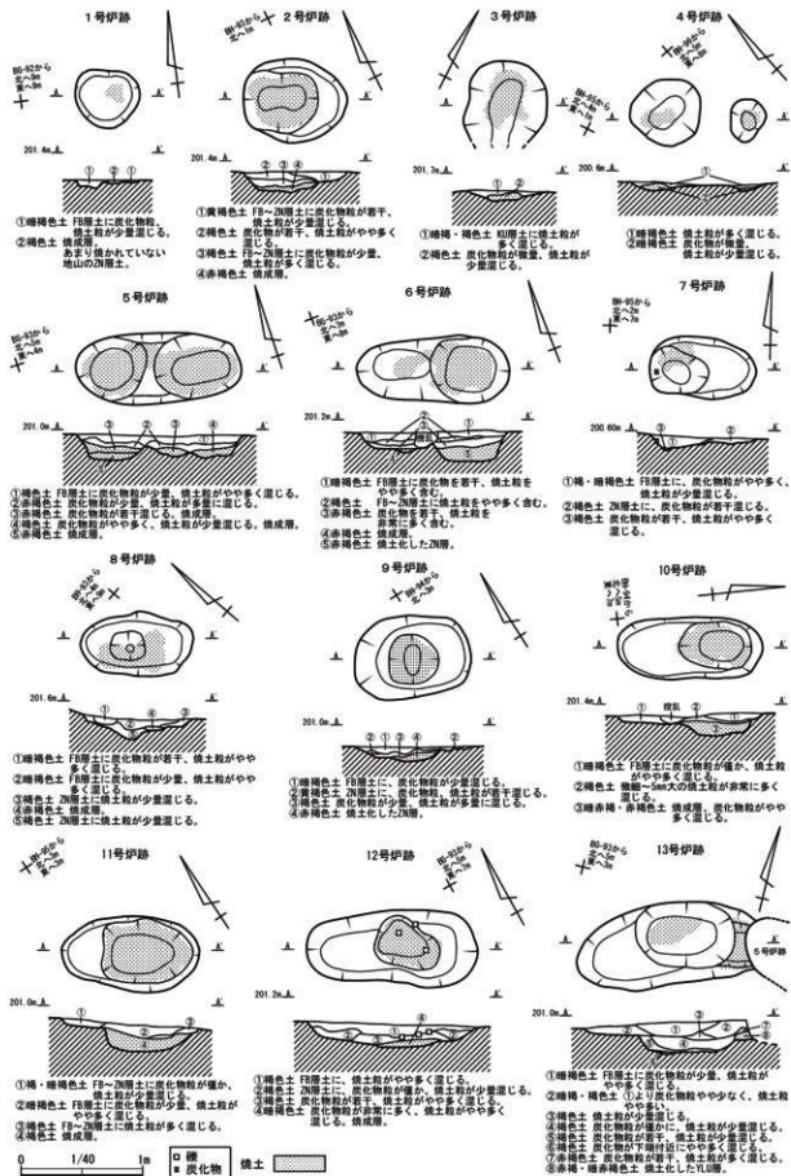
第170図 繩文時代遺構分布図



第171図 繩文時代集石

第43表 繩文時代造構計測表

	報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土器	石器	種	炭化物	計	備考
1号集石	ST07	BH-95	FB	0.54	0.45	-	-	2		10		12	
2号集石	ST06	BH-96	FB	1.14	0.59	-	-	1		12		13	
3号集石	ST08	BJ-13	KU	0.55	0.31	-	-			22		22	
2号土坑	SP47	BH-93	ZN	0.58	0.51	0.11	-			7		7	
3号土坑	SP43	BJ-96	ZN	0.66	0.59	0.12	-						
4号土坑	SP44	BH-95	ZN	0.53	0.49	0.14	-						
5号土坑	SP45	BH-96	ZN	1.02	0.70	0.23	-						
6号土坑	SP46	BH-96	ZN	0.60	0.36	0.27	-						
7号土坑	SP42	BH-96	FB	0.85	0.72	0.26	-						
8号土坑	SP49	BJ-12	ZN	0.68	0.59	0.11	-						
9号土坑	SP28	BJ-13	ZN	1.12	0.76	0.60	-						
10号土坑	SP09	BH-06	FB	1.20	0.84	0.62	-						
11号土坑	SP27	BE-24	KU	1.97	0.37	0.82	-						
12号土坑	SP10	BK-02	KU	1.47	0.81	0.89	-						
13号土坑	SP12	BK-02	KU	1.18	0.30	0.59	-						
1号伊跡	FP22	BS-92	ZN	0.52	0.50	0.07	-						
2号伊跡	FP21	BH-92	ZN	0.86	0.69	0.17	-						
3号伊跡	FP17	BH-95	KD	0.68	0.66	0.11	-						
4号伊跡北側	FP18	BH-96	FB	0.60	0.55	0.07	-						
4号伊跡南側	FP18	BH-96	FB	0.35	0.30	0.05	-						
5号伊跡	FP19	BS-93	ZN	1.40	0.58	0.19	-						
6号伊跡	FP20	BS-93	ZN	1.25	0.55	0.24	-						
7号伊跡	FP21	BH-95	ZN	0.87	0.49	0.13	-			1	1	1	
8号伊跡	FP23	BS-93	ZN	0.93	0.54	0.20	-						
9号伊跡	FP28	BS-93	ZN	0.98	0.66	0.10	-						
10号伊跡	FP24	BH-94	ZN	1.20	0.51	0.18	-						
11号伊跡	FP25	BH-95	ZN	1.12	0.62	0.28	-			3	3	3	
12号伊跡	FP26	BS-93	ZN	1.40	0.63	0.21	-			1	1	1	
13号伊跡	FP29	BS-93	ZN	0.52	0.71	0.27	-						
1号溝	S001	BS-06	AN	4.30	0.69	0.40	-						
2号溝	S008	BS-06	AN	2.15	0.64	0.12	-						
3号溝	S009	BS-06	AN	2.02	0.59	0.12	-						



第172図 繩文時代炉跡

呈していたものと考えられる。この5・6号炉跡の長軸はほぼ等高線に並行している。5号炉跡は13号炉跡と重複し、時期的に13号炉跡より新しい。

7～12号炉跡は平面が梢円～長梢円形を呈するタイプである。底面はほぼ平坦で、焼土を伴う梢円形の掘り込みが1箇所認められる。このタイプの長軸方向は南東～北西～南～北を指向し、7号炉跡のみ東～西である。12号炉跡は焼成層付近に礫の散布が認められる。なお13号炉跡は本来、当該タイプに分類されるが、複数の炉跡が重複したものである。また炉跡自体の掘り込みが浅い場合、長梢円形の掘り込みが失われ、焼土を伴う掘り込みのみ残置されることが想定され、1～3号炉跡についても当該タイプであった蓋然性を認める。

なお7・13号炉跡内出土の炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、 $9,340 \pm 30$ yrBP、 $9,380 \pm 30$ yrBPという数値が出された。詳細は附編を参照されたい。

(3) 土坑(第170・173・174図 第43表 写真図版62～64)

当該遺跡にて確認された縄文時代の土坑は10基を数える。また遺跡範囲外であるが確認調査により2基確認された。確認された土坑は全て底面に小穴が認められないタイプである。

2～8号土坑は平面が円～梢円形を呈するタイプで、径は0.36～1.02m、深さは0.11～0.27mと小型で浅めの土坑群である。全て漸移層上面にて確認されている。このうち8号土坑が7-2区にて確認された以外は、全て5区内で確認されている。2号土坑は5区B G93グリッドで確認された。12号炉跡と重複し、時期的に先行するものと考えられる。土坑内には小礫が散見され、覆土中に認められる焼土は現地調査では炉跡に係るものと推定された。3～7号土坑は5区東辺、B I 96グリッド杭周囲に位置する。炉跡群と分布域が異なる。3～6号土坑の覆土は富士黒土層由来のものとされている点から、富士黒土層面より掘り込まれたのであろう。

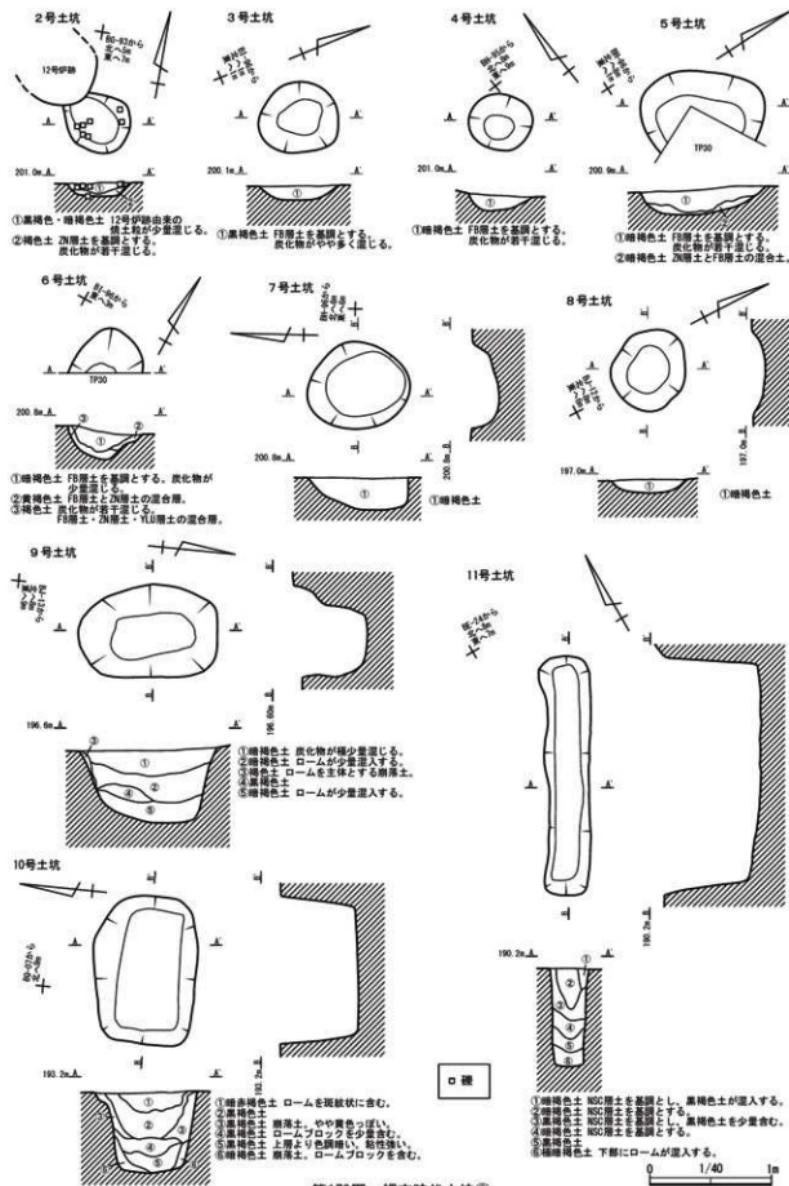
9・10号土坑は平面が長梢円～隅丸長方形を呈するタイプである。9号土坑は7-2区B J 13グリッドで確認された。長さ1.12m、幅0.76m、深さ0.60mを測る。10号土坑は3-1区B Q 07グリッドで確認された。長さ1.20m、幅0.84m、深さ0.62mを測る。また9・10号土坑以外に確認調査テストピット27、B K 02グリッドにて確認された土坑がこのタイプに該当する。

11号土坑は平面が狭長な長方形を呈する。この土坑の計測値は長さ1.97m、幅0.37m、深さ0.82mを測る。この土坑が確認されたのは7-2区B E 24グリッドの栗色土層上面である。この土坑の長軸は付近の等高線と並行している。陥穴として機能したのであろう。

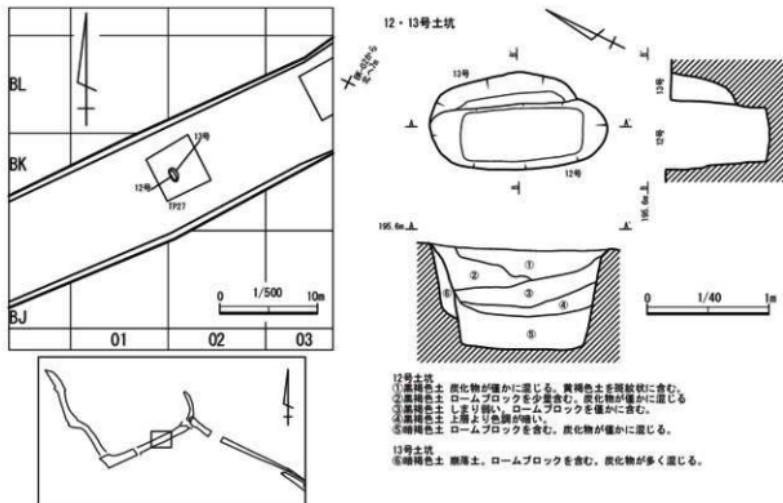
12・13号土坑は3～5区間の確認調査箇所、テストピット27で確認された土坑である。B K 02グリッドに位置する。この土坑は重複した状態で確認されている。13号土坑が埋没した後に、掘削されたのが12号土坑と考えられる。12号土坑の平面は長梢円形を呈し、底面は平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

(4) 溝状遺構(第170・175図 第43表)

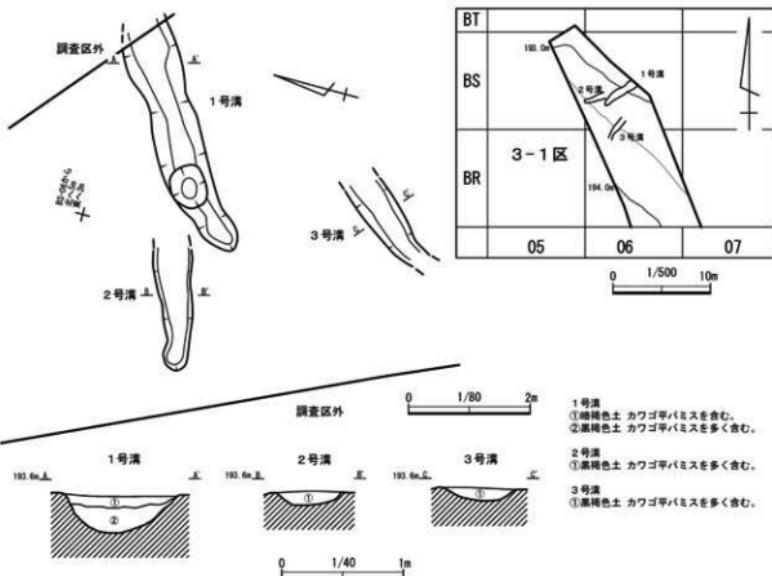
現地調査段階で縄文時代のものと考えられた溝状遺構が3条確認されている。3-1区B S 06グリッドに位置し、暗褐色土層上面で確認されている。このうち1号溝状遺構は確認調査テストピット20によりその存在を確認され、砂沢スコリア層より下位の暗褐色土層上面より掘り込まれていた。覆土中にはカワゴ平バミスが含まれていた点より、溝状遺構は後晩期以降に位置付けられる可能性がある。2・3号溝状遺構共に位置、溝の延びる方向、覆土等により1号溝状遺構と同時期かと考えられる。遺構内から該期の土器は出土しておらず、遺構の時期・性格等も併せて今後精査をする。



第173図 縄文時代土坑①

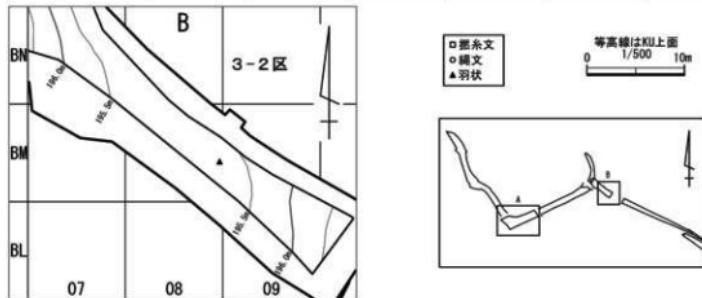
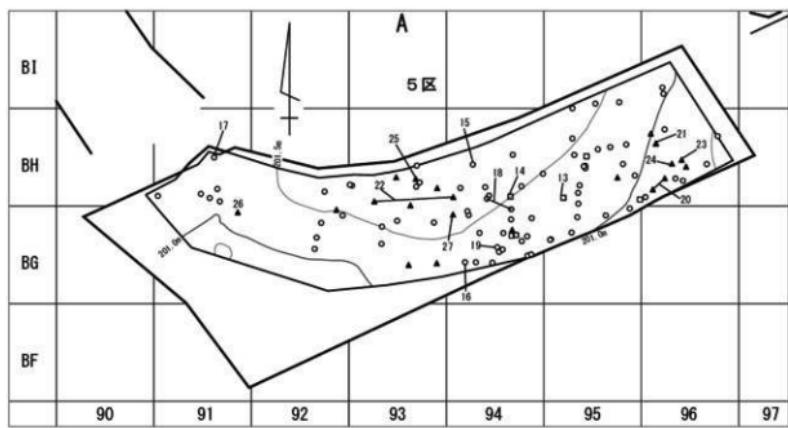


第174図 桧文時代土坑②

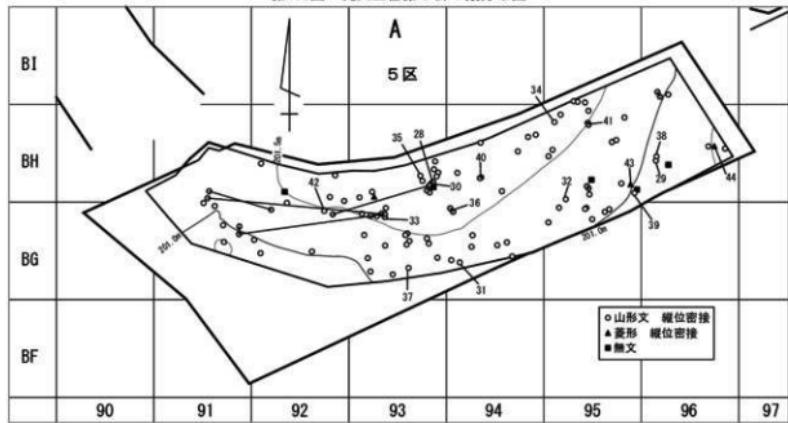


第175図 桧文時代溝状遺構

第4章 富内田野山IV西道路（C R36地点）



第176図 縄文土器第I群1類分布図



第177図 縄文土器第I群2類分布図

3 遺構外出土遺物

当該遺跡から出土した縄文時代のものと考えられる土器は589点を数え、石器は120点を数える。この点数は現地での取り上げた遺物の点数であり、土器については長泉事務所における接合作業を経た結果、点数は著しく変化している。

(1) 土器・土製品

第Ⅰ群：縄文時代早期代(第176・177・180図 第44表 写真図版68)

縄文時代早期代の押型文土器の資料を中心に第Ⅰ群とした。沼津市尾上イラウネ遺跡出土資料と同時期か。施文は押型文以外に撲糸文、縄文等が散見され、静岡県東部地域に特徴的な比重の軽い胎土を有する土器片も認められる。時期的に押型文前半か。第Ⅰ群の出土位置はほぼ5区内に限定される。

1類(縄文)

13~27を1類とした。縄文を施した資料を集成した。そのうち20~27は羽状縄文が施文される。同じ原体の縄文を異方向に施文するか、R L・L Rの縄文を交互に施文したものである。この1類のうち15・16・20・21は口縁部資料で胎土も軽い印象を受け、器面は独特の触感がある。色調に淡い紫色を含む。16は口唇部を平坦に仕上げ、内外面に縄文を施す。20は調整最終時に口唇部を指頭でつまみナデし、21は口唇部を尖らせている。なお20に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 $9,430 \pm 30$ yrBPという数値が出ている。13・14・17~19・22~27は胴部のみの破片資料で軽い印象を受けるが、22のみ小粒の岩片を多く含み、器面がざらつく。また14・18・19は器厚がやや厚めで、18は1.5cmを測る。

2類(押型文)

28~44を2類とした。縦位に山形文が施された資料を中心に集成した。いずれも胎土は軽い印象を与える。そのうち28~42は山形文が施され、28~30は口縁部のみの破片資料である。28は口唇部を平坦に仕上げ、外面に縦位、内面に横位の山形文を施す。29は口唇部を丸く仕上げ、外面に斜位の山形文を施す。器厚が1.15cmを測り、やや厚い。30は口唇部を平坦に仕上げ、口唇部直下より縦位の山形文を密接して施す。31~42は胴部のみの破片資料である。山形文が縦位密接に施文される。33に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 $9,360 \pm 30$ yrBPという数値が出ている。43・44は菱形文を施した資料で、43は口縁部のみの破片資料である。外面に菱形文を施し、さらに口唇部にも押型文を施す。

第Ⅱ群：縄文時代早期後半(第178・180図 第44表 写真図版69)

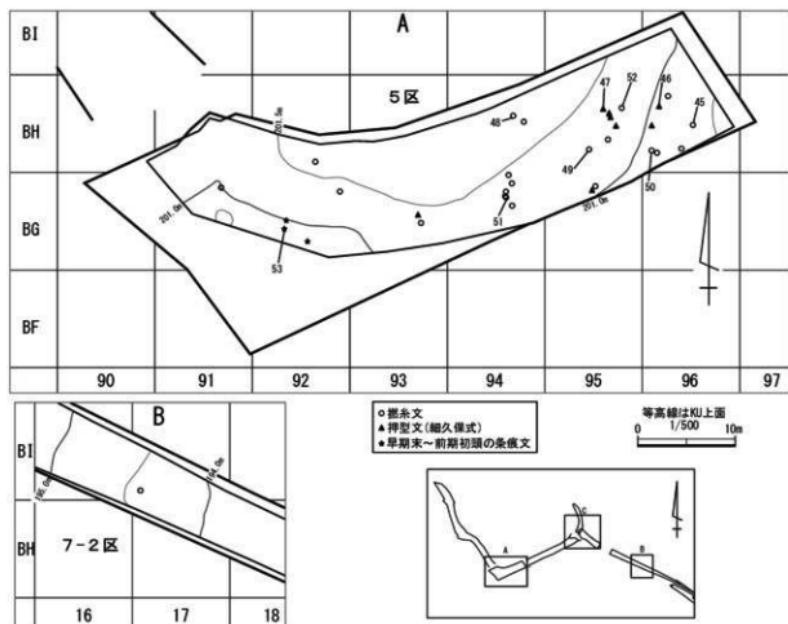
縄文時代早期後半代の押型文土器の資料を中心に第Ⅱ群とした。施文は押型文以外に撲糸文、縄文等が散見される。第Ⅱ群の出土位置はほぼ5区内に限定される。

1類(撲糸文)

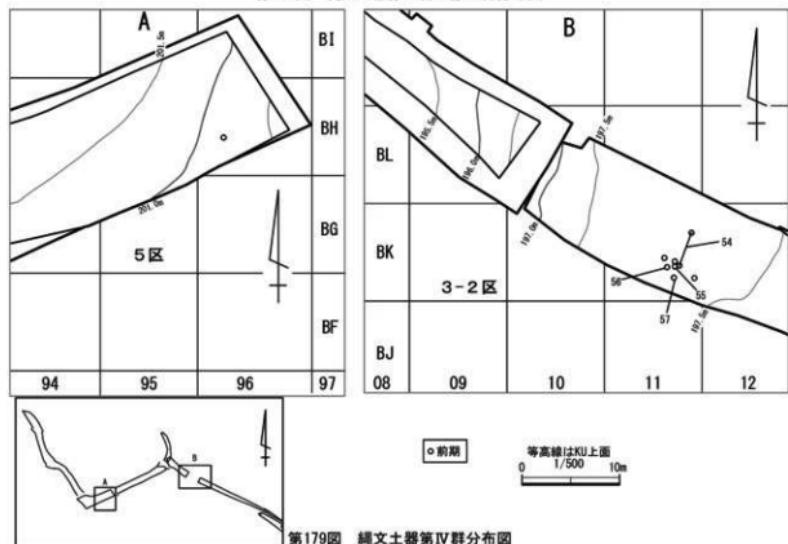
45・48~52を1類とした。48・49は口縁部のみの破片資料である。48は軽く外反させ、尖らせた口唇部に刺突か。外面に太めの撲糸文を縦位に施す。49は平坦に仕上げた口唇部で、外面に細かな撲糸文が施される。小型の深鉢か。50~52は胴部のみの破片資料である。51は胴部下位付近と考えられる。45は最終のナデ調整により判然としないが、撲糸文の可能性がある。

2類(押型文)

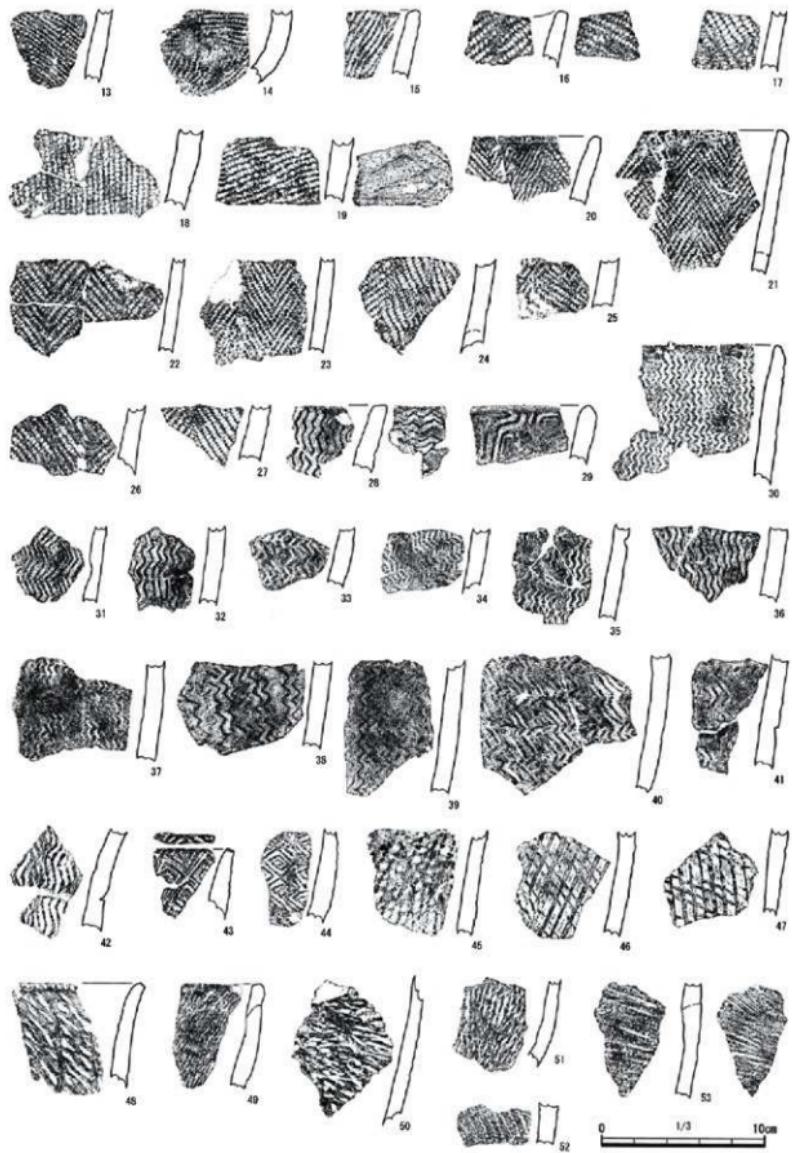
46・47を2類とした。外面に格子目文が施されているが、不揃いである。同一個体か。



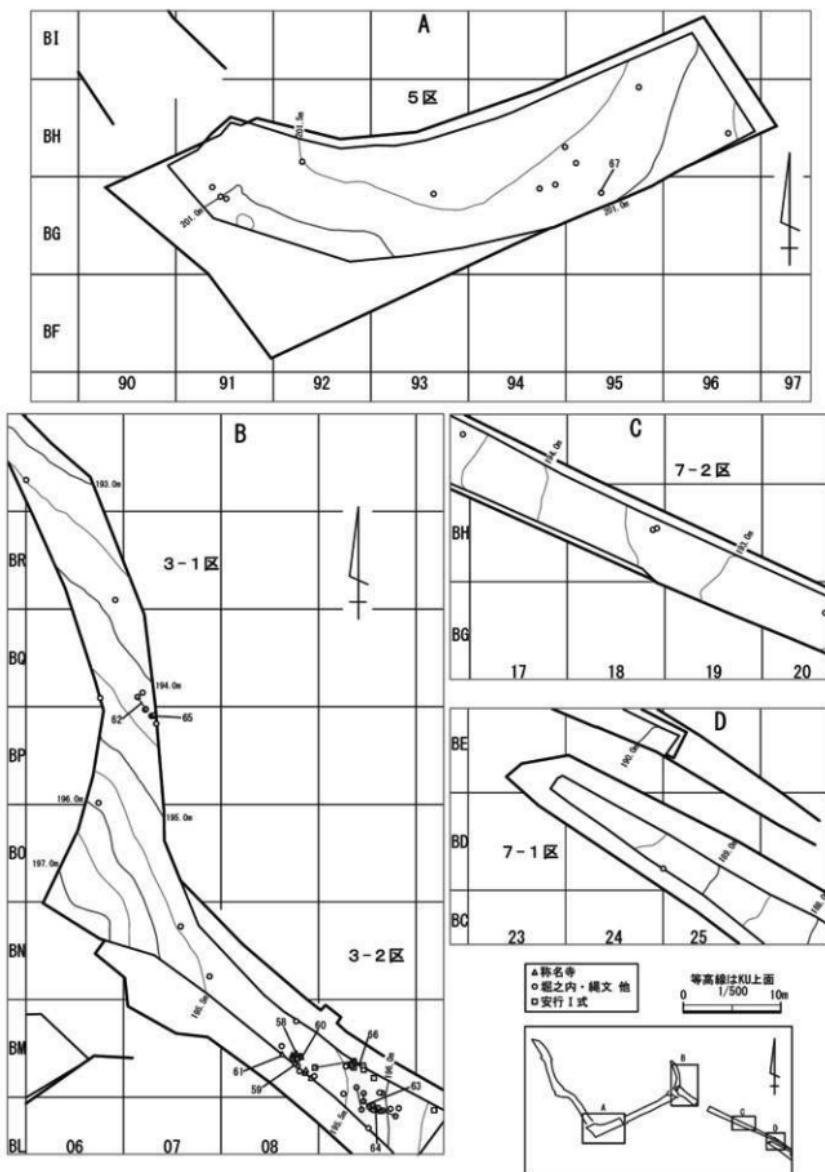
第178図 縄文土器第II群・第III群分布図



第179図 縄文土器第IV群分布図



第180図 縄文土器第I群～第III群



第181図 縄文土器第V群分布図

第III群：縄文時代早期末～前期初頭(第178・180図 第44表 写真図版69)

縄文時代早期末～前期初頭と思しき条痕文土器を第III群とした。出土位置は5区B G 92グリッド付近のみで、出土量も少ない。53は胴部のみの破片資料である。外面に条痕が施されている。

第IV群：縄文時代前期(第179・182図 第44表 写真図版69)

縄文時代前期代の土器を集成した。いずれも縄文のみ施したものである。出土位置はB K 11グリッドに集中する。54～57はいずれも口縁部の破片資料で、同一個体か。口唇部を丸く仕上げた後に、縄文を施している。外面に羽状縄文を施す。同じ原体を異方向施文か。

第V群：縄文時代後期(第181・182図 第44表 写真図版70)

縄文時代後期代の土器群を集成した。3～7区まで散発的に出土しているが、3～2区B L・BM 08・09グリッドに多く見られる。

1類(称名寺式)

58～61は1類とした。称名寺式土器と推定された土器群である。58は屈曲の強い頸部付近と考えられる。外面は縄文を施した後に、縱位の沈線文を施す。沈線文間の縄文は磨り消している。この58に付着した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,890 \pm 20$ yrBPという数値が出ている。59・60も縄文の施文後に沈線文を施す。61の沈線文は59・60よりも幅の広い棒状工具によるものである。

2類(堀之内式並行期か)

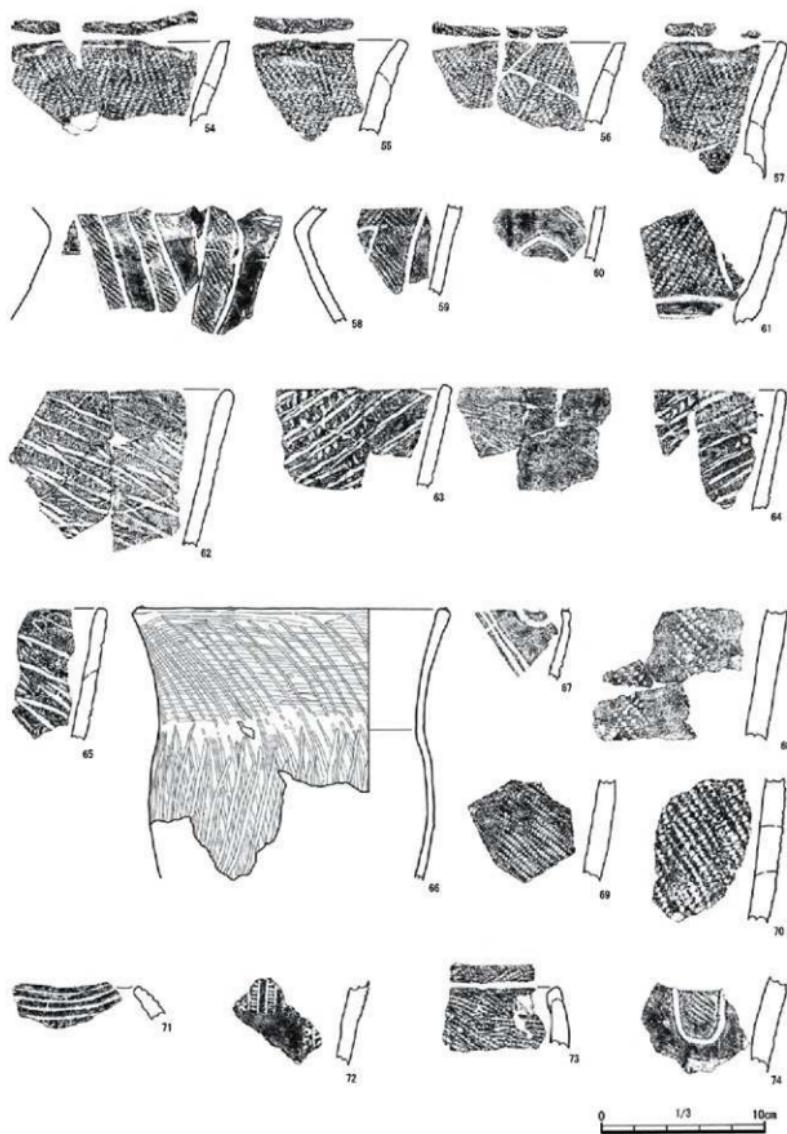
62～65・67は2類とした。粗製土器に分類されるもので、堀之内2式土器と時期的に並行するものか。62～65はいずれも口縁部のみの破片資料で、直線的に立ち上げている。62・65は斜位に沈線状の文様が見えるが、無節の撚糸文か。器面の観察では纖維痕が観察出来ない。63・64は付加条縄文を施したものか。粗製土器であろう。63以外の胎土は石英等の粒子が多く見受けられ、粘土があまり乾いていない時点で器面を削る等の調整を行ったためか、内外面共に粒子の移動が見られる。67は沈線文を施しており、器厚も薄く仕上げている。

3類(安行式)

66を3類とした。口縁部から胴部中位付近まで残存した資料である。胴部中位付近で内湾し、膨らんだ胴部は胴部上位で窄まり、また外方へ直線的に立ち上げている。口唇部はやや肥厚させ、強めに押さえて平坦に仕上げている。残存する口唇部に小粒の粘土塊を貼り付け、円形浮文状となす。外面口唇部直下より括れまでは、横位に浅い沈線文を施した後に、斜位の沈線文を施す。括れより下位は斜位の沈線文を施している。内面は口唇部から胴部中位付近までミガキが施されている。なお未掲載であるが66に酷似する破片資料の付着炭化物を放射性炭素年代測定した結果(分析番号 14)、 $3,150 \pm 20$ yrBPという数値が出された。詳細は附編を参照されたい。

第VI群：型式不明(第182図 第44表 写真図版70)

型式名や時期が判然としない資料を集成した。68～70は縄文が施された胴部のみの破片資料である。纖維を胎土中に含む。71は内湾する口縁部である。口唇部に沿って半截竹管状の工具により平行沈線文を施している。72は刺突文や平行沈線文が施されている。73は内湾する口縁部で、平坦に仕上げられた口唇部にも縄文が施されている。74は沈線文による区画内に縄文が充填されている。

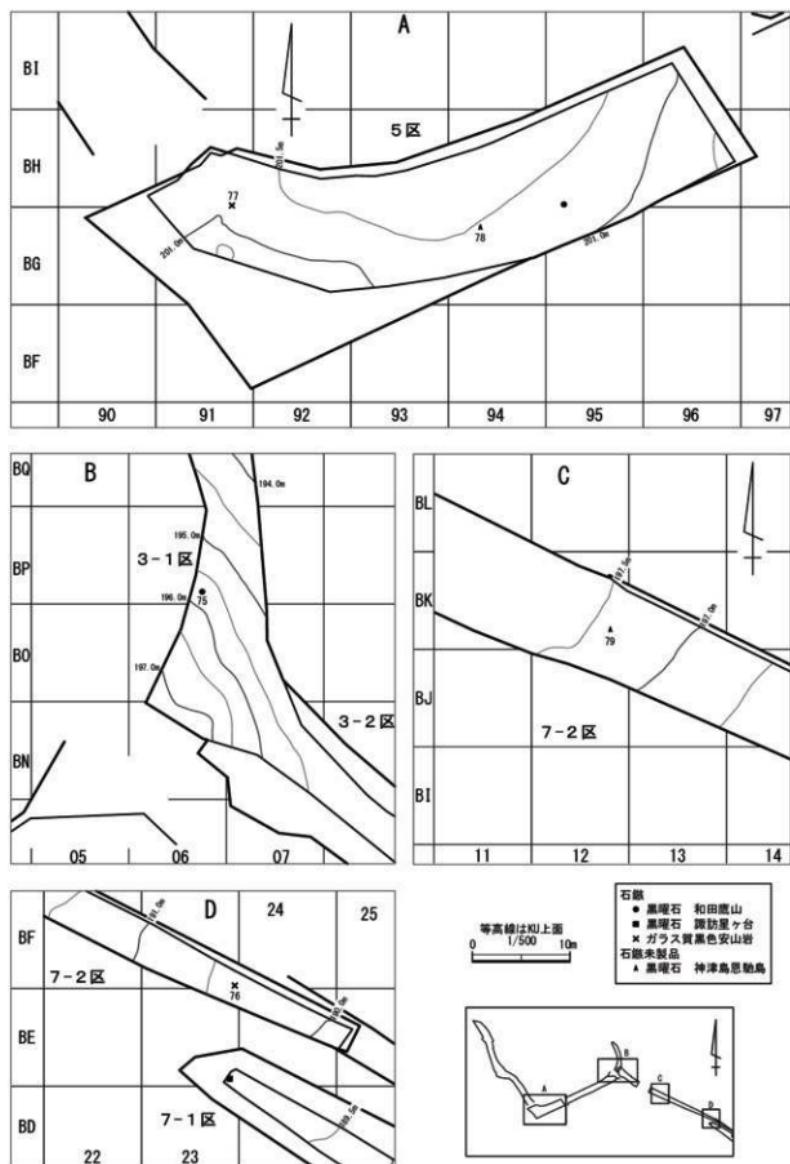


第182図 縄文土器第IV群～第VI群

第44表 細文時代遺構外出土器観察表

掲出番号	写真 版面 番号	分類 群 類	グリッド	色調(Hue)	文様調整等	縦 横	胎土
13	68	I 1	BH-95	2. SYR3/1	縦糸文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
14	68	I 1	BH-94	10YR3/1	縦糸文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
15	68	I 1	BH-94	7. SYR5/2	口縁部。縦文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
16	68	I 1	BH-94	10YR3/3	口縁部。内外面に縦文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
17	68	I 1	BH-91	7. SYR5/3	縦文。絞じょうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子多
18	68	I 1	BH-94	7. SYR4/3	縦文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
19	68	I 1	BH-94	7. SYR5/3	縦文。絞じょうな胎土。	有	白色粒子多、黒色粒子多
20	68	I 1	BH-96	7. SYR3/3	口縁部。羽状縞文。ナデ。絞じょうな胎土。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石
21	68	I 1	BH-96	7. SYR5/3	口縁部。羽状縞文。ナデ。絞じょうな胎土。	有	白色粒子多、黒色粒子
22	68	I 1	BH-93	7. SYR4/3	羽状縞文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、岩片多
23	68	I 1	BH-96	7. SYR5/4	羽状縞文。絞じょうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子多、石英、白色岩片
24	68	I 1	BH-96	7. SYR5/3	羽状縞文。絞じょうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子、岩片
25	68	I 1	BH-93	7. SYR5/3	羽状縞文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子多、黒色粒子多
26	68	I 1	BG-91	7. SYR5/3	羽状縞文。絞じょうな胎土。	有	白色粒子多、黒色粒子多、白色岩片
27	68	I 1	BG-94	7. SYR6/3	羽状縞文。絞じょうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、白色岩片、岩片
28	68	I 2	BH-93	10YR5/3	口縁部。縱位の山形文。内面に縦位の山型文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
29	68	I 2	BH-96	10YR3/1	口縁部。山形文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
30	68	I 2	BH-93	7. SYR3/1	口縁部。山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
31	68	I 2	BG-94	10YR5/2	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
32	68	I 2	BH-95	10YR5/2	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
33	68	I 2	BG-93	10YR5/2	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子、石英
34	68	I 2	BH-95	10YR4/3	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
35	68	I 2	BH-93	10YR5/3	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
36	68	I 2	BG-94	7. SYR4/3	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
37	68	I 2	BG-93	10YR5/2	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
38	68	I 2	BH-96	7. SYR2/1	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
39	68	I 2	BH-95	SYR4/2	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子
40	68	I 2	BH-94	10YR3/1	山型文。縦位密接。絞じょうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子
41	68	I 2	BH-95	7. SYR3/1	山型文。縦位密接。内面に縦位。絞じょうな胎土。	無	白色粒子
42	68	I 2	BG-92	7. SYR5/3	山型文。縦位密接。内面に縦位。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
43	68	I 2	BH-95	10YR3/1	口唇部に坪空文。外面上に菱形文。絞じょうな胎土。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
44	68	I 2	BH-96	10YR3/1	菱形文。絞じょうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子
45	69	II 1	BH-96	7. SYR6/6	縦糸文。ナデ。	無	白色粒子、黒色粒子
46	69	II 2	BH-96	7. SYR5/4	桃子目文。	無	白色粒子、黒色粒子
47	69	II 2	BH-95	SYR4/6	桃子目文。	無	白色粒子、黒色粒子
48	69	II 1	BH-94	7. SYR4/1	口唇部に剥突。縦糸文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英
49	69	II 1	BH-95	7. SYR4/4	口縁部。縦糸文。内外面に指跡痕。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
50	69	II 1	BH-96	SYN5/0	縦糸文。	無	白色粒子、黒色粒子
51	69	II 1	BG-94	SYR5/6	縦糸文。	無	白色粒子、黒色粒子
52	69	II 1	BH-95	SYR5/6	縦糸文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
53	69	III	BG-92	10YR6/6	外面上に条痕。	有	白色粒子、黒色粒子、輝石、白色岩片
54	69	IV	BK-11	SYR2/1	口唇部と外面上に縦文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
55	69	IV	BK-11	SYR2/2	口唇部と縦文。羽状縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
56	69	IV	BK-11	SYR2/2	口唇部と縦文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
57	69	IV	BK-11	SYR2/2	口唇部に縦文。羽状縞文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
58	70	V 1	DM-08	SYR6/6	縦糸文。縦、磨消し。	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
59	70	V 1	BM-08	7. SYR6/4	弦紋。縦文。磨消し。内面に磨き。	無	白色粒子、黒色粒子、赤色粒子多、岩片
60	70	V 1	DM-08	7. SYR6/4	弦紋。縦文。磨消し。内面にナデ。	無	白色粒子、赤色粒子、石英、輝石
61	70	V 1	DM-08	7. SYR5/4	砂粒工具による沈痕。縦文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
62	70	V 2	BP-07	7. SYR7/6	口縁部。無筋の剥突文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英多、輝石、白色岩片
63	70	V 2	BL-09	10YR4/4	口縁部。付加条縞文。	無	白色粒子、石英、輝石、白色岩片
64	70	V 2	BL-09	7. SYR5/4	口縁部。付加条縞文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
65	70	V 2	BP-07	7. SYR7/6	口縁部。無筋の剥突文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英多、輝石、白色岩片
66	70	V 3	BM-09	10YR5/3	口唇部に凸円浮文。沈縞。内面に磨き。	無	白色粒子、石英、雲母
67	70	V 2	BG-95	10YR5/3	沈縞。指頭痕。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石
68	70	VI	BH-05	7. SYR4/4	縦文。	有	白色粒子、黒色粒子
69	70	VI	BM-08	10YR6/4	縦文。	有	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
70	70	VI	BH-03	SYR5/6	縦文。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
71	70	VI	BG-08	7. SYR5/4	口縁部。半截竹管状工具による平行沈縞。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
72	70	VI	BH-19	SYR5/6	沈縞。剥突。内面にナデ。	無	黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
73	70	VI	BD-24	SYR6/6	口唇部と外面上に縦文。内面にナデ。	有	白色粒子、石英、輝石、白色岩片、岩片
74	70	VI	BD-21	10YR6/4	沈縞。縦文。内面にナデ。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片

第4章 富沢内野山IV西道路(C R36地点)



第183図 石礫・石礫未製品分布図

(2) 石器

尖頭器類(第168・169図 第45表 写真図版67)

当該遺跡において、縄文時代草創期に位置付けられる尖頭器は3点出土している。10はホルンフェルスを石材とする。5区B H95グリッドで出土している。基部が折損した資料で、両面に加工が施されている。基部の折れ面に二次加工を施した痕跡は窺えない。11はガラス質黒色安山岩を石材とする完形品である。5区B H94グリッドで出土している。12はガラス質黒色安山岩を石材とする有舌尖頭器で、7-2区B K11グリッドから出土している。全体的に風化が進み調整痕が判然としない。身部と茎部の境界が屈曲している。

石鎌・石鎌未製品(第183・184図 第46・47表 写真図版71)

75-79は石鎌及び石鎌の未製品か。出土しているのは全て無茎鎌と考えられる。3-1区・5区・7-1区・7-2区まで散発的に出土し、集中する傾向は窺うことは出来ない。

75は長脚鎌である。抉りが深く入り脚部が発達し、片方の脚部端が欠けている。和田鷹山産黒曜石を石材とする。76・77は抉りが浅いタイプで、ガラス質黒色安山岩を石材とする。両者とも先端部が欠けている。77は平面が二等辺三角形を呈する。78は鎌身両側縁が屈曲し、抉りが整えられていない。79は側縁部が未調整である。78・79は未製品か。両者とも神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。

スクレイパー類(第184・187図 第46・47表 写真図版71)

80-83はスクレイパー類に分類した。80は搔器か。諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とする。右側縁から下端にかけて刃部が仕上げられている。81-83は削器である。81は細粒凝灰岩を石材とする。打面及び打瘤を残し、側縁部に刃部が仕上げられている。82は産地不明の黒曜石である。縁辺に剥離調整を行い、刃部を仕上げている。83は諏訪星ヶ台産黒曜石を石材としている。

打製石斧(第184・185・189図 第46・47表 写真図版71)

84-86は打製石斧である。84は分銅形打製石斧である。輝石安山岩を石材とし、3-1区B O07グリッドで出土している。両側縁中位付近に抉りを入れ、両面共に素材面を残す。刃部は折損している。柄との繋縛痕は観察されない。85は珪質頁岩を石材とする。片面に自然面が残置する。86は細粒安山岩を石材とする。両側縁部が並行なので短冊形か。両面とも素材面を大きく残す。基礎部が折損している。

礫器(第185・189図 第46・47表 写真図版71)

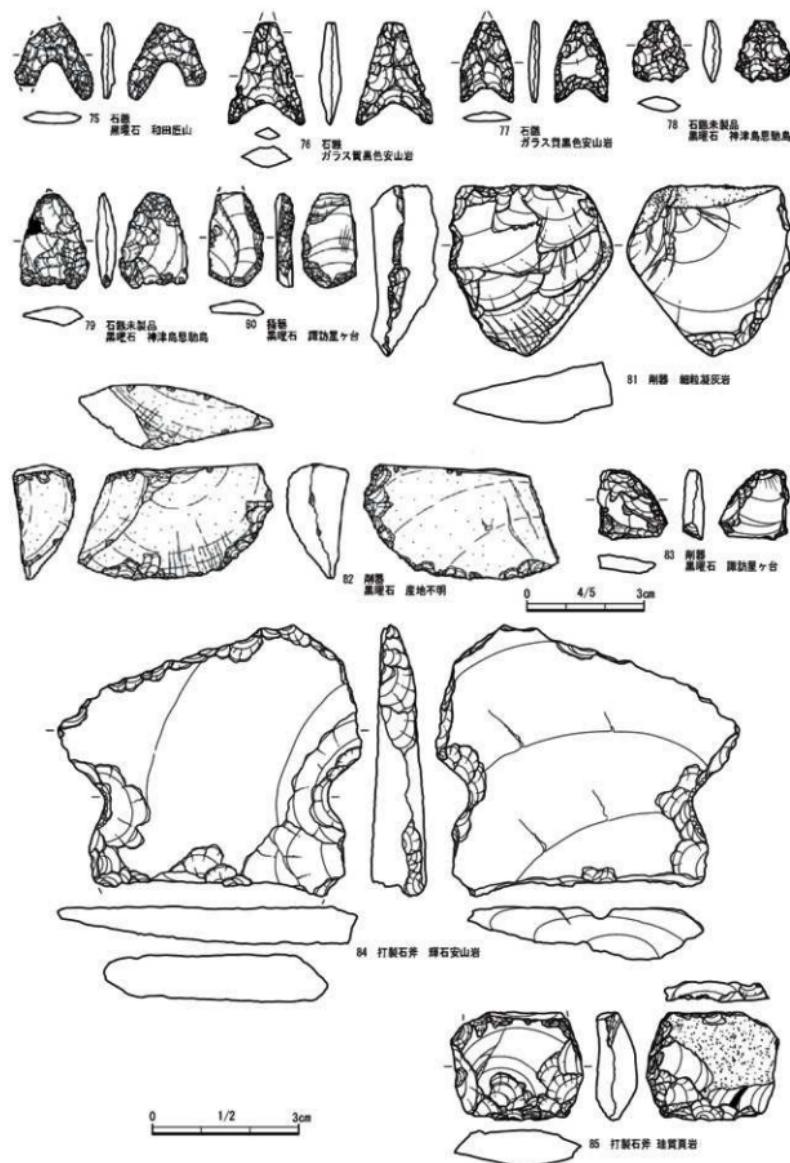
87は礫器である。細粒安山岩を石材とし、一部、自然面が残置する。刃部が認められるが、粗い加工である。

磨敲石類・砥石類(第185・186・189・190図 第46・47表)

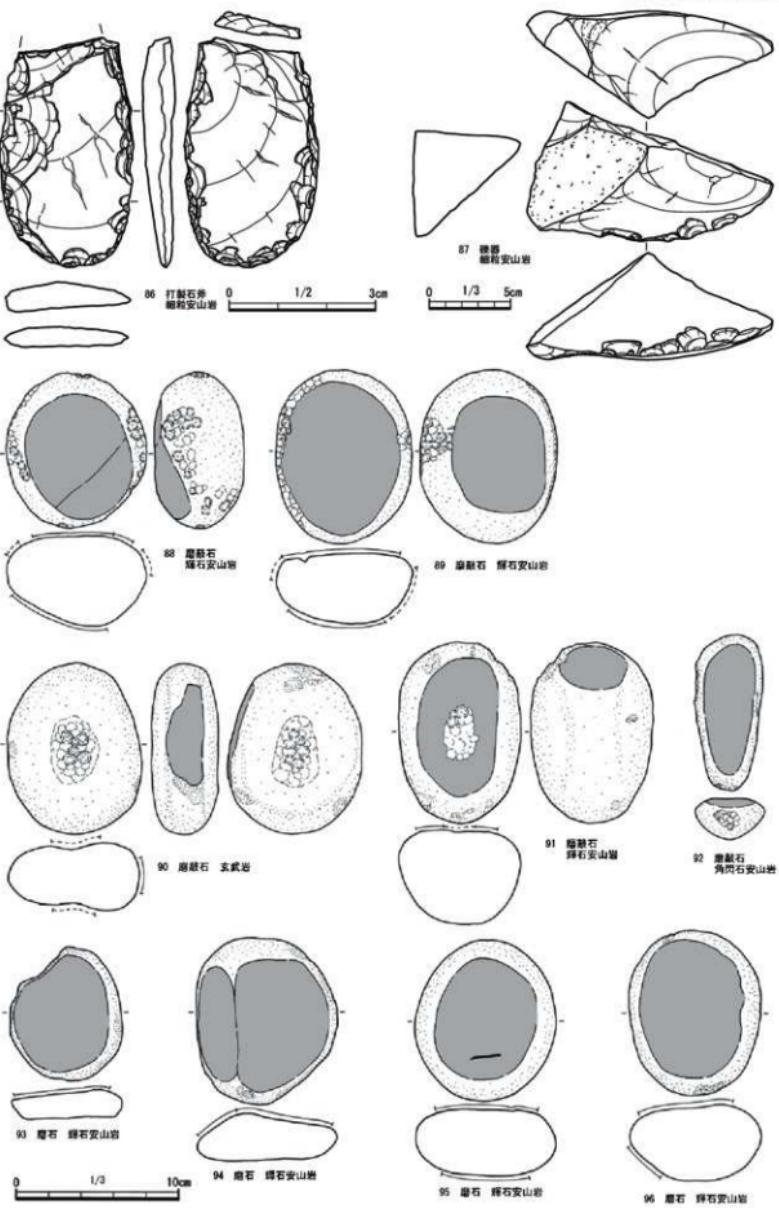
88-103は磨敲石類である。88-92は磨敲石で、そのうち88-91は平面が橢円形、92は棒状を呈する。88-89は両正面に磨面、周縁に敲打痕、90は両正面に敲打痕集中、側面に磨面、91は正面に磨面・敲打痕集中が観察される。92は片面に磨面、側面部及び下端面に敲打痕が観察される。

93-102は磨石である。そのうち93-98は扁平で、平面が橢円形を呈するタイプである。98は両面に窪みが認められる。99-102は棒状を呈するタイプである。いずれも複数の磨面を持つ。

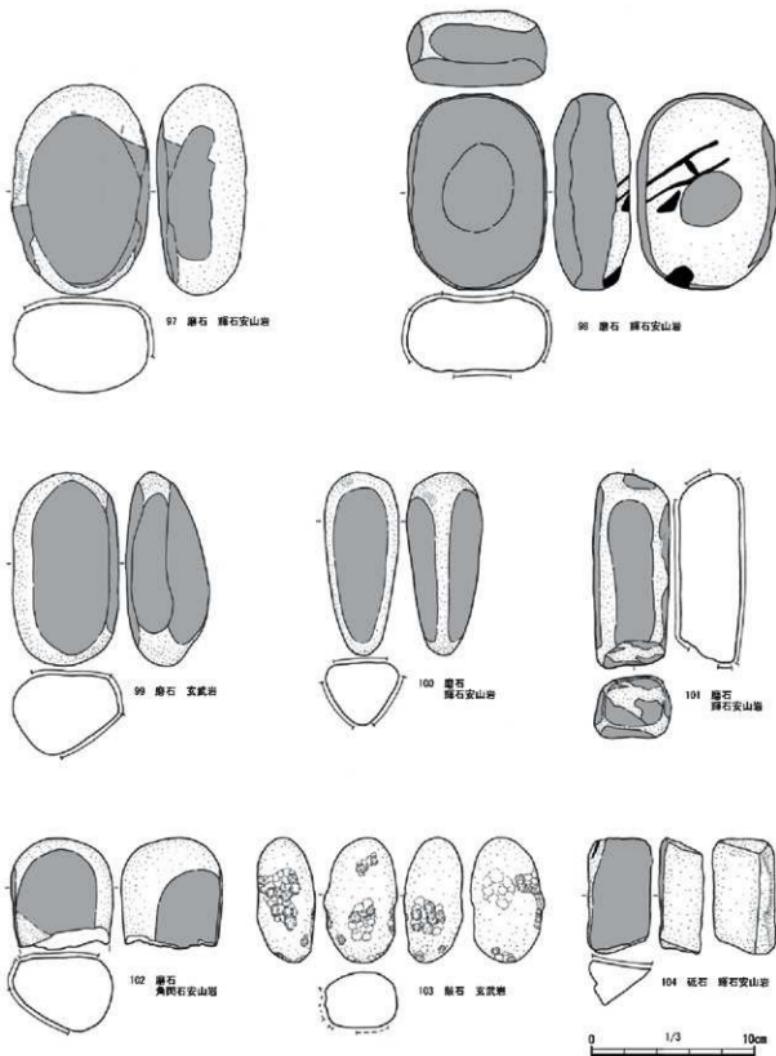
103は敲石である。やや棒状の礫を利用している。104は輝石安山岩を石材とする砥石か。



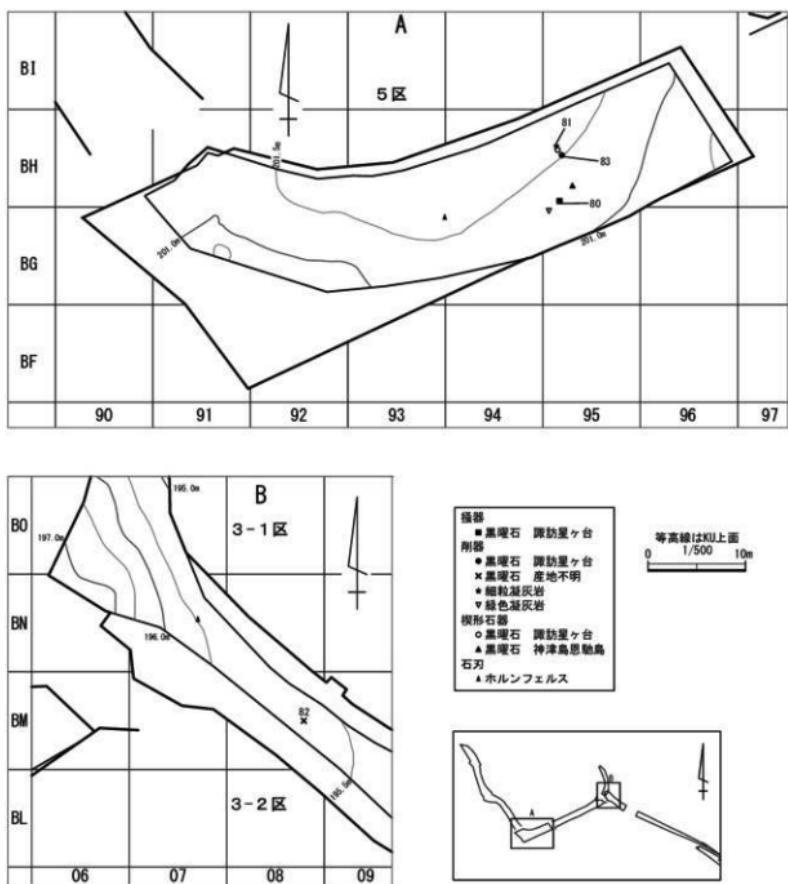
第184図 石器・石器未製品・スクレイバー類・打製石斧



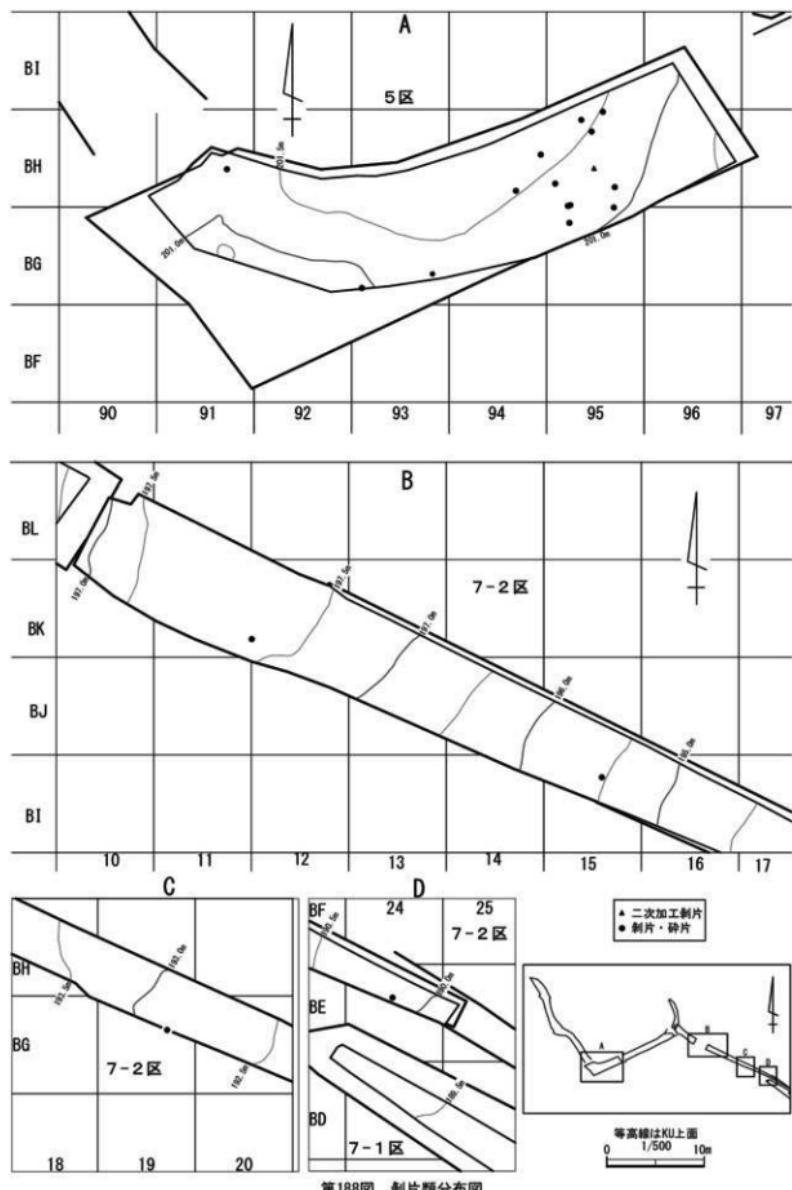
第185図 打製石斧・穀器・磨歯石類



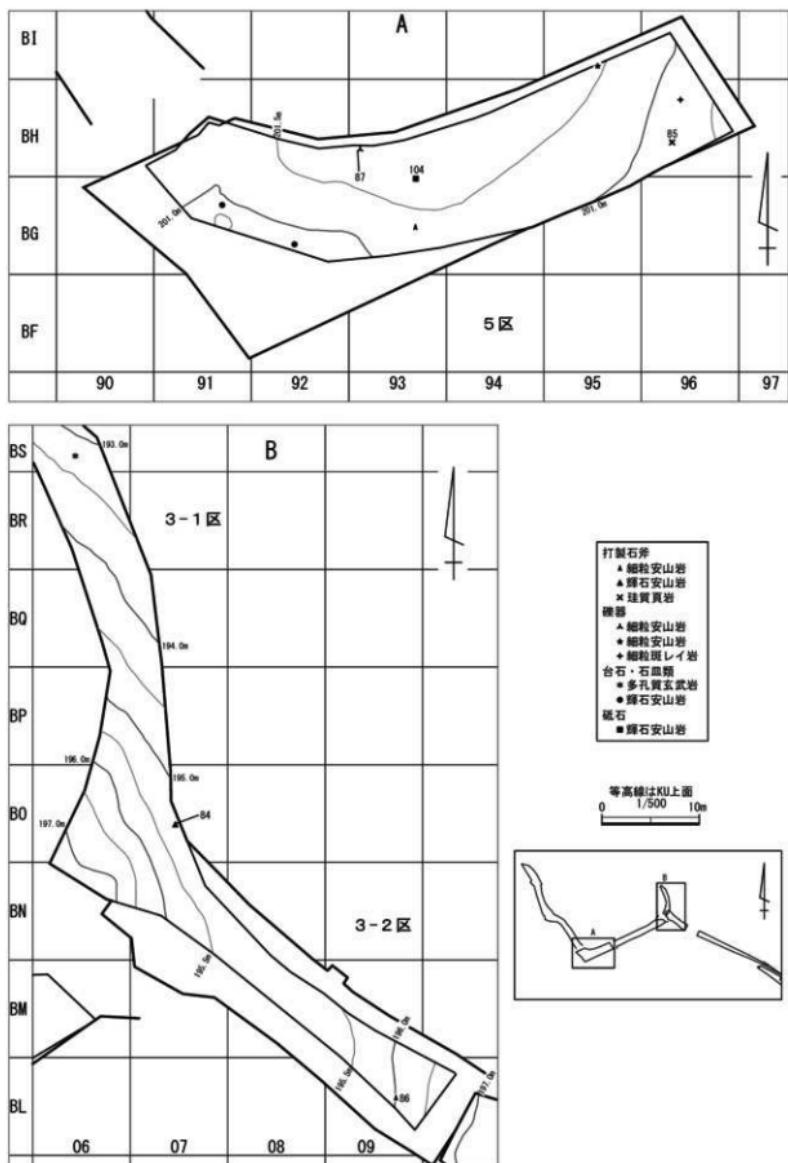
第186図 磨石類



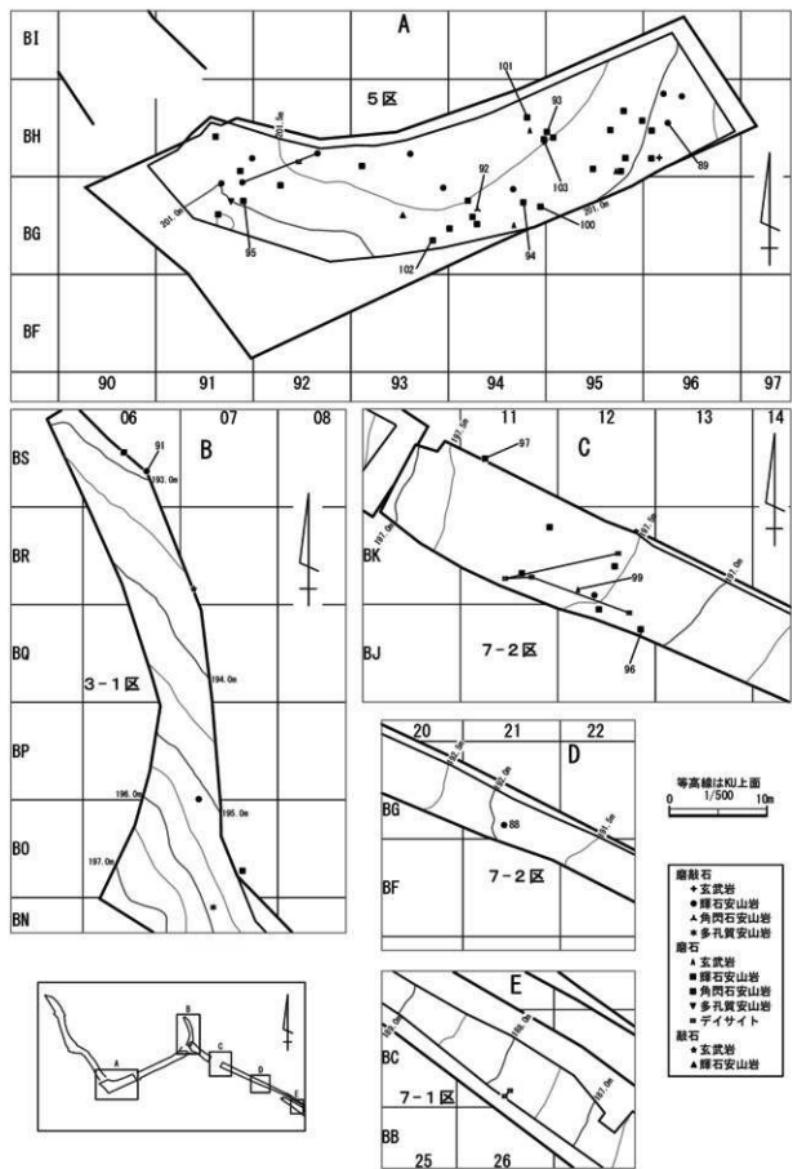
第187図 スクレイバー類・楔形石器・石刃分布図



第188図 剥片類分布図



第189図 打製石斧・砾器・台石・石皿類・砾石分布図



第190図 磨敲石類分布図

第45表 紹文時代草創期石器組成表

		古器	有茎尖頭器	計
ガラス質黒色安山岩	GAn	1	1	2
ホルンフェルス	Hor	1		1
計		2	1	3

第46表 紹文時代石器組成表

		石器	石器未製品	縫器	削器	複形石器	石刃	打製石斧	二次加工片	剝片	鉢	縫器	磨耗石	磨石	磨石	古石・石器類	砾石	計
神津島恩恵島	KZOB		2				1											3
南訪星ヶ台	SMHD	1		1	1													4
和田鹿山	WDTY	2																2
産地不明					1				1	9	1							12
黒曜石計		3	2	1	2		2		1	9	1							21
玄武岩	Ba															2	4	2
多孔質玄武岩	VBa																	1
ガラス質黒色安山岩	GAn	2																4
細粒安山岩	FAn								2	5	1							8
輝石安山岩	An(Py)						1				1	13	34	1	2	1		53
角閃石安山岩	An(Ho)											1	1					2
多孔質安山岩	VAn											1	1					2
ダイヤモンド	Da																	7
細粒斑状岩	FG																	1
ホルンフェルス	Hor						2		1									3
細粒凝灰岩	FT			1														1
緑色凝灰岩	GT				1													1
珪質安山岩	SSh								1									1
中粒砂岩	MSS									1								1
計		5	2	1	4	2	2	4	1	18	1	3	17	47	3	3	1	114

第47表 紹文時代造詣外出土石器計測表

標図番号	写真図版番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	石材	推定产地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
75	71	1143	AN	BP-06	石鏡	黒曜石	和田鹿山	(1.9)	2.0	0.3	0.7
76	71	38	FB	BF-23	石鏡	ガラス質黒色安山岩	(2.6)	1.9	0.5	1.8	
77	71	12180	KU	BH-91	石鏡	ガラス質黒色安山岩	(2.1)	1.3	0.3	0.8	
78	71	12275	FB	BG-94	石鏡未製品	黒曜石	神津島恩恵島	1.5	1.4	0.4	0.8
79	71	13214	ZN	BK-12	石鏡未製品	黒曜石	神津島恩恵島	2.3	1.7	0.5	1.6
80	71	12510	FB	BH-95	縫器	黒曜石	園訪星ヶ台	(2.4)	1.4	0.4	1.9
81	71	12148	KU	BH-95	削器	細粒凝灰岩	4.2	4.3	1.3	30.6	
82	71	2076	FB	BH-06	削器	黒曜石	産地不明	2.9	4.9	1.6	17.6
83	71	12146	KU	BH-95	削器	黒曜石	園訪星ヶ台	1.8	1.7	0.5	1.6
84	71	95	AN	BD-07	打製石斧	輝石安山岩	(10.1)	12.0	2.0	353.9	
85	71	12748	FB	BH-96	打製石斧	珪質安山岩	(5.2)	4.4	1.6	51.8	
86	71	2032	AN	BL-08	打製石斧	細粒安山岩	(9.2)	5.4	1.2	76.9	
87	71	12098	FB	BH-01	縫器	細粒安山岩	15.1	9.6	5.2	610.0	
88		13152	KU	BG-21	磨歯石	輝石安山岩	9.5	8.6	5.4	626.1	
89		2003	FB	BH-96	磨歯石	輝石安山岩	10.6	8.3	4.4	539.1	
90		13314	表探		磨歯石	玄武岩	10.4	8.2	4.1	566.5	
91		1156	AN	BS-06	磨歯石	輝石安山岩	11.1	7.5	5.7	696.9	
92		12919	FB	BG-94	磨歯石	角閃石安山岩	9.5	4.1	2.4	141.6	
93		13027	FB	BH-95	磨歯石	輝石安山岩	8.1	6.9	1.8	151.5	
94		12851	FB	BG-94	磨歯石	輝石安山岩	11.2	8.6	2.9	366.3	
95		12420	KU	BG-91	磨歯石	輝石安山岩	9.9	8.6	4.0	546.3	
96		13171	KU	BJ-12	磨歯石	輝石安山岩	10.1	8.2	4.7	570.1	
97		13232	AN	BL-11	磨歯石	輝石安山岩	12.8	8.3	5.5	914.7	
98		13313	表探	-	磨歯石	輝石安山岩	12.0	8.4	4.6	715.4	
99		13302	KR	BK-12	磨歯石	玄武岩	11.8	6.4	5.1	527.9	
100		12539	FB	BG-94	磨歯石	輝石安山岩	11.2	4.5	3.9	254.2	
101		12302	FB	BH-94	磨歯石	輝石安山岩	11.8	4.6	3.8	406.7	
102		13100	ZN	BG-93	磨歯石	角閃石安山岩	(6.7)	6.0	4.6	268.9	
103		12531	FB	BH-94	敲石	玄武岩	7.7	4.5	3.6	153.7	
104		12602	FB	BG-93	硃石	輝石安山岩	7.9	3.8	2.7	86.0	

第4節 中近世以降の遺構と遺物

1 概要

当該遺跡及び周辺の確認調査では、古代以降と思しき遺構が確認されている。遺構の種類は道路状遺構、溝状遺構及び土坑である。土坑は円形土坑であり、中近世以降に位置付けられるのが一般的である。遺物も古代のものは出土していない。

2 遺構

(1) 溝状遺構(第194・195図 第48表)

確認調査テストピット27において、溝状遺構を1条確認した。暗褐色土層上面にて確認されたが、カワゴ平バミスを含む層よりも上位から掘り込まれていたとする調査時の所見から、所属時期は古代以降とされている。円形土坑と同時期か。

(2) 土坑(第191～196図 第48表 写真図版62・63)

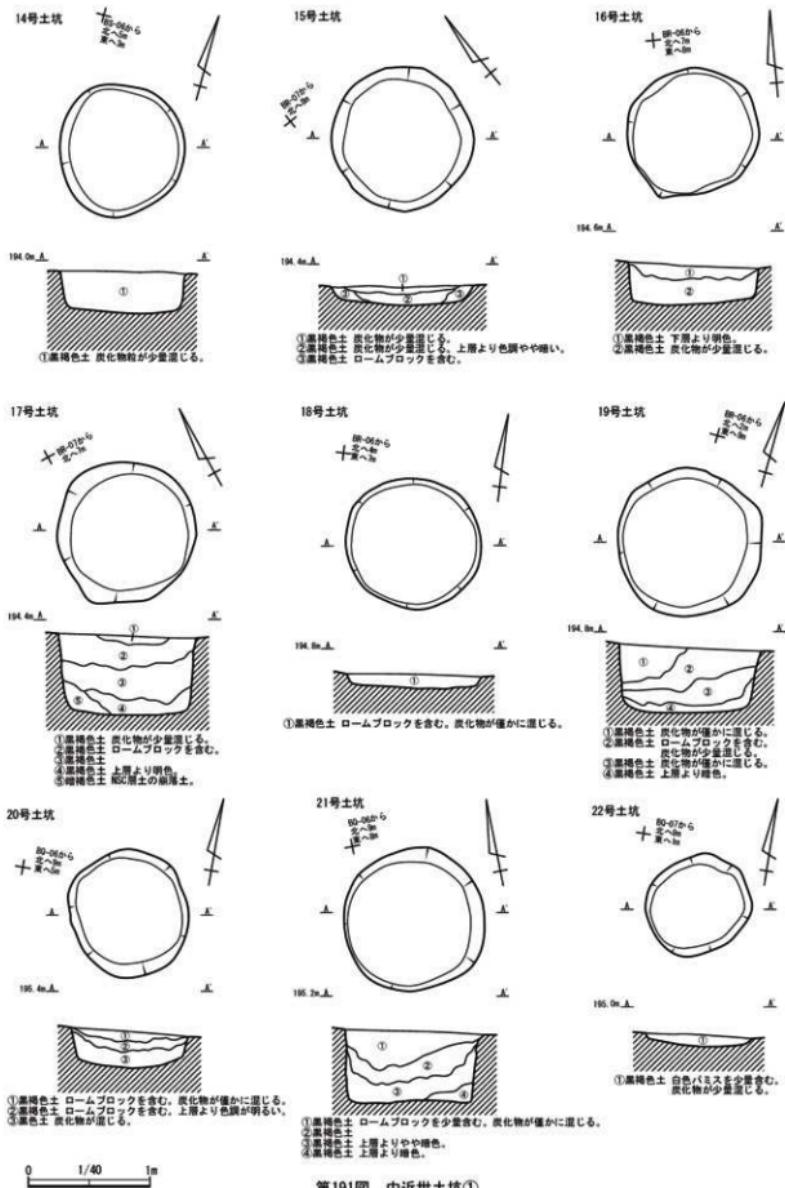
当該遺跡及び周辺の確認調査では26基の土坑が確認されている。全て円形土坑である。土坑の径は0.61～1.31mで、約1.0～1.3m程度に計測値が集中する。これらの土坑は3-1区BQ・B R06グリッド付近で、等高線と交差するように列状に分布する。また3-2区BM09グリッド付近でも分布が集中する。

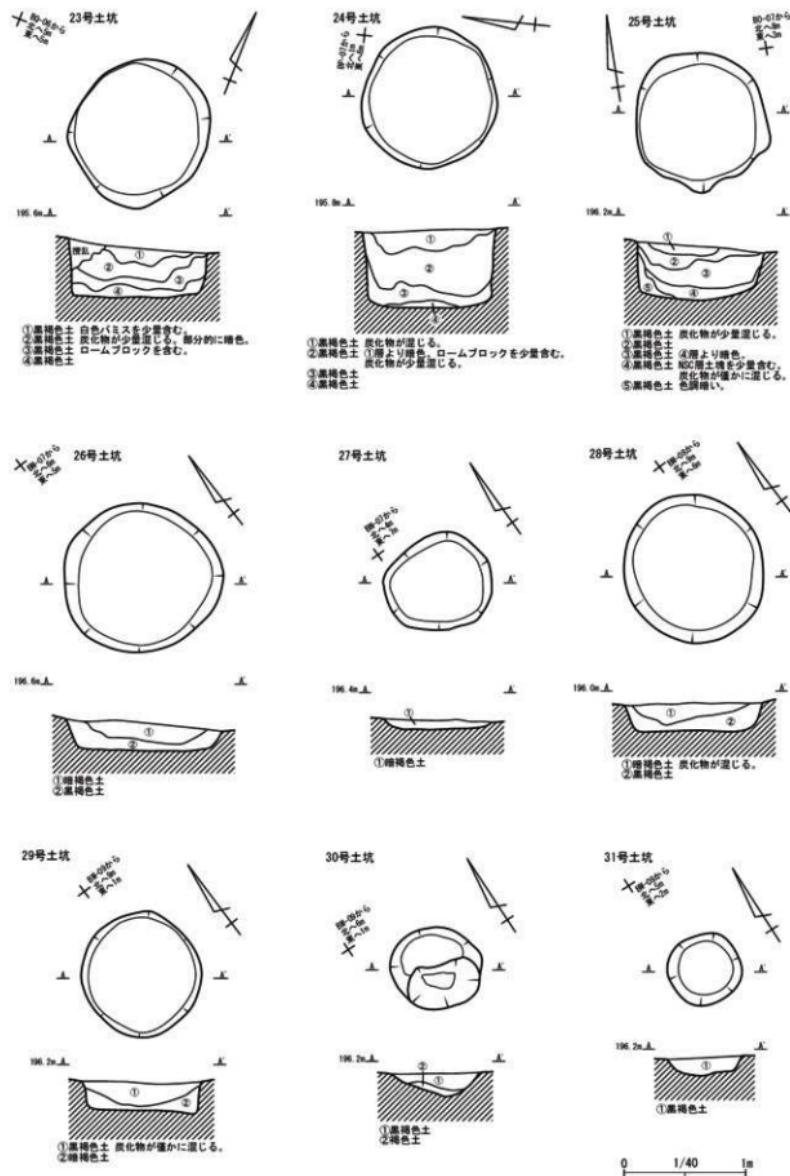
(3) 道路状遺構(第193・195図 第48表 写真図版63)

3-2区調査区南壁に沿って硬化域が広がる状況が、黒色土上面で確認されている。中近世以降の道路状遺構と考える。

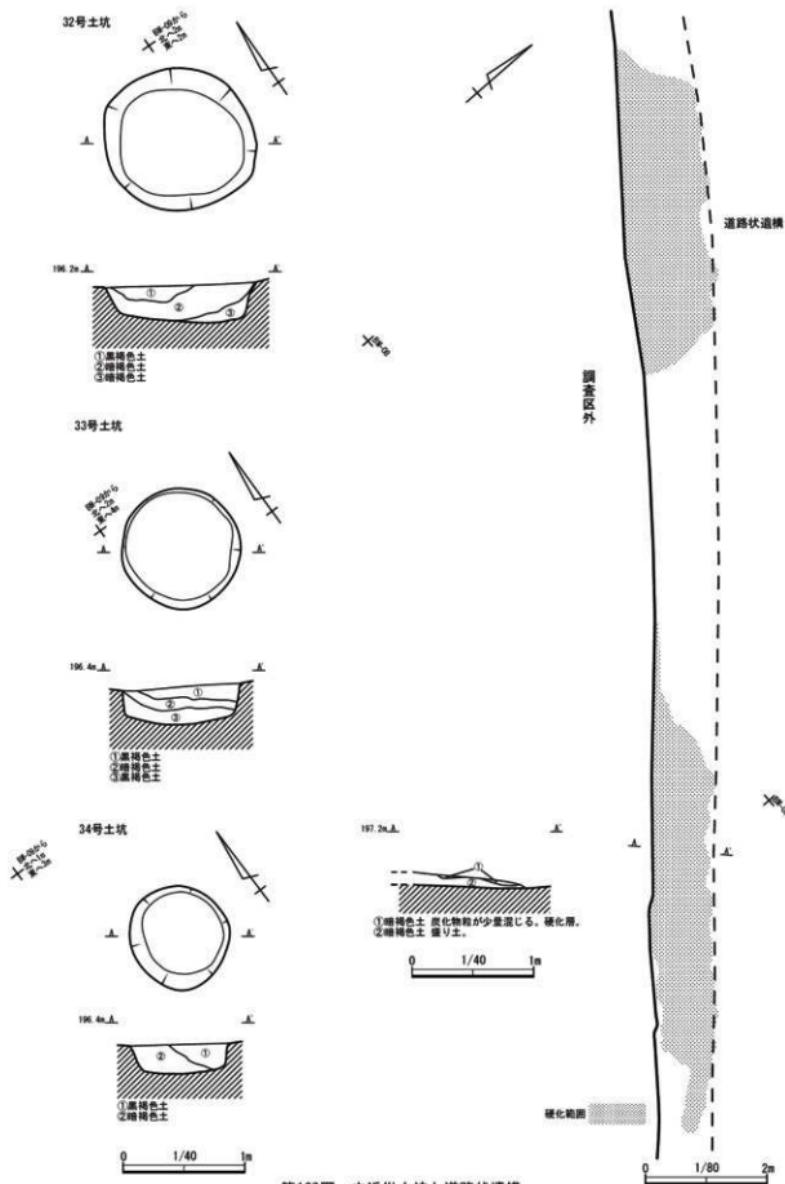
第48表 中近世以降の遺構計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土器	石器	礫	炭化物	計	備考
14号土坑	SF01	BS-06	NSC	1.10	1.02	0.34						
15号土坑	SF06	BR-07	NSC	1.19	1.17	0.19						
16号土坑	SF08	BR-06	NSC	1.14	1.08	0.38						
17号土坑	SF07	BR-07	NSC	1.15	1.13	0.38						
18号土坑	SF09	BR-06	NSC	1.14	1.05	0.13						
19号土坑	SF10	BR-06	NSC	1.24	1.21	0.58						
20号土坑	SF11	BS-06	NSC	1.06	1.00	0.34						
21号土坑	SF12	BS-06	NSC	1.18	1.18	0.59						
22号土坑	SF14	BS-07	NSC	0.88	0.79	0.10						
23号土坑	SF13	BS-06	NSC	1.25	1.13	0.50						
24号土坑	SF15	BS-07	NSC	1.15	1.10	0.67						
25号土坑	SF16	BS-07	NSC	1.17	1.08	0.48						
26号土坑	SF30	BN-07	NSC	1.31	1.22	0.29						
27号土坑	SF29	BN-07	NSC	0.90	0.81	0.12						
28号土坑	SF28	BN-08	NSC	1.23	1.14	0.24						
29号土坑	SF27	BN-09	NSC	1.03	0.99	0.26						
30号土坑	SF26	BN-09	NSC	0.76	0.69	0.16						
31号土坑	SF25	BN-09	NSC	0.62	0.61	0.16						
32号土坑	SF24	BN-09	NSC	1.26	1.18	0.34						
33号土坑	SF23	BN-09	NSC	0.98	0.97	0.33						
34号土坑	SF22	BN-09	NSC	0.85	0.82	0.26						
35号土坑	SF17	BK-02	NSC	1.11	1.11	0.14						
36号土坑	SF18	BK-01	NSC	1.09	1.08	0.14						
37号土坑	SF19	BK-02	NSC	1.14	1.07	0.24						
38号土坑	SF02	BY-14	NSC	0.82	0.63	0.08						
39号土坑	SF03	BY-14	NSC	1.18	1.14	0.37						
4号溝	SD10	BK-01	AN	2.93	0.63	0.19						
道路状遺構	SD01	BN-08	黒色土	17.82	1.05	1.41						

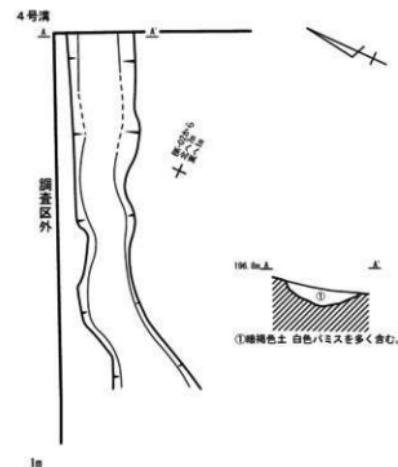
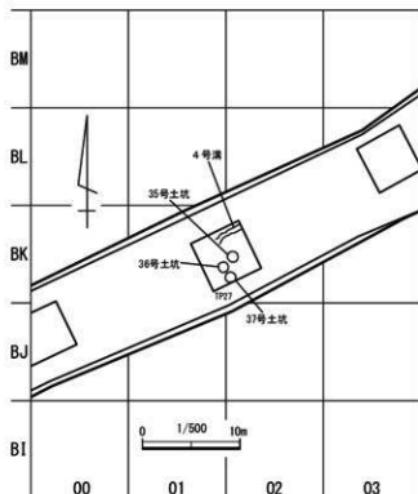
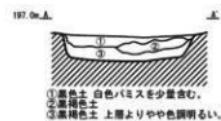
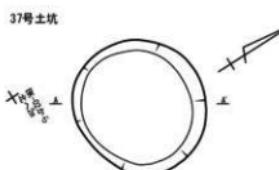
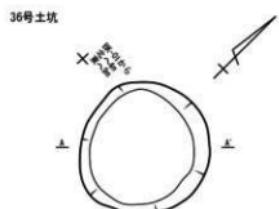
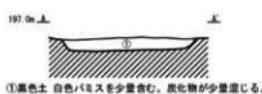
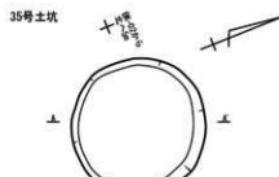




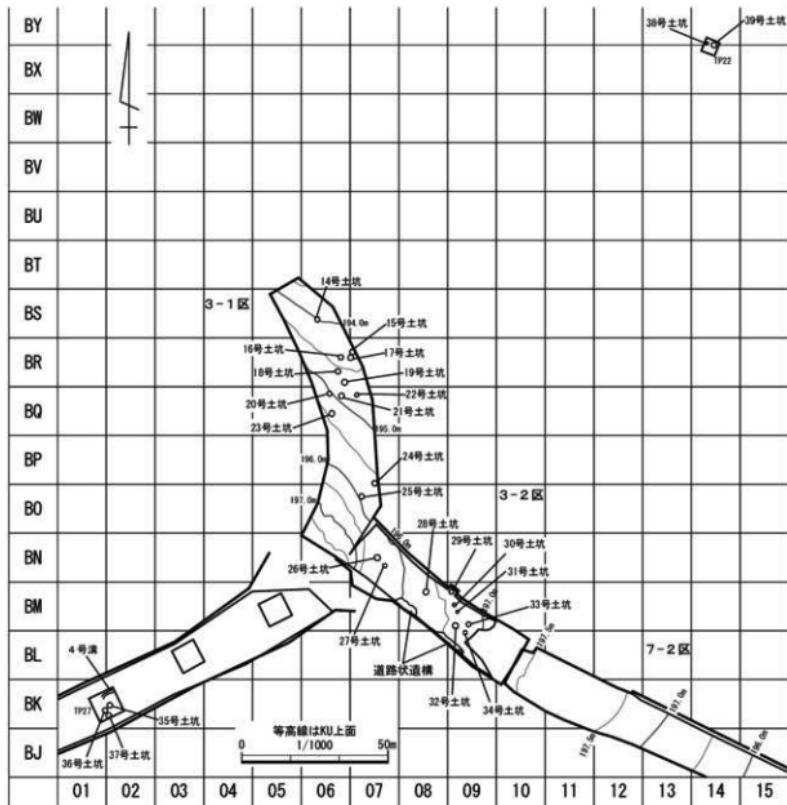
第192図 中近世土坑②



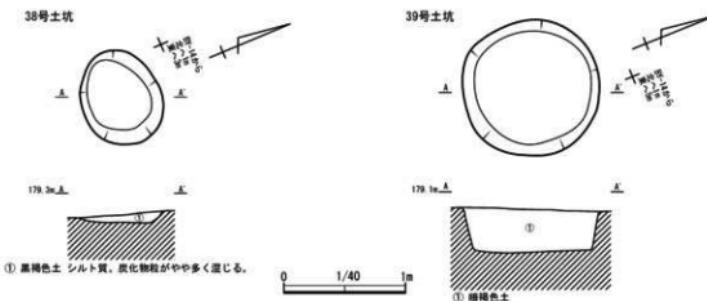
第193図 中近世土坑と道路状遺構



第194図 中近世土坑と溝状遺構



第195図 中近世以降の遺構位置図



第196図 中近世土坑③

第5章 富沢内野山V遺跡(C R36地点)

第1節 基本層序と土層の堆積状況

富沢内野山V遺跡は愛鷹山東麓に位置するが、第2～4章で触れられた遺跡とは位置的に異なる。富沢内野山III北遺跡及び富沢内野山IV西遺跡が位置する尾根は、南側を富沢内野山I西遺跡が位置する谷により区切られている。一方、北側の谷は地形的にやや急峻で南東方向に延びている。本章にて触れる富沢内野山V遺跡はこの谷を隔てた北側の尾根上に位置する。この尾根は別の谷地形により切断され、独立した景観を保っている。尾根上の平坦面は少なく、所謂馬の背状の地形を呈する。

第197図はテストピット75で観察された土層で、当該地区で最も基本的な層序と考えられる。

1層は表土である。地目は山林であったため、腐食した樹皮・木葉等が地表面近くで観察される。

2層は新期スコリア層とし、仙石スコリアや砂沢スコリアも混在する。他の遺跡同様、明瞭に分層しえていない。

3層はカワゴ平バミスを含む層と報告されている。

4～6層は愛鷹山基本層序の暗褐色土層・栗色土層・富士黒土層に該当するものと考えられるが、この3層の分離が成し得ていない。それぞれの略号はAN・KU・FBである。愛鷹山南麓における富士黒土層には繩文時代早期後半の遺物が含まれている。

7層は漸移層である。略号はZNである。1～7層は現世火山灰腐食土層としてまとめられる。

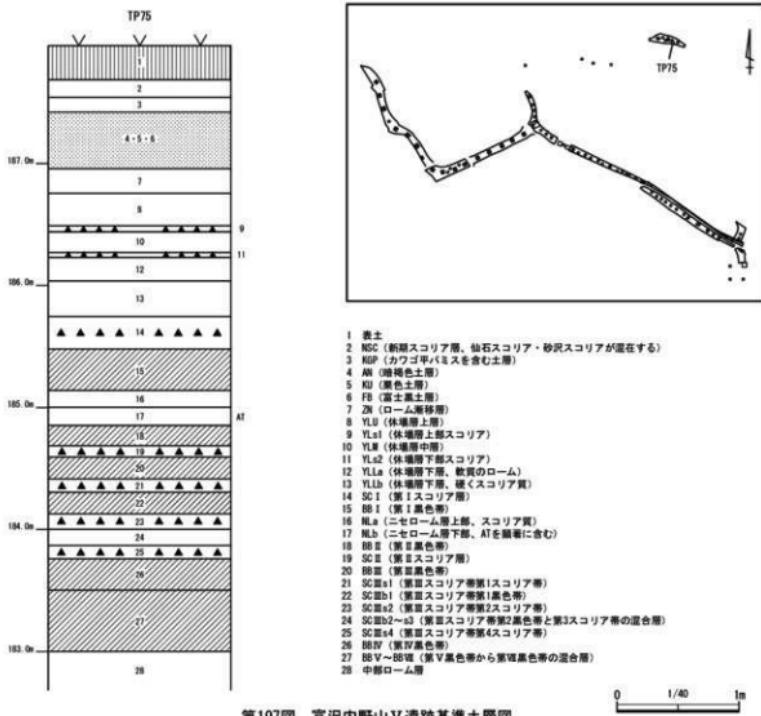
8～13層は休場層である。略号はYLである。この休場層は部分的に挟まる赤褐色を呈するスコリア層により分離される。8層：休場層上層(YLU)、9層：休場層上部スコリア(YLs1)、10層：休場層中層(YLM)、11層：休場層下部スコリア(YLs2)に分層され、休場層下層(YLL)は締りの有無により12層(ソフトローム)、13層(ハードローム、ややスコリア質)に分層される。なおこの富沢内野山V遺跡では休場層中層付近に文化層の設定が可能である。

14層は第Iスコリア層である。略号はSCⅠである。本来ならこの層位の上位に休場層直下黒色帶(BB0)が堆積しているが、当該遺跡ではCB25グリット付近のみ認められる。

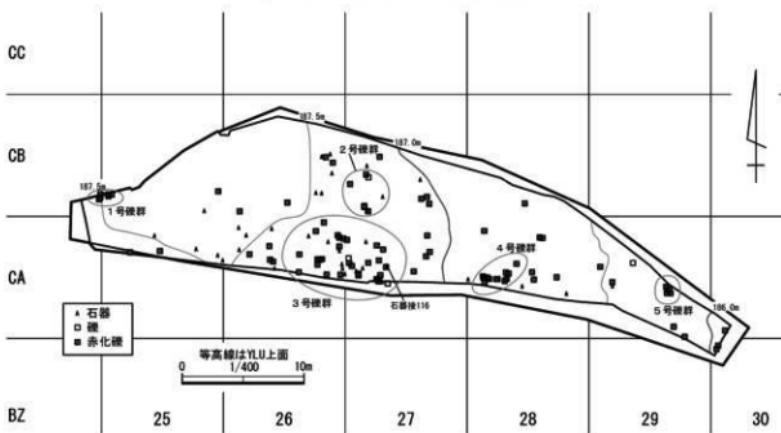
15層は第I黒色帶である。略号はBBⅠである。

16・17層はニセローム層である。略号はNLである。スコリア質が特徴的なニセローム層上部と、始良丹沢広域火山灰(AT)を多く含むニセローム層下部に分離が可能で、前者を16層、後者を17層としている。

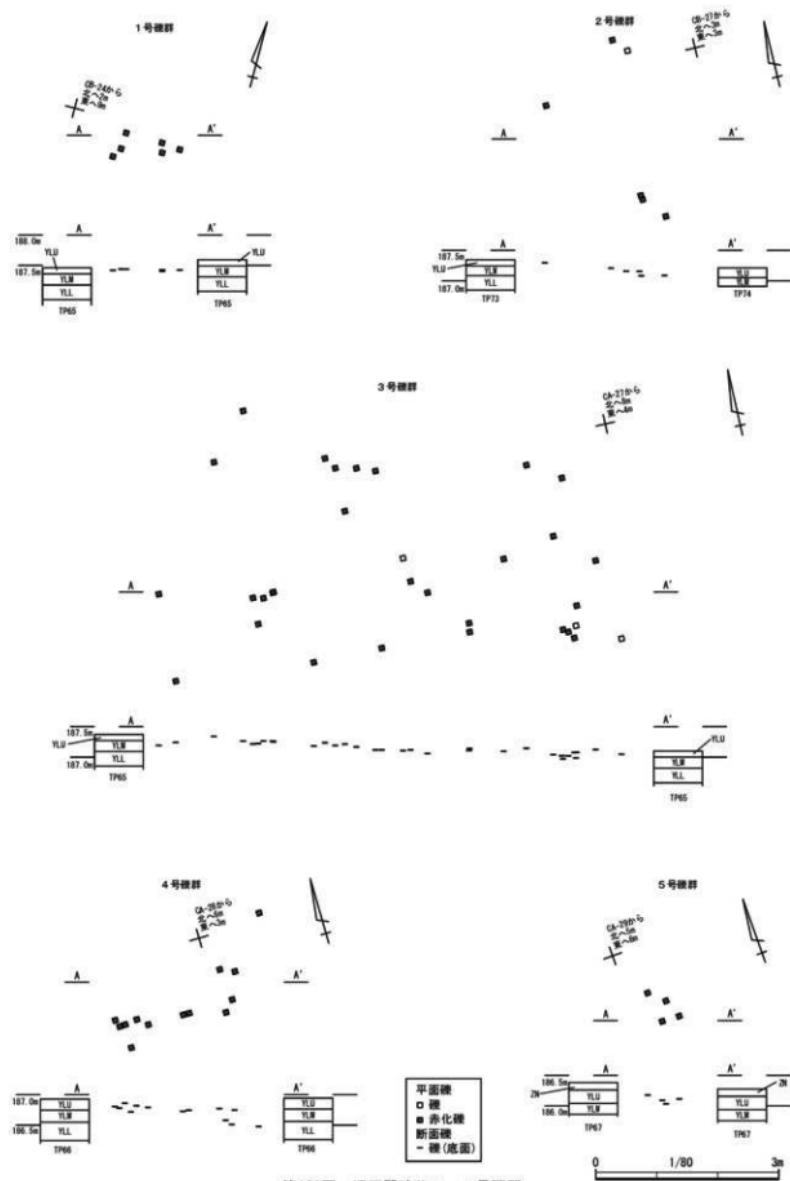
18層は第II黒色帶に該当し、略号はBBⅡである。19層は第IIスコリア層に該当し、略号はSCⅡである。20層は第III黒色帶に該当し、略号はBBⅢである。21層は第IIIスコリア帶第Iスコリア帯に該当し、略号はSCⅢs1である。22層は第IIIスコリア帶第I黒色帶で、略号はSCⅢb1である。23層は第IIIスコリア帶第2スコリア帯に該当し、略号はSCⅢb2である。24層は第IIIスコリア帶第2黒色帶と第3スコリア帯の混合層と現地で判断された。略号は前者がSCⅢb2、後者はSCⅢs3である。25層は第IIIスコリア帶第4スコリア帯に該当し、略号はSCⅢs4である。26層は第IV黒色帶に該当し、略号はBBⅣである。27層は第V黒色帶から第VII黒色帶までの混合層と現地で判断された。略号はBBV～BBVIIである。28層は中部ローム層に該当する。



第197図 富沢内野山V遺跡基準土層図



第198図 旧石器時代石器出土状況



第199図 旧石器時代1～5号櫛群

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

富沢内野山V遺跡は前節でも述べているように、独立した尾根上に位置している。この遺跡の範囲内に該当するC R36地点6区として設定された調査区は、この尾根頂部から東側にかけての区域に該当する。この尾根自体は緩やかに東へ標高値を減じつつも平坦な土地が展開する。調査の結果、休場層を中心とした旧石器時代の遺構・遺物が確認されている。遺構は礫群が主体である。礫群は被熟に由来するものと考えられる赤化礫を主体とする。

この富沢内野山V遺跡の調査の結果では、旧石器時代の遺構・遺物は第I黒色帯より下位では未確認のまま終了している。石器もまた多く出土し、石器は礫群とほぼ同一地点で出土したため、遺物集中地點という理解も可能であるが、富沢内野山I西遺跡と同様、礫群を基調とした報告を行う。なお礫群・石器の検討・分類については、平成23年度に柴田亮平の教示のもと西田真由子が行い、勝又が文章化している。

2 遺構

(1) 磕群

1号礫群(第198・199図 第49・52表)

当該礫群はC B24・25グリッドに位置し、礫6点で構成される。礫は主として休場層直下黒色帶にて出土している。礫はいずれも赤化礫である。この礫群は調査区北壁際で確認され、本来的には調査区外へ拡がる可能性がある。

2号礫群(第198・199図 第49・52表 写真図版74)

当該礫群はC B27グリッド南西隅に位置し、礫6点で構成され、このうち5点は赤化礫である。これら礫は主として休場層中層から上層にかけて出土している。この礫群及び南側に位置する3号礫群は尾根頂部から緩やかに傾斜し始める箇所に展開する。周囲で石器の出土が認められるため、併せて石器ブロックと設定することも可能である。

3号礫群(第198・199図 第49・52表)

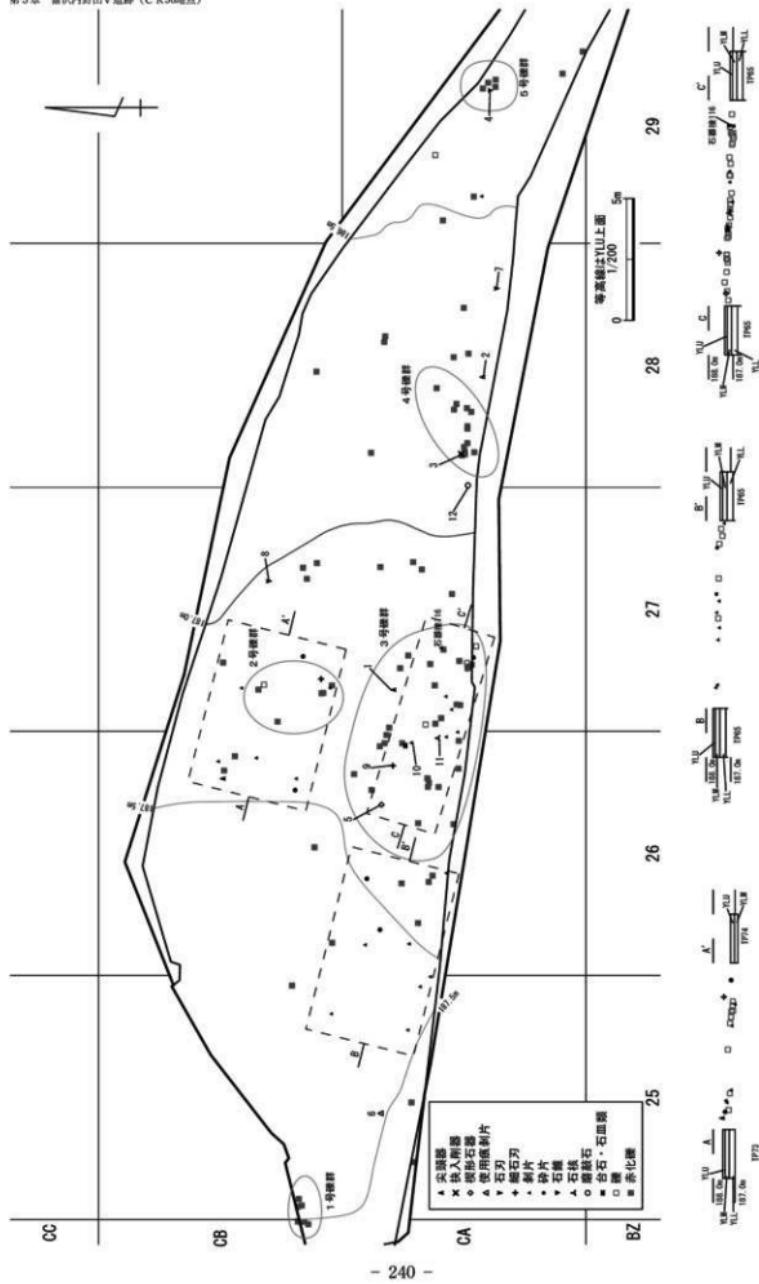
当該礫群はC A26・27グリッドに位置し、礫32点で構成され、このうち29点は赤化礫である。礫は主に休場層中層から上層にかけて出土している。この礫群は調査区南壁際に位置し、その範囲が更に拡がる可能性がある。また石器の出土範囲と合致するため、石器ブロックと設定することも可能である。

4号礫群(第198・199図 第49・52表)

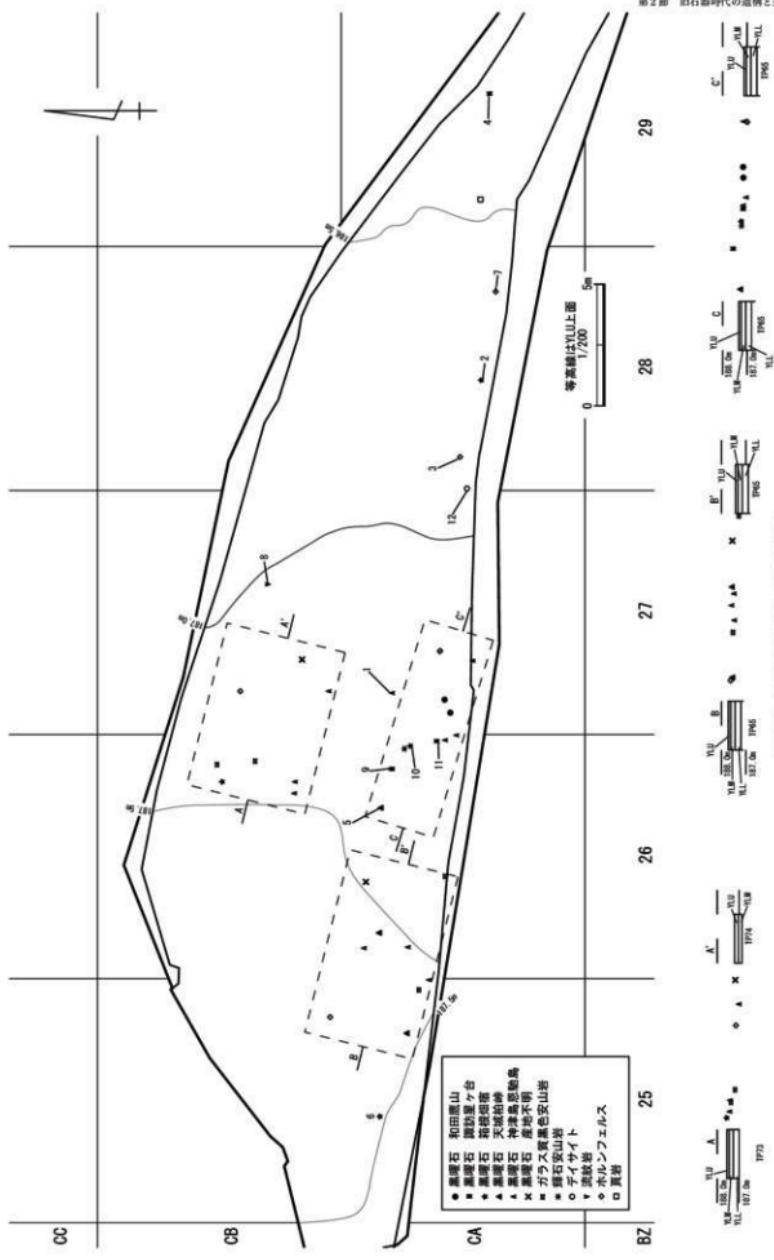
当該礫群はC A28グリッドに位置している。礫13点で構成される。礫は主として休場層上層にて出土している。礫はいずれも赤化礫である。礫群は3号礫群から東へ約7mの位置にあり、調査区南側へ拡がる可能性を持つ。

5号礫群(第198・199図 第49・52表)

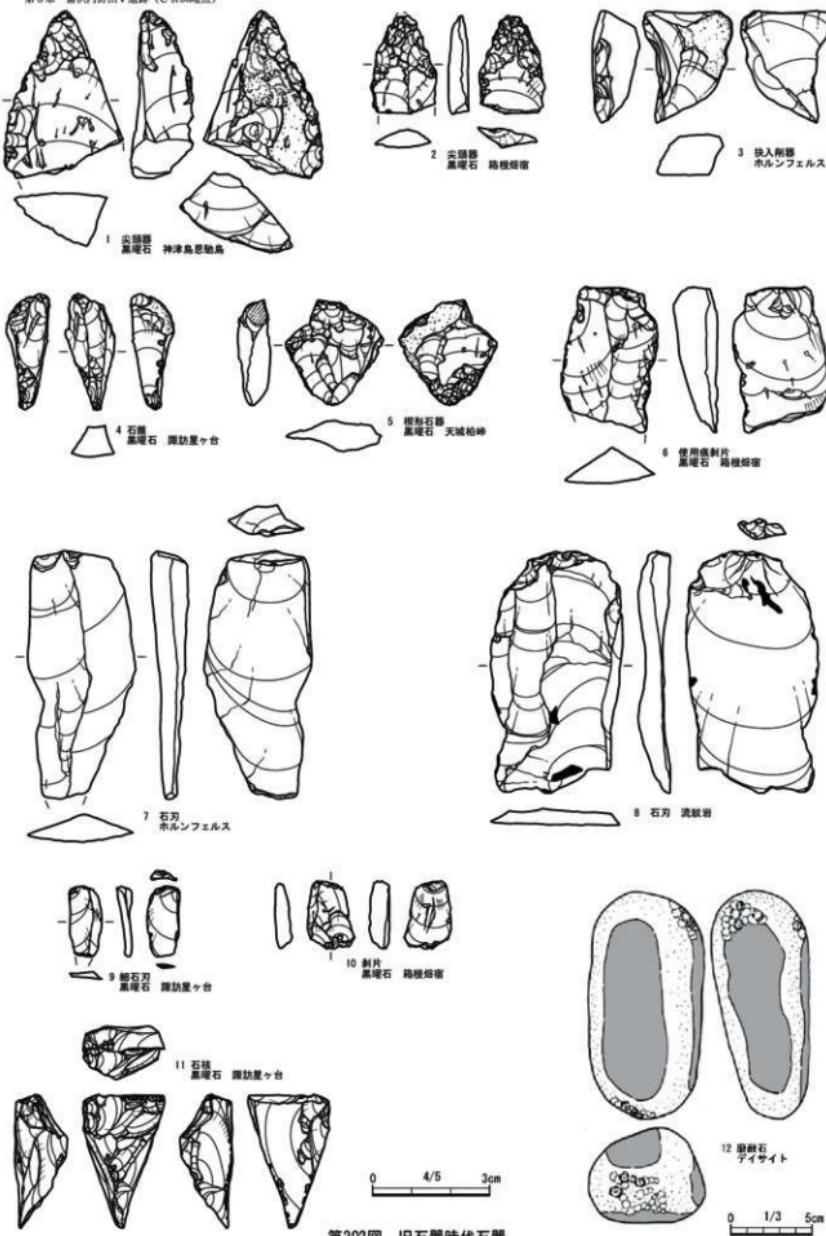
当該礫群はC A29グリッドに位置している。礫4点で構成される。礫は主として休場層上層で出土している。礫はいずれも赤化礫である。この礫群は1～4号礫群から離れ、石錐が1点出土している。



第206図 旧石器時代器種別分布図



第20図 旧石器時代石材別分布図



第202図 旧石器時代石器

石器ブロック(第200・201図)

石器はC A・C B 26・27グリッドの主に休場層上層にて出土する。その出土地点は2・3号礫群の範囲と重複する。出土石器は剥片が多いが、石刀・細石刃等も確認される。石器の石材は黒曜石が主体で、神津島恩馳島産がやや多い。3号礫群には諏訪星ヶ台産黒曜石の石核が1点出土している。また3号礫群東側にも剥片等の散布が確認され、石器ブロックとして設定が可能である。

(2) 遺物(第200~202図 第50・51表 写真図版75)

1~12は第Iスコリア層から栗色土層にて出土した石器である。1・2は尖頭器か。石材は共に黒曜石で、前者は神津島恩馳島産、後者は箱根烟宿産である。1は下半部が折損した資料である。両面共に素材面、自然面が残置し、側縁のみ剥離調整による加工が施されている。2もまた下半部が折損している。両面共に素材面が残置し、先端部に細かい剥離を加えた部分調整の尖頭器である。3は抉入削器か。ホルンフェルスを石材とする。一部に自然面が残置し、片側側縁に抉りを入れている。4は石錐か。一部自然面が残置する。5は楔形石器か。天城柏崎産黒曜石を石材とする。6は使用痕剥片で、箱根烟宿産黒曜石を石材とする。縁辺に僅かであるが微細な剥離が見られる。7・8は石刀である。前者はホルンフェルス、後者は流紋岩を石材とする。両者とも打面部は残置する。9は細石刃である。諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とする。11は石核か。諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とする。側縁の一部に微細な剥離が観察される。12は磨敲石である。デイサイトを石材としている。棒状の礫を利用して、上下端部に敲打痕が見られる。

第49表 旧石器時代属性表

礫群番号	横横数	赤化					形態			石材						
		完形		非完形			墨角	墨円	円	玄武岩	玄多孔質	安山岩	安山孔質	サダイ	黄岩	砂岩類
		非赤化	赤化	非赤化	赤化1	赤化2										
1号礫群	6		3		2	1	6			2		4				
2号礫群	6		2	1	2	1	5		1	1		4				1
3号礫群	32	1	14	2	12	3	23	7	2	4	1	22	4			1
4号礫群	13		2		7	4	12	1		1	1	9	1	1		
5号礫群	4		1		3		1	2	1	2		1	1			
道標外	32		9	1	20	2	24	8		8		21	3			
計	93	1	31	4	46	11	71	18	4	18	2	61	9	1	1	1

第50表 旧石器時代石器組成表

		玄武岩	抉入削器	楔形石器	石核	石刀	細石刃	使用痕剥片	剝片	砂片	石錐	磨敲石	台石・石器類	計
天城柏崎	AGKT			1					1	1				3
箱根烟宿	HNUJ	2						1	1					4
神津島恩馳島	KZOB	1					1		7	2				11
諏訪星ヶ台	SWHD				1	1					1			3
和田鹿山	WDTY								2					2
産地不明										2				2
黒曜石片		3		1	1		2	1	11	5	1			25
ガラス質黒色安山岩	GAn								4					4
輝石安山岩	An(Py)												1	1
デイサイト	Da											1		1
流紋岩	Rhy					1								1
ホルンフェルス	Hor		1			1			4					6
黄岩	Sh									1				1
計		3	1	1	1	2	2	1	20	5	1	1	1	39

第51表 旧石器時代石器一覽表

10

第52卷 旧石器时代晚期—新石器

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 概要

(1) 遺構

富沢内野山V遺跡で確認された縄文時代の遺構は、集石4基、土坑1基、炉跡15基である。これらの遺構は主にCA28グリッドに多く分布している。特に当該グリッド内に炉跡が集中、且つ重複するものが見受けられる。遺跡から南西の方向約330mの位置にある富沢内野山IV西遺跡5区でも炉跡群が確認されるが、時期差こそあれ、該期における生業の類似点を想起させる。

(2) 遺物

当該遺跡で確認された縄文時代の遺物は草創期～中期の範疇で捉えている。草創期については該期の石器のみ確認している。当該遺跡での特徴として、出土遺物は早期の押型文土器を中心で、楕円文を施した土器群が卓越している。谷を挟んだ富沢内野山III北遺跡では早期に位置付けられる土器群は僅少で、また富沢内野山IV西遺跡では楕円文土器は見受けられず、代わりに山形文を施した土器が多い点とは対照的である。土器については池谷信之氏・小崎晋氏に指導を受けた。

2 遺構と遺構内出土遺物

(1) 集石

当該遺跡では集石が4基確認された。そのうち3基がCA28グリッド付近に分布が偏る。

1号集石(第203・204図 第53表 写真図版73)

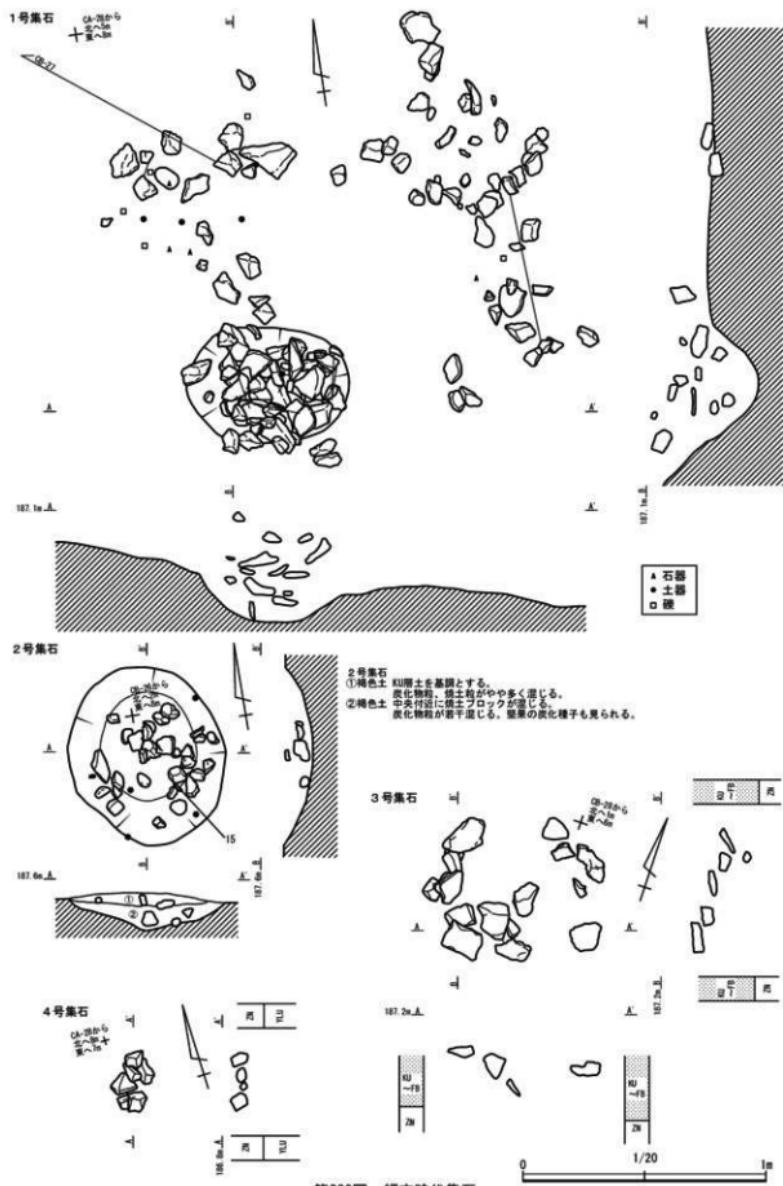
1号集石はCA28グリッドの栗色～富士黒土層上面にて確認された。この集石は礫135点及び土坑1基で構成される。礫の分布範囲は不定形かつ環状で、2.10m×1.95mを測る。礫分布範囲の南西隅に土坑が位置する。この土坑にも礫を伴う。土坑の平面は楕円形を呈し、計測値は長径0.69m、短径0.48m、深さ0.40mを測る。覆土は黄褐色～褐色土で褐色スコリア及び炭化物を含み、後者は径3～4mm程度でやや多く含むと現地調査時に観察される。底部の形状は丸底に近い。径約15cm程度の平坦な角礫が伴う。当該集石の西側には2号炉跡が接する。

2号集石(第203・204・207図 第53・54表 写真図版73・75)

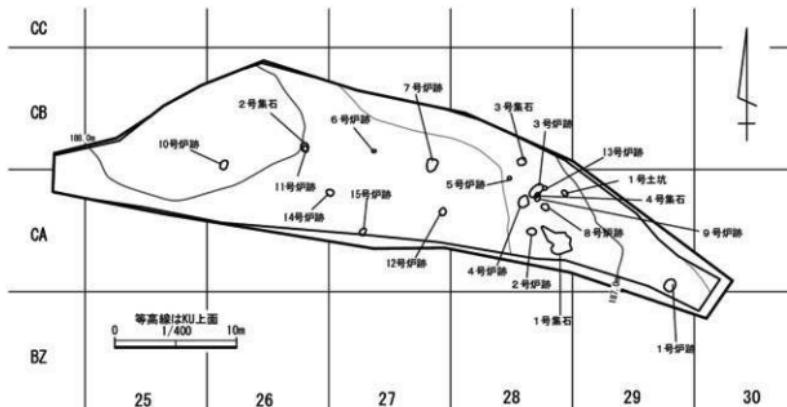
2号集石はCB26グリッド南東隅付近の栗色～富士黒土層上面で確認された。この集石は礫29点で構成される。この遺構は土坑を伴う集石で、平面は楕円形を呈し、計測値は長径0.70m、短径0.60m、深さ0.16mを測る。上端から緩やかに底部に至る。覆土は全体的に炭化物が含まれ、覆土1層は栗色土層を基調とする。なおこの集石土坑の下位では11号炉跡が検出されており、同一の遺構の可能性も想起されたが、現地調査での所見では別個の遺構と判断がなされた。なお当該集石出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 $7,890 \pm 30$ yrBPという数値が出されている。またこの集石から土器片(15)が出土している。15は口縁部のみの破片資料である。胎土に纖維を多く含む。内外面に条痕文か。口唇部は平坦に仕上げ、ヘラ状の工具で刻目を施している。所属時期は早期か。

3号集石(第203・204図 第53表)

3号集石はCB28グリッド南縁の栗色～富士黒土層上面にて確認された。この集石は礫16点で構成さ



第203図 繩文時代集石



第204図 縄文時代遺構位置図

れる。当該集石の南側約5mの位置には1号集石が位置し、両集石間には炉跡が多く認められる。当該集石での礫の散布範囲は0.79m×0.72mである。礫は20cm程度の角礫が含まれる。

4号集石(第203・204図 第53表 写真図版73)

4号集石はCA28グリッドの漸移層で確認された。この集石は礫6点で構成される。礫は6点折り重なって確認され、散布範囲は0.25m×0.16mを測る。なお当該集石の上位は9号炉跡が検出されており、同一遺構の可能性も想起されたが、現地調査での所見では別個の遺構とした判断がなされている。当該集石周辺は2～5・8・9号炉跡が位置し、何らかの関係を想起させる。

(2) 土坑(第204・206図 第53表)

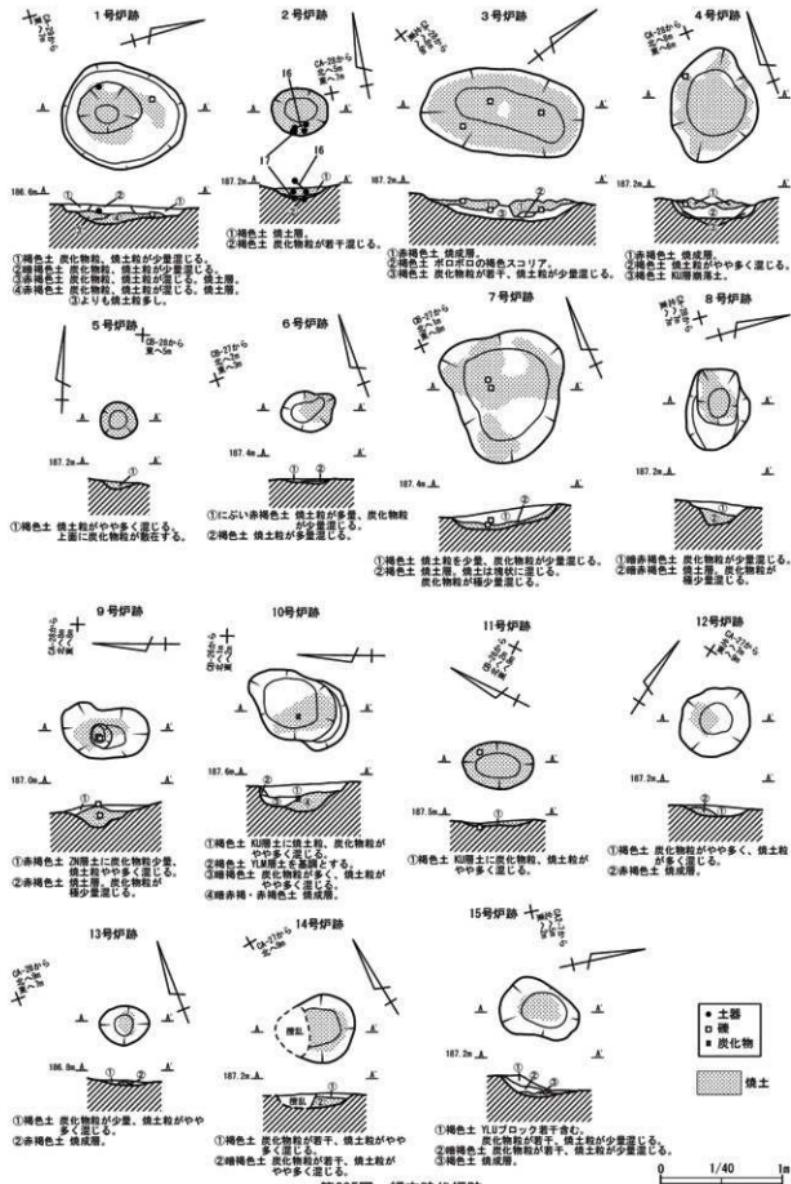
1号土坑はCA28グリッドで、2～5・8・9号炉跡が位置する区域の東側に位置する。漸移層で確認された当該土坑の平面は梢円形を呈し、計測値は長径0.55m、短径0.39m、深さ0.16mを測る。底部は平坦を呈する。

(3) 炉跡(第204・205・207図 第53・54表 写真図版74・75)

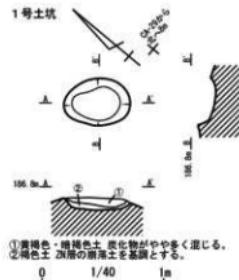
当該遺跡で確認された縄文時代の炉跡は15基を数え、13基確認された富沢内野山IV西遺跡5区と同様、濃密な分布を示す。炉跡はCA26グリッドから東側にほぼ満遍なく分布するが、CA28グリッド内に数基の炉跡が集中する。大半が栗色～富士黒土層上面にて確認出来る。漸移層・休場層で確認した炉跡もある。この場合、覆土が栗色～富士黒土層に由来するものと考えられたため、縄文時代の炉跡として考えている。

平面が円～梢円形を呈するのが、1・2・5・11～13号炉跡である。1号炉跡はCA29グリッドで確認された。現地調査では炉跡東側付近に硬化城が認められている。2号炉跡では土器片16・17が出土している。共に胴部のみの破片資料である。外面の施文は条痕文か。胎土に僅かに纖維が含まれる。焼成・胎土等の特徴から16・17は同一個体と考えられる。所属時期は早期か。

平面が長梢円形を呈しているのが3号炉跡である。長径1.35m、短径0.72mを測る。長径と短径の比



第205図 繩文時代炉跡



第206図 繩文時代土坑



第207図 繩文時代遺構内出土遺物

第53表 繩文時代遺構計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	所位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土器	石器	櫛	炭化物	計	備考
1号集石	SY03	CA-28	KU	2.10	1.95	0.40	5	5	135		145	
2号集石	SY02	CB-26	KU	0.70	0.60	0.16	3	5	29	1	38	
3号集石	SY04	CB-28	KU	0.79	0.72	-			16		16	
4号集石	SY05	CA-28	ZN	0.25	0.16	-			6		6	
1号土坑	SF40	CA-28	ZN	0.55	0.39	0.16						
1号伊跡	FP01	CA-29	KU	1.00	0.84	0.16	1		1		2	
2号伊跡	FP02	CA-28	KU	0.46	0.38	0.08	5				5	
3号伊跡	FP03	CA-28	KU	1.35	0.72	0.24			2		2	
4号伊跡	FP04	CA-28	KU	0.95	0.73	0.16			1		1	
5号伊跡	FP05	CA-28	KU	0.30	0.30	0.08						
6号伊跡	FP07	CB-27	ZN	0.42	0.30	0.05						
7号伊跡	FP08	CB-27	KU	1.12	0.89	0.21	1		1		2	
8号伊跡	FP09	CA-28	KU	0.66	0.51	0.20						
9号伊跡	FP10	CA-28	KU	0.72	0.46	0.18			2		2	
10号伊跡	FP11	CB-26	YLM	0.86	0.58	0.24				1	1	
11号伊跡	FP12	CB-26	YLU	0.58	0.39	0.05	1				1	
12号伊跡	FP13	CA-27	YLU	0.64	0.55	0.09						
13号伊跡	FP14	CA-28	YLU	0.41	0.32	0.04						
14号伊跡	FP15	CA-27	YLM	0.55	0.38	0.12						
15号伊跡	FP16	CA-27	YLU	0.66	0.49	0.14						

第54表 繩文時代遺構内出土土器観察表

遺構名	埠図 番号	写真 図版 番号	分類 鉢 瓶	色調(Hue)	文様調整等	織 縫	胎土
2号集石	15	75	Ⅳ 4	5YR6/6	口唇部にへら状工具による削目。内外面に条痕。ナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
2号伊跡	16	75	Ⅲ 5	10YR7/4	条痕。内外面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
2号伊跡	17	75	Ⅲ 5	10YR7/4	条痕。内外面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、輝石

率は2:1に近く、当該遺跡で確認された炉跡の比率が1.5~1:1程度であるのと大きく異なる。この炉跡はC A28グリッドの炉跡集中域の中心を占め、炉跡の長軸は北東で、等高線とは平行しない。長軸延長線上にあるのが4号炉跡である。

平面が不定形を呈するのが4・6~10・15号炉跡である。10号炉跡では炭化物が出土しており、放射性炭素年代測定を実施した結果、 $9,320 \pm 30$ yrBPという数値が出ている。

3 遺構外出土遺物

当該遺跡から出土した縄文時代のものと考えられる土器は880点を数え、石器は764点を数える。この点数は現地での取り上げた遺物の点数であり、特に土器については長泉事務所における接合作業を経た結果、点数は著しく変化している。出土した縄文土器の主体は早期代の資料である。

（1）土器

第Ⅰ群：縄文時代早期（第208～210・214・215図 第55表 写真図版74・76～78）

縄文時代早期の押型文及び燃糸文を施した土器群を第Ⅰ群とした。静岡県東部地域で特徴的な軽しょくで器面の色調に淡い紫色を含む早期代土器も含まれている。出土位置はC B27グリッド杭を中心とした付近及びC A28・29グリッド付近に濃い分布を持つ。

1類（燃糸文）

18～31を1類とした。18～20・22～25は口縁部のみの破片資料である。18は軽く外反させ、口唇部を丸く仕上げている。口唇部直下に横位の燃糸を押圧。その直下に縦位の燃糸文を施す。胎土中に纖維が見られないのが特徴である。若宮型土器か。19・20は平坦に仕上げた口唇部をもつ。前者は燃糸文が方向を違えて施し、後者は内外面に燃糸文を施している。18と異なり両者は纖維を胎土中に含み、やや軽い印象を受ける。22も19同様方向の異なる燃糸文が施されている。胎土中に纖維を含むが、軽ishoukではない。23は平坦に仕上げられた口唇部で、指頭でつまむように押されたため、外面口唇部直下に指頭痕が残る。外面には斜位の燃糸文が施されている。24は丸く仕上げられた口唇部を持ち、内外面に指頭痕が残る。器厚は1.1cmとやや厚手である。23・24共に胎土中に纖維を含むが、23の方が多い。25は器厚を薄く仕上げた口縁部のみの破片資料である。方向の異なる燃糸文が施され、格子状となる。21・26～31は胴部のみの破片資料である。21の胎土はやや白い色調で、細かい気泡が見られ、軽ishoukである。外面に縦位の燃糸文が施されている。21よりも細い燃糸文が施されているのが、26～31である。26～29は斜位の燃糸文を施す。30・31は方向の異なる燃糸文が施され、30は網目状に見える。いずれの資料にも纖維が胎土中に含まれる。

2類（押型文）

32～61を2類とした。楕円文や格子目文を施した資料を集成している。32～56・61は楕円文のみ施す土器群である。細久保式か。32～46は口縁部が残存する資料である。口唇部を丸く仕上げる資料が多く、口縁部は微かに外反、もしくは直線的に仕上げている。多くの資料の胎土中に纖維を含み、36・38・41は金雲母を含む。32・33・42・43は縦位密接に施文する。33は外反した口縁部で、穿孔が認められる。外面に楕円文を施した後に、口唇部をナデあげ平坦に仕上げている。口唇部のナデの後に内面に楕円文を施している。34～38・41は横位密接に、44は多方向に施文する。45は楕円文の施文方向を縦位と横位と交互に施している。46は口縁部から胴部中位まで残存する。胴部から口縁部まで直線的に立ち上げ、口唇部はやや平坦に仕上げている。外面には楕円文が横位に密接施文されている。口唇部直下に見える筋状の痕跡は、楕円文を施した工具の上端部の圧痕である。胎土には纖維がほとんど見られない。47～56は胴部のみの破片資料である。横位に楕円文が施され、纖維は含まれるが量は少ない。61は底部のみの破片資料である。乳頭状を呈する。

57・58は山形文が施された胴部のみの破片資料である。胎土中に纖維が少量含まれる。後者は綾杉状の山形文を施した後に楕円文を横位に施している。

59・60は格子目文を施した胴部下半部付近の破片資料である。59は胎土中に纖維はほとんど見られな

い。下端付近には格子目文を施した工具の上端部圧痕が見える。60は繊維を少量含み、細かい気泡が見られ軽い印象を受ける。

3類(押型文)

62~64を3類とした。梢円文を施している点では2類と共通するが、内面に所謂柵状文と呼称される直線的な押型文が施されている点から黄島式と推定され、2類から分離した。この3点の資料は同一個体と考えられる。胎土に繊維を含み、やや軽い印象を受ける。胸部から直線的に立ち上げていたものと考えられ、口唇部には僅かに平坦面を仕上げている。外面は口唇部直下より縦位の梢円文、内面は口唇部直下から柵状文を施している。

第II群：縄文時代早期(第211・215図 第55表 写真図版76)

縄文時代早期代の沈線文系土器を集め、第II群に分類した。これらは田戸下層II式と推定される。出土位置はほぼCA28・29グリッド付近に限定される。第II群とした65~68のうち65・66は口縁部のみの破片資料である。両者とも口唇部付近を軽く外反させ、強くナデあげて尖らせている。口唇部直下より半截竹管状の工具による連続刺突文、先端の細かい棒状工具による数条の沈線文を交互に施す。67は胸部のみの破片資料である。沈線で蛇行するモチーフを描き、その内部を短沈線文で充填する。共に先端が割れた細い棒状の工具によるものか。田戸下層II式でいう沈線文間に刺突文を充填する手法に近似する。68は口縁部から胸部中位まで残存した資料である。直線的に立ち上げ、口唇部は丸く仕上げている。口唇部直下に先端の細かい棒状の工具で沈線文を2条、その下位には半截竹管状工具を用いて3条の幅の広い沈線文を横位に施している。またさらに下位に半截竹管状の工具で縦位に幅広の沈線文を施した後に、先端が割れた棒状工具で斜位に沈線文を施している。

第III群：縄文時代早期後半(第212・213・216・217・223図 第55表 写真図版74・78~80)

縄文時代早期後半代の条痕文系の土器群を集めた。判明した型式により1~6類に分類した。

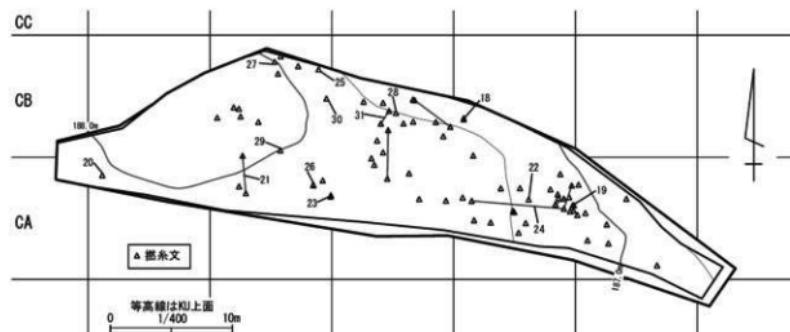
1類(子母口式)

69~71を1類とした。子母口式と考えられる資料である。出土位置はCA27グリッド付近に多い。

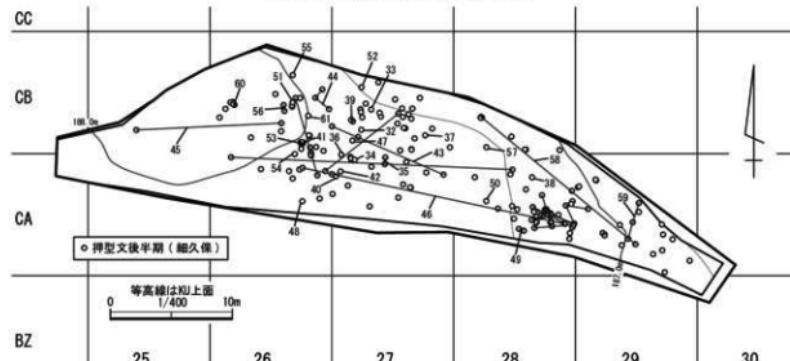
69は口縁部から胸部中位まで残存した資料である。胸部は微かに内湾させ、口縁部は軽く外反させる。口唇部付近は指頭でつまんで整形し、絡条体圧痕文を施している。口唇部直下に粘土紐を貼り付けて隆起となし、微かに軸が見える絡条体圧痕文を施す。また口唇部から約8cmの位置に半截竹管状の工具で平行沈線文を施す。胎土に繊維を含む。70・71は胸部のみの破片資料である。前者は69と同様に絡条体圧痕文を低平な隆起上に施す。後者は横位に半截竹管状の工具で平行沈線文を施し、その上位に短少の粘土紐を貼り付けて棒状の浮文となし、絡条体圧痕文を施す。浮文の両脇には斜位の平行沈線文を施している。

2類(子母口式並行)

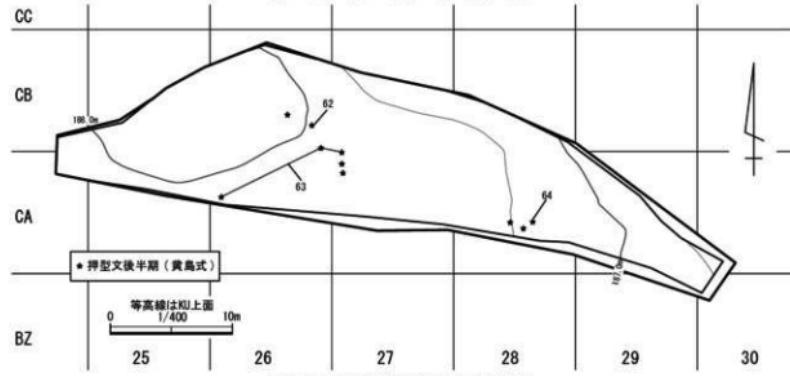
72・73は2類とした。両者は胎土や施文から同一個体と考えられ、口縁部から胸部上位まで残存した資料である。軽く外反させ、口唇部を丸く仕上げ、先端の鋭いヘラ状の工具で刻目を施す。内面は条痕が見られる。外面は条痕調整の後に短い沈線文が、口縁部から胸部にかけて等間隔に施される。半截竹管状の工具を使用か。



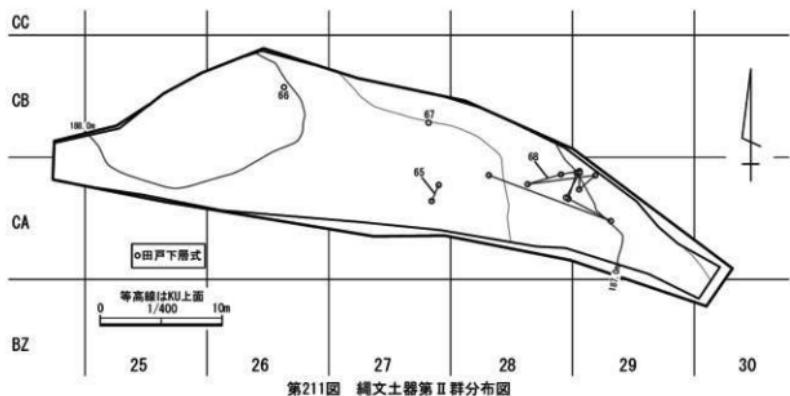
第208図 縄文土器第I群1類分布図



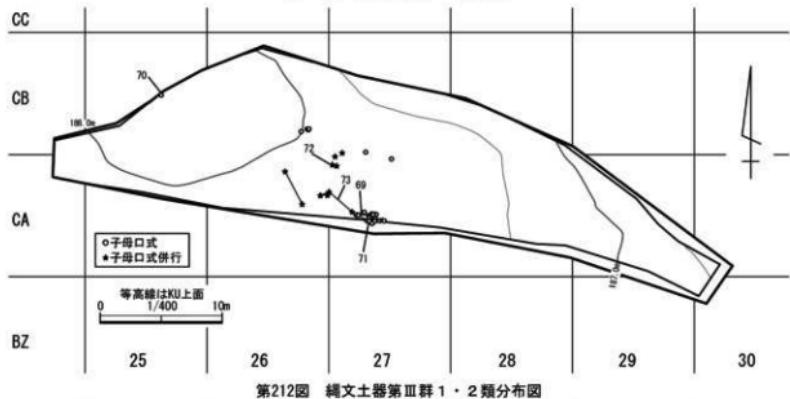
第209図 縄文土器第I群2類分布図



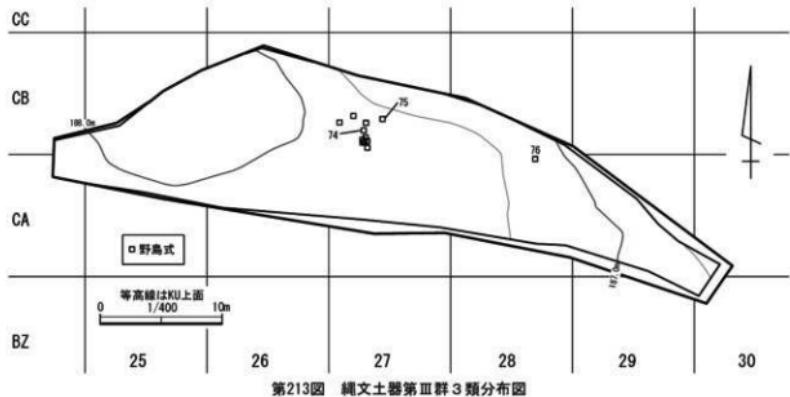
第210図 縄文土器第I群3類分布図



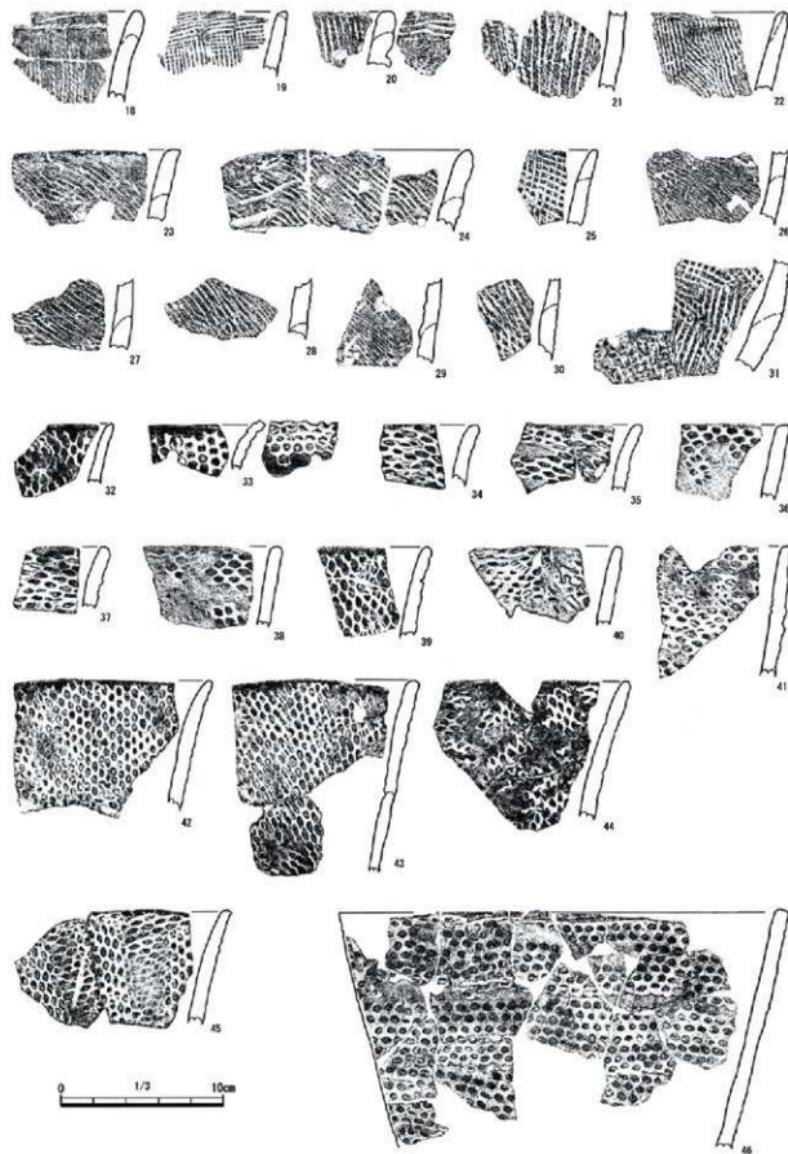
第211図 繩文土器第II群分布図



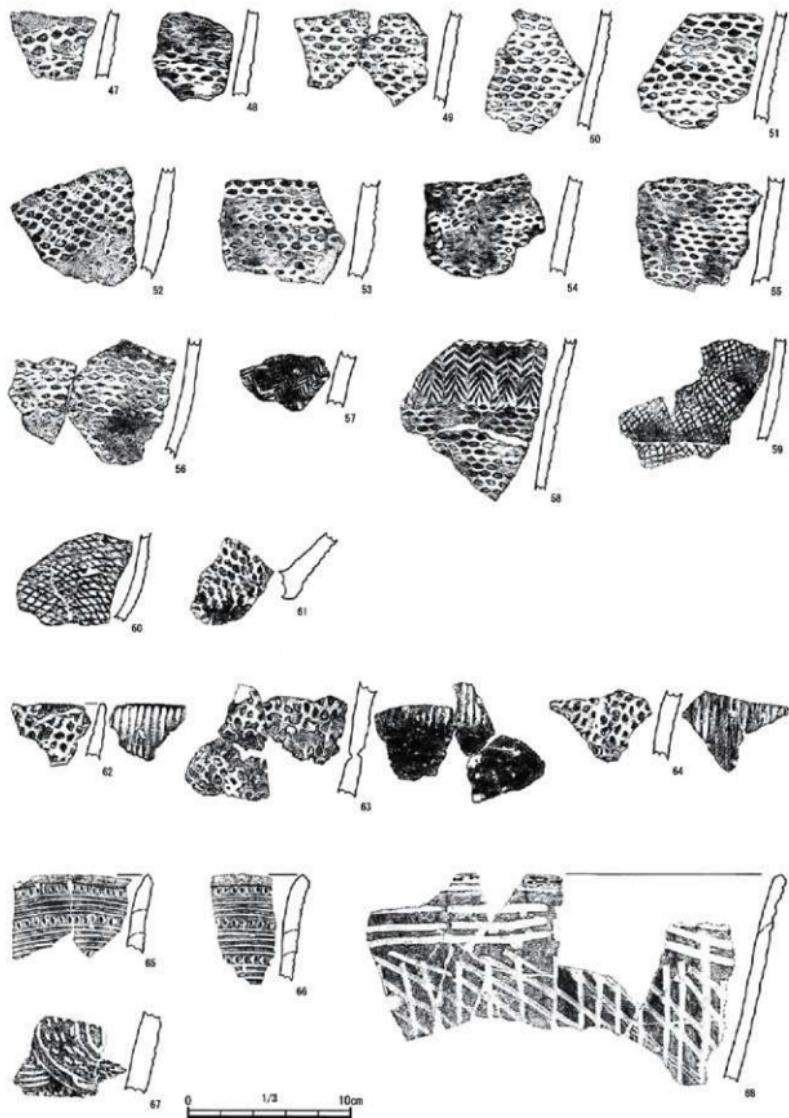
第212図 繩文土器第III群1・2類分布図



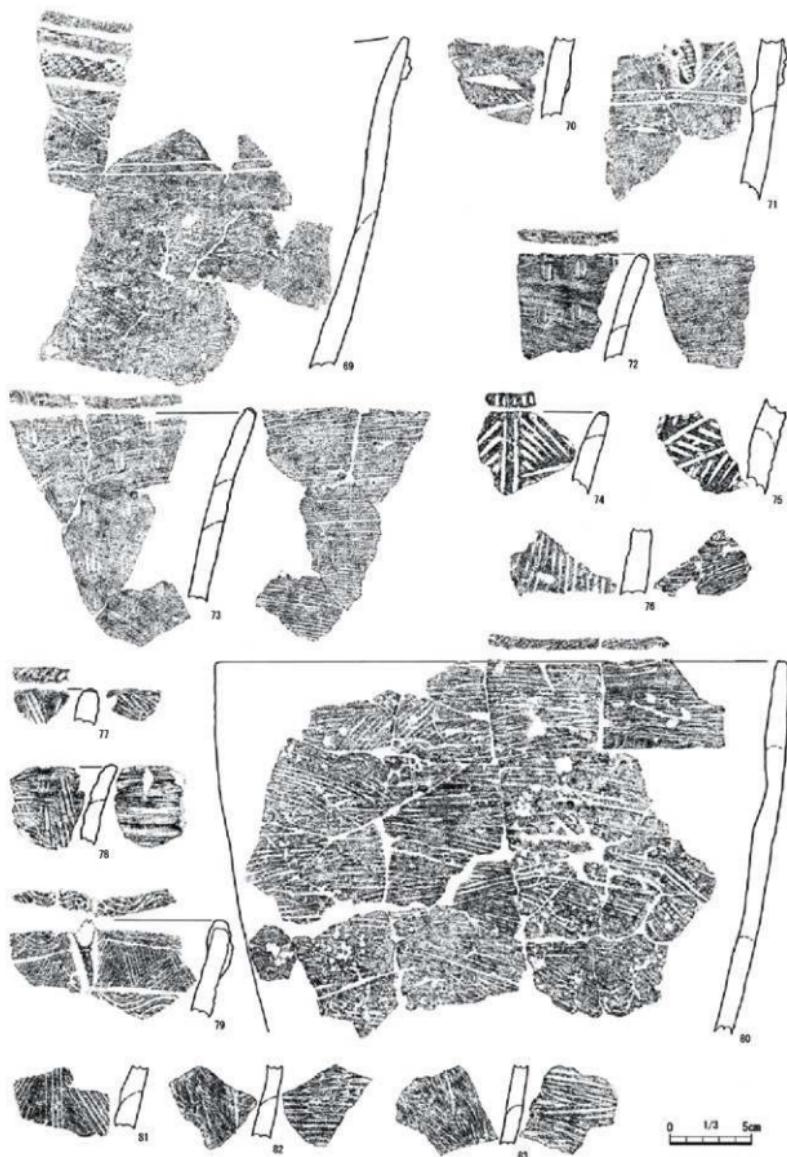
第213図 繩文土器第III群3類分布図



第214図 縄文土器第I群1・2類



第215図 桶文土器第I群2・3類・第II群



第216図 縄文土器第III群 1～4類

3類(野島式)

74～76は3類とした。いずれの胎土にも纖維が含まれる。出土位置はC B27グリッドに偏る。74は口縁部のみの破片資料である。口唇部は丸く仕上げて、刻目文を施す。外面は縦位の沈線文を2本施し、両脇は斜位の沈線文を施す。75・76は胴部のみの破片資料である。前者は沈線文の間際に斜位の沈線文を充填している。後者は条痕か。

4類(その他の条痕文土器)

77～83は4類とした。型式が判然としない条痕文土器を集成している。77～80は口縁部が残存した資料である。77は口唇部付近の破片資料である。丸く仕上げられた口唇部及び器面内外面に条痕文が施されている。78・79は口縁部のみの破片資料である。前者は軽く外反させた口縁部で、内外面に条痕文が施されている。後者は内面から口唇部、外面にかけて粘土紐を貼り付けた後、口唇部に沿って1本、そして口唇部から約3.5cmの位置に1本の横位の沈線文を施す。口唇部及び、貼付文左側の口唇部直下に施された沈線文の間際に波状の沈線文を施す。右側は口唇部直下と沈線文の間際に刺突文を施している。2本の横位の沈線文で区画された部分には複合鋸歯文状の沈線文を充填している。また2本目の沈線文の下位には波状の沈線文を施している。80は口縁部から胴部中位まで残存した資料である。胴部から口縁部まではほぼ直線的に立ち上げている。口唇部は平坦に仕上げられ、不明瞭であるが縄文らしき痕跡が残る。内外面に条痕が見られる。81～83は胴部のみの破片資料である。条痕が残る。

5類(東海系の条痕文土器)

84は5類とした。東海系の条痕文土器か。胎土に纖維を含み、焼成も堅緻な方か。穿孔が認められる。

6類(その他)

85は6類とした。底部のみの破片資料である。尖底で破片上端部際に微かに沈線文らしき痕跡が残る。

第IV群：縄文時代早期代(第218・223図 第55表 写真図版79)

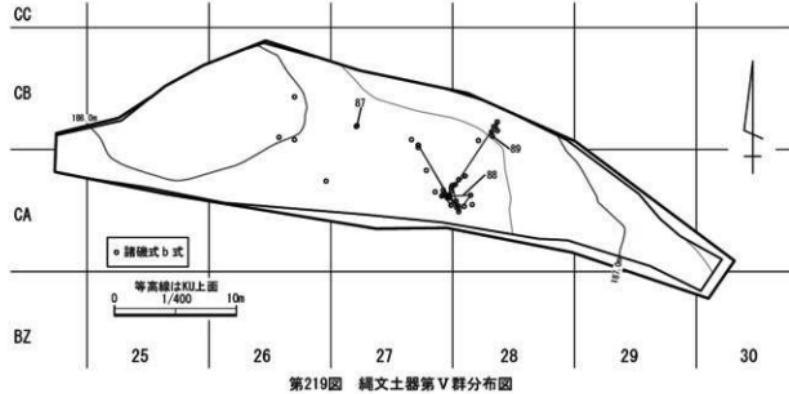
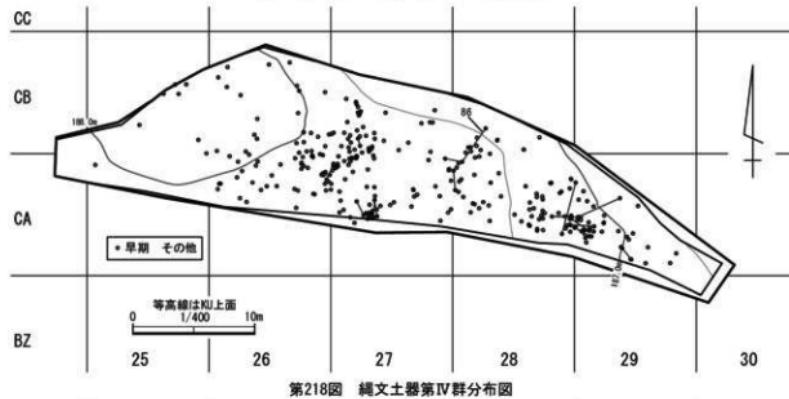
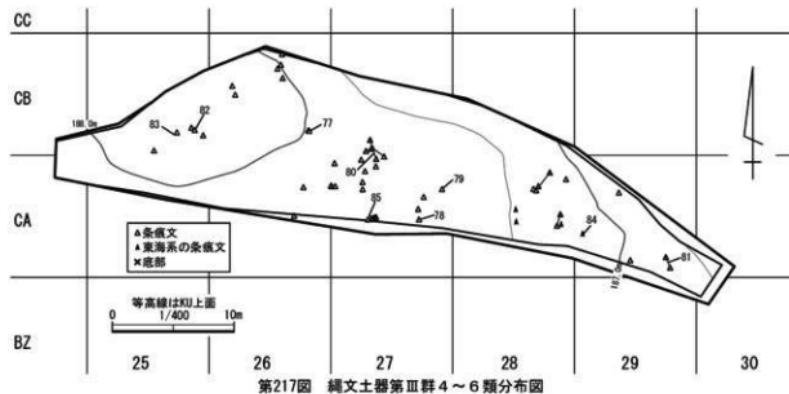
縄文時代早期代の型式名が判然としない縄文・撚糸文系の土器群を集成した。細片資料が多い。86は胴部のみの破片資料で、胎土に纖維を含む。

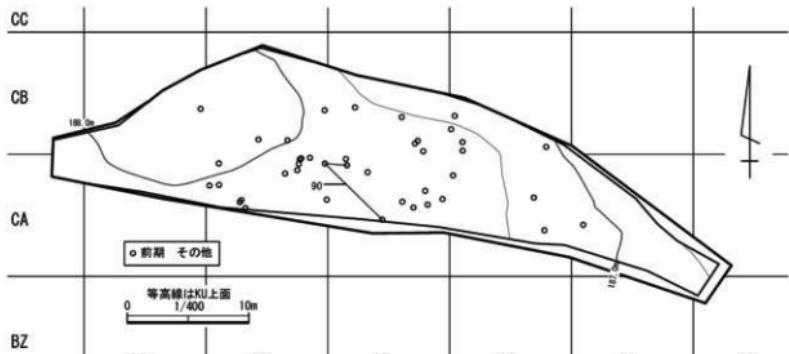
第V群：縄文時代前期後半(第219・223図 第55表 写真図版79)

縄文時代前期後半の土器群を第V群とした。諸磯b式と考えられる。出土位置はCA27・28グリッド付近に多い。87は胴部のみの破片資料である。縄文を施した後に半截竹管状の工具で平行沈線文を施す。88は口縁部から胴部中位まで残存した資料である。微かに膨らむ胴部から外反させ、口縁部は内側に折り曲げ、受口状となる。口唇部は丸く仕上げた後、面取りされている。口縁部には半截竹管状の工具で平行沈線文を施す。胴部は縄文を施した後に、平行沈線文を横位に施す。89は胴部下位から底部まで残存した資料である。底部は平坦で器厚を薄く仕上げ、胴部は直線的に立ち上げている。外面は縄文を施した後に、平行沈線文を施す。88と同一個体か。

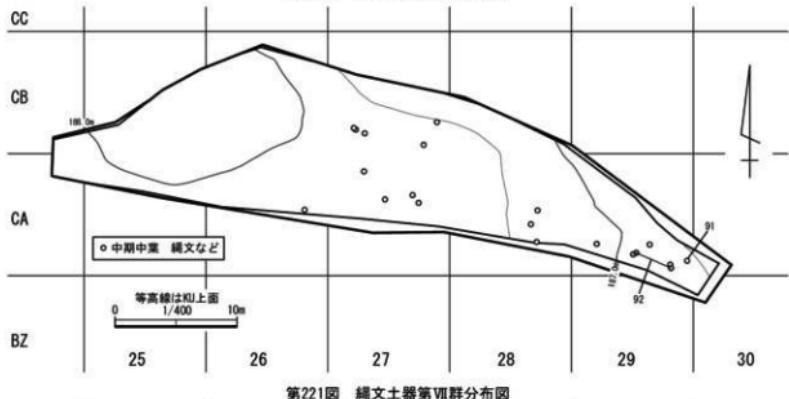
第VI群：縄文時代前期代(第220・223図 第55表 写真図版79)

縄文時代前期代で型式名が判然としない土器群を集成した。細片資料が多い。90は胴部のみの破片資料である。縄文が施されている。器厚は比較的の薄手で胎土に金雲母を含む。

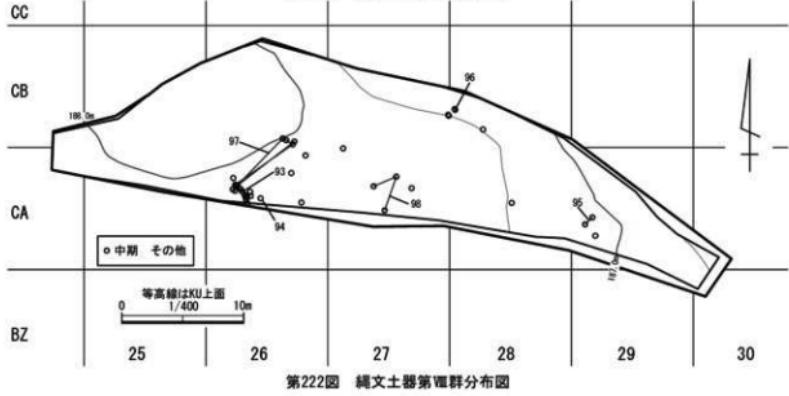




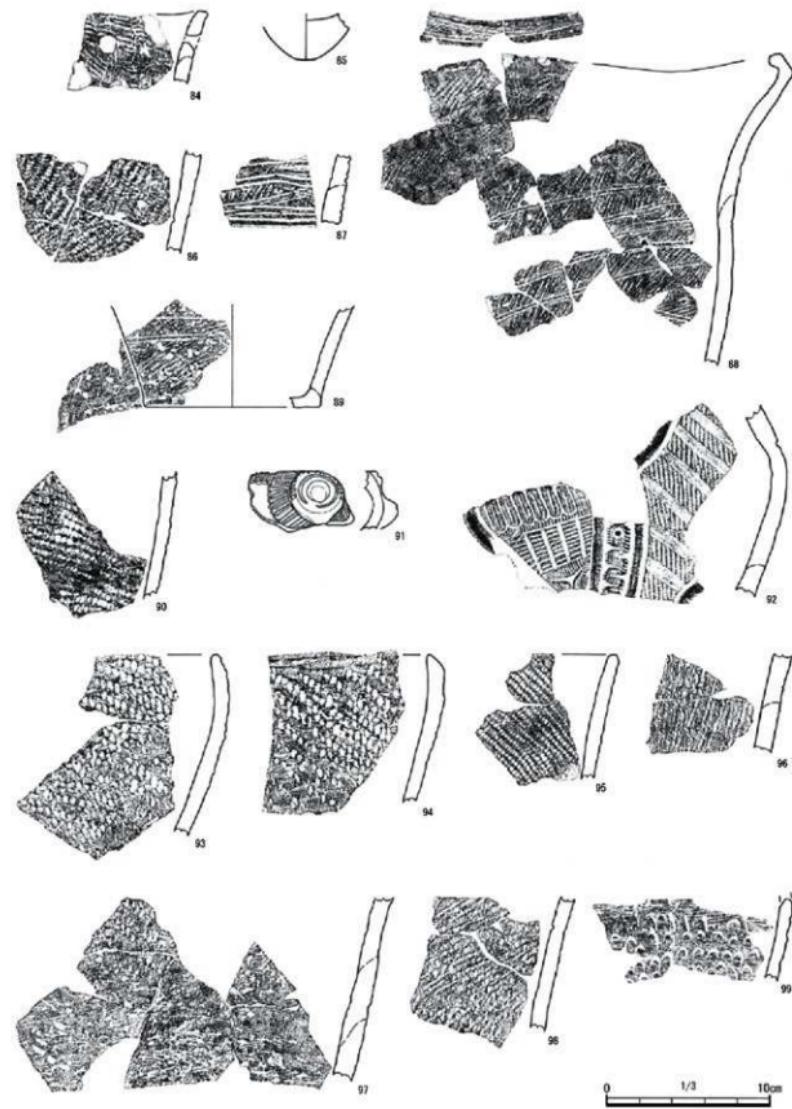
第220図 縄文土器第VI群分布図



第221図 縄文土器第VII群分布図



第222図 縄文土器第VIII群分布図



第223図 繩文土器第III群5・6類～第IX群

第VII群：縄文時代中期中葉(第221・223図 第55表 写真図版80)

縄文時代中期中葉と思しき資料を集成した。91・92は藤内式か。91は胴部のみの破片資料である。円形のモチーフがほぼ中央部に認められ、沈線文等が施されている。92は破片中央部に縦位に刻目を施して蛇行状に仕上げた隆帯及び両脇の平行沈線文により左右の区画に分けられる。右側の区画は地文を縄文とし、その上に斜位に指頭で磨消沈線を等間隔に施す。左側の区画には三叉文やキャタピラ文等が充填されている。

第VIII群：縄文時代中期代(第222・223図 第55表 写真図版80)

縄文時代中期代で型式名の判然としない縄文を施した土器群を集成した。このうち93～95は口縁部が残存する資料である。93は内湾気味に立ち上げた資料で、口唇部は丸く仕上げる。94も内湾気味に立ち上げている。口唇部付近の器厚がやや肥厚気味で尖らせている。最終調整の段階で、工具等で削り取りしたものか。93・94は胎土が類似する。95は直線的に立ち上げた口縁部である。96～98は胴部のみの破片資料である。

第IX群：時期・型式不明(第223図 第55表 写真図版80)

時期・型式名が判然としない縄文土器を第IX群とした。99は胴部のみの破片資料である。外面は地文を燃系とし、先端を尖らせるように加工した半截竹管状の工具で馬蹄状の刺突文を施す。最後に棒状工具で縦位の短い沈線文を馬蹄状刺突文より上位の位置で、等間隔で施す。

第55表 縄文時代造構外出土器観察表①

排図 番号	写真 図版 番号	分類 群・類	グリッド	色調(Hue)	文様調査等	縦 横	胎土
18	76	1 1	CB-28	7.5YR6/4	口縁部。燃系文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、赤色粒子、石英
19	76	1 1	CA-28	7.5YR6/4	口縁部。異方向の燃系文。内面にナデ。轆ような胎土。	有	白色粒子、石英、燧片
20	76	1 1	CA-25	SYR4/3	口縁部。内外面に燃系文。轆ような胎土。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
21	76	1 1	CB-26	7.5YR6/6	燃系文。轆ような胎土。	無	白色粒子、黒色粒子
22	76	1 1	CA-28	7.5YR6/4	口縁部。異方向の燃系文。	有	白色粒子、黒色粒子、輝石
23	76	1 1	CA-26	7.5YR6/6	口縁部。燃系文。指頭痕、内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
24	76	1 1	CA-28	7.5YR6/4	口縁部。燃系文。内外面に指頭痕、ナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
25	76	1 1	CB-26	7.5YR6/6	口縁部。捨子状の燃系文。内面に擦痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英
26	76	1 1	CA-26	7.5YR7/6	燃角丸。内外面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
27	76	1 1	CB-26	7.5YR6/6	燃系文。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
28	76	1 1	CB-27	SYR6/6	燃系文。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
29	76	1 1	CB-26	7.5YR6/6	燃系文。穿孔。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石
30	76	1 1	CB-26	7.5YR6/6	網目状の燃系文。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
31	76	1 1	CB-27	7.5YR6/6	異方向の燃系文。指頭痕、内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
32	77	1 2	CB-27	10YR6/4	口縁部。横円文。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
33	77	1 2	CB-27	10YR6/4	口縁部。内外面に横円文。穿孔。ナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
34	77	1 2	CA-27	10YR2/1	口縁部。横円文。	有	白色粒子、黒色粒子
35	77	1 2	CA-27	2.5YR3/1	口縁部。横円文。	有	白色粒子
36	77	1 2	CA-27	SYR3/1	口縁部。横円文。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母、輝石
37	77	1 2	CB-27	7.5YR6/6	口縁部。横円文。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
38	77	1 2	CA-28	10YR5/4	口縁部。横円文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、霞母、輝石
39	77	1 2	CB-27	10YR5/3	口縁部。横円文。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
40	77	1 2	CA-27	7.5YR4/4	口縁部。横円文。	無	白色粒子、黒色粒子
41	77	1 2	CB-26	7.5YR2/2	口縁部。横円文。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
42	77	1 2	CA-27	7.5YR6/6	口縁部。横円文。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、白色岩片
43	77	1 2	CA-27	7.5YR6/4	口縁部。横円文。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英
44	77	1 2	CB-26	7.5YR6/6	口縁部。横円文。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
45	77	1 2	CB-25	SYR4/4	口縁部。異方向の横円文。	有	白色粒子、黒色粒子
46	78	1 2	CA-29	SYR4/6	横円文。横位密接。同工具上端部による压痕。ナデ。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、霞母、輝石、白色岩片
47	77	1 2	CB-27	SYR5/4	横位密接。	有	白色粒子、石英、霞母、白色岩片
48	77	1 2	CA-26	10YR5/4	横円文。横位密接。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子
49	77	1 2	CA-28	10YR5/4	横位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
50	77	1 2	CA-28	7.5YR4/3	横円文。横位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
51	77	1 2	CB-26	7.5YR5/4	横円文。横位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
52	77	1 2	CB-27	SYR5/5	横円文。横位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、霞母、輝石
53	77	1 2	CB-26	7.5YR5/4	横円文。横位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、霞母

第55表 繩文時代遺構出土土器観察表(②)

博団 番号	写真 番号	分類 群 類	グリッド	色調(Hue)	文様調整等	縦 横	胎土
54	77	I 1 2	CA-26	SYRS/6	横円文。横位密接。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、白色岩片
55	77	I 2	CB-26	SYR4/4	横円文。模位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
56	77	I 2	CB-26	7.SYRA/6	横円文。模位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
57	78	I 2	CB-28	10YR6/5	山形文。模位密接。	有	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
58	78	I 2	CA-29	7.SYRA/6	山形文。横円文。模位密接。内面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
59	78	I 2	CA-29	SYRA/6	梯子目文。同工具上端部による圧痕。	無	白色粒子、黒色粒子、雲母
60	78	I 2	CD-26	7.SYRA/6	梯子目文。横しうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母
61	77	I 2	CB-26	10YR6/6	梯子目文。横円文。模位密接。	有	白色粒子、石英、雲母
62	78	I 3	CB-26	10YR3/1	口輪形。横円文。模位密接。内面に梯状文。横しうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
63	76	I 3	CA-26	10YR5/4	横円文。内面に梯状文。横しうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、白色岩片
64	76	I 3	CA-28	10YR4/2	横円文。内面に梯状文。横しうな胎土。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、白色岩片
65	76	II	CA-27	7.SYRS/1	口縁部。梯状工具による沈線。連続刻突。内外面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石
66	76	II	CB-26	7.SYRS/6	口縁部。梯状工具による沈線。連続刻突。内外面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石
67	76	II	CB-27	SYRS/6	梯状工具による沈線。刻突。内面に朱痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
68	76	II	CA-29	7.SYRA/6	梯状工具・半截竹管状工具による異方向の沈線。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
69	78	III 1	CA-27	7.SYRS/4	波状口縁。口唇部に幾条体压痕文。隆帶貼り付け後、絶体圧痕文。半截竹管状工具による平行沈線。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
70	78	III 1	CB-25	7.SYRS/4	隆帶貼り付け。絶体圧痕文。内面に難窓。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
71	78	III 1	CA-27	7.SYRS/4	口唇部に幾条体压痕文。半截竹管状工具による平行沈線。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
72	79	III 2	CA-27	SYRS/6	口唇部に刻目。半截竹管状工具による沈線。内外面に朱痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
73	79	III 2	CA-27	SYRS/6	口唇部に刻目。半截竹管状工具による沈線。内外面に朱痕。	有	白色粒子多、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片多
74	78	III 3	CB-27	7.SYRS/6	口唇部に刻目。異方向の沈線。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
75	78	III 3	CB-27	7.SYRS/6	異方向の沈線。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
76	78	III 3	CA-28	SYRS/6	内外面に朱痕。	有	白色粒子、黒色粒子、輝石、白色岩片
77	79	III 4	CB-26	SYRS/6	口唇部、内外面に朱痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
78	79	III 4	CA-27	7.SYRS/6	内外面に朱痕。指痕痕。ナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
79	79	III 4	CA-27	7.SYRS/6	隆帶貼り付け。後側面彫文。波状文。沈線。刻突。内面に難窓。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
80	80	III 4	CA-27	7.SYRS/6	口唇部に純文。外側に朱痕。	有	白色粒子、石英多、輝石多、白色岩片
81	79	III 4	CA-29	SYRS/5	朱痕。内面に指痕痕。ナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
83	79	III 4	CB-25	SYRS/4	内外面に朱痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
84	79	III 5	CA-29	10YR7/3	波状口縁。朱痕。内面に指痕痕。擦痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
85	79	III 6	CA-27	7.SYRS/6	底度。沈線。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
86	79	IV	CA-27	SYRS/6	純文。	有	白色粒子、黑色粒子
87	79	V	CB-27	SYR4/8	半截竹管状工具による平行沈線。純文。内面に擦痕。	有	白色粒子、黑色粒子、石英、輝石、白色岩片
88	79	V	CA-28	SYRA/4	波状口縁。半截竹管状工具による平行沈線。純文。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
89	79	V	CB-28	SYRA/4	底部。平行沈線。純文。	有	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
90	79	V	CA-27	7.SYRS/6	純文。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、岩片
91	80	VI	CA-29	7.SYR2/3	隆帶貼り付け。円形モテープに埋め。沈線。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、雲母、輝石
92	80	VI	CA-29	SYRA/6	隆帶貼り付け。純文。平行沈線。純文。消し沈線。三叉文。キャビティ文。内面に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、白色岩片
93	80	VI	CA-26	SYR3/2	口縁部。純文。	有	白色粒子、黑色粒子、石英、白色岩片多
94	80	VI	CA-26	SYR4/3	口縁部。純文。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、白色岩片
95	80	VI	CA-29	SYR4/1	口縁部。純文。	有	白色粒子多、黑色粒子、石英、雲母、白色岩片
96	80	VI	CB-28	SYRS/4	純文。	有	白色粒子、黑色粒子、石英、輝石、白色岩片
97	80	VI	CA-26	SYRA/6	純文。	有	白色粒子多、黑色粒子多、石英、輝石、白色岩片多
98	80	VI	CA-27	7.SYRS/4	純文。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、白色岩片
99	80	IX	CB-26	SYR4/6	疑似口縁。半截竹管状工具による刻突。略文式。棒状工具による沈線。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、雲母、白色岩片

(2) 石器・石製品

尖頭器類(第224・225図 第57表 写真図版75)

当該遺跡において、繩文時代草創期に位置づけられる石器は、13・14の尖頭器のみである。両者ともガラス質黒色安山岩を石材とする。13は先端部と基部の一部が欠損している。両面加工の尖頭器である。CA27グリッドで出土している。14は先端部を折損している。裏面には素材面を残す。CB26グリッドで出土している。

石鐵・石鎌未製品(第226・229図 第56・58表 写真図版81)

100~128は石鐵及び石鎌の未製品か。全て無茎鐵と考えられる。CA・CB26グリッドにかけて比較的多く出土し、殆どの資料が黒曜石を石材とする。

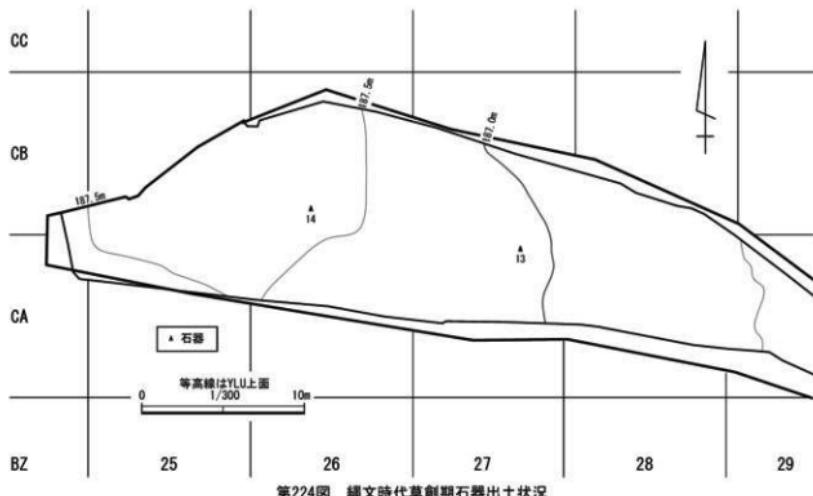
100・101は抉りが「V」字状に入るタイプである。前者はチャート、後者は天城柏崎産黒曜石を石材とする。両者とも平面が三角形に近い。102~112は抉りが弧状を呈するタイプである。石材は神津島恩馳島産黒曜石が多い。平面が二等辺三角形を呈する102~107、正三角形を呈する108~110、鎌身部両側縁を直線的に仕上げていない111・112等がある。108は側縁を鋸歯状に仕上げている。113~118は浅い抉りを入れているタイプである。119~123は平基若しくは円基か。しかし側縁部が一部未調整である点や器厚もやや厚い点から未製品の可能性がある。126~128は未製品と考えられる資料である。側縁部に調整を入れ始めているが、何らかの原因で放棄したものと考えられる。

スクレイパー類(第227・230・231図 第56・58表 写真図版81・82)

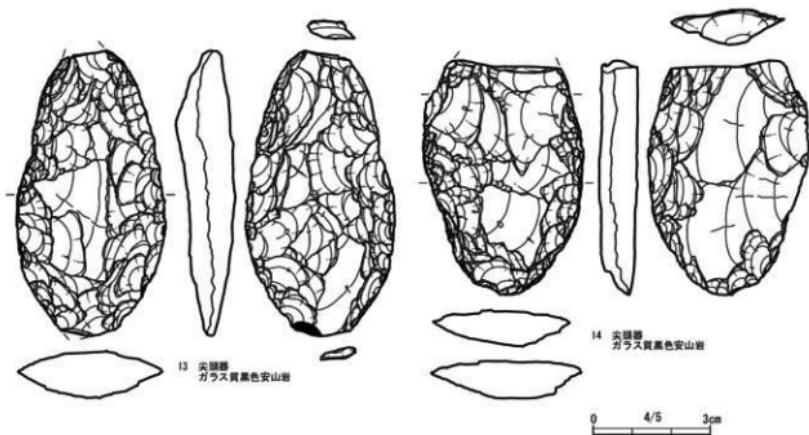
129~136はスクレイパー類に分類した。129・130は搔器か。前者は天城柏崎産黒曜石、後者はガラス質黒色安山岩を石材とする。縁辺部に刃部が仕上げられている。131~136は削器である。131は細粒安

第56表 繩文時代遺構外出土石器組成表

		石 鐵	石 鎌 未 製 品	鎌 形	兩 刃	抉 入 削 器	複 形 石 器	石 核	打 製 石 斧	二 次 加 工 石 片	便 用 石 削 片	銅 片	碎 片	鎌 形	磨 石	磨 石	合 古 ・ 古 鐵 頭	石 錐	石 錐	計	
天城柏崎	AGK7	10		1				8		2		10	2								33
箱根御宿	HNHJ	5	1					1				4									11
神津島恩馳島	KZOB	15	3	1		2	8	3	1	34	7										74
御前里ヶ台	SHWD	4		1		1	6			6	1										19
蓼科冷山	TSTY										1										1
和田小瀬沢	WOKB							1			1										2
和田鷹山	WDTY	1																			3
産度不明		1								10	17	291	74								393
黒曜石計		38	4	1	2	11	16	15	19	347	85										536
玄武岩	Ba											2	5	5	5	2					19
多孔質玄武岩	VBa															1	1	2			4
ガラス質黒色安山岩	GAn	2	1	1		1		2	1	7											15
細粒安山岩	FAn			1		1	1	1	3		1		1								9
輝石安山岩	An(Py)									4	5	47	46	6	17						125
多孔質安山岩	VAn											5		3	1	9					9
デイサイト	Da										4	3	2								9
流紋岩	Rhy							1													1
閃綠岩	Di												1								1
石英閃綠岩	QD												1								1
赤玉石(碧玉)	RJa									1											1
ホルンフェルス	Hor	1	3			4	1	7													16
細粒凝灰岩	FT			1					1												2
頁岩	Sh									2											2
珪質頁岩	SSh									1											1
細粒砂岩	FSS								1												2
粗粒砂岩	CSS								1												1
チャート	Ch	1		1																	2
計		39	5	2	8	1	11	22	3	20	20	373	85	8	58	61	14	24	1	1	756



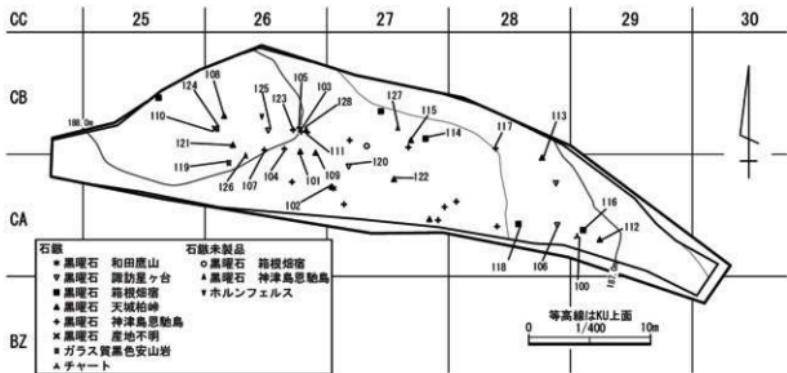
第224図 縄文時代草創期石器出土状況



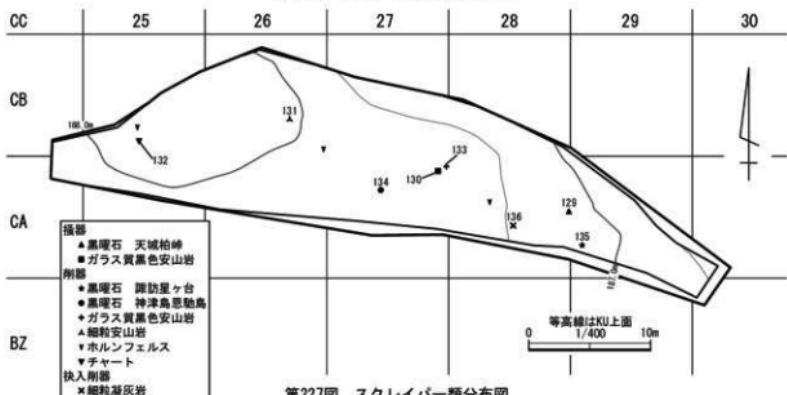
第225図 縄文時代草創期石器

第57表 縄文時代草創期石器組成表

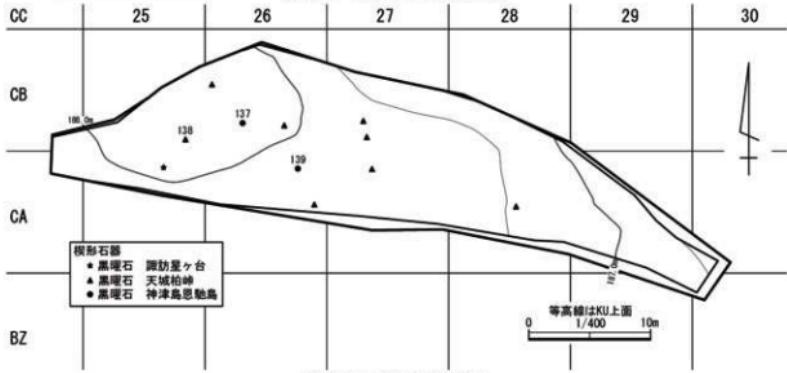
	石器	計
ガラス質黑色安山岩	GAn	2 2
計		2 2



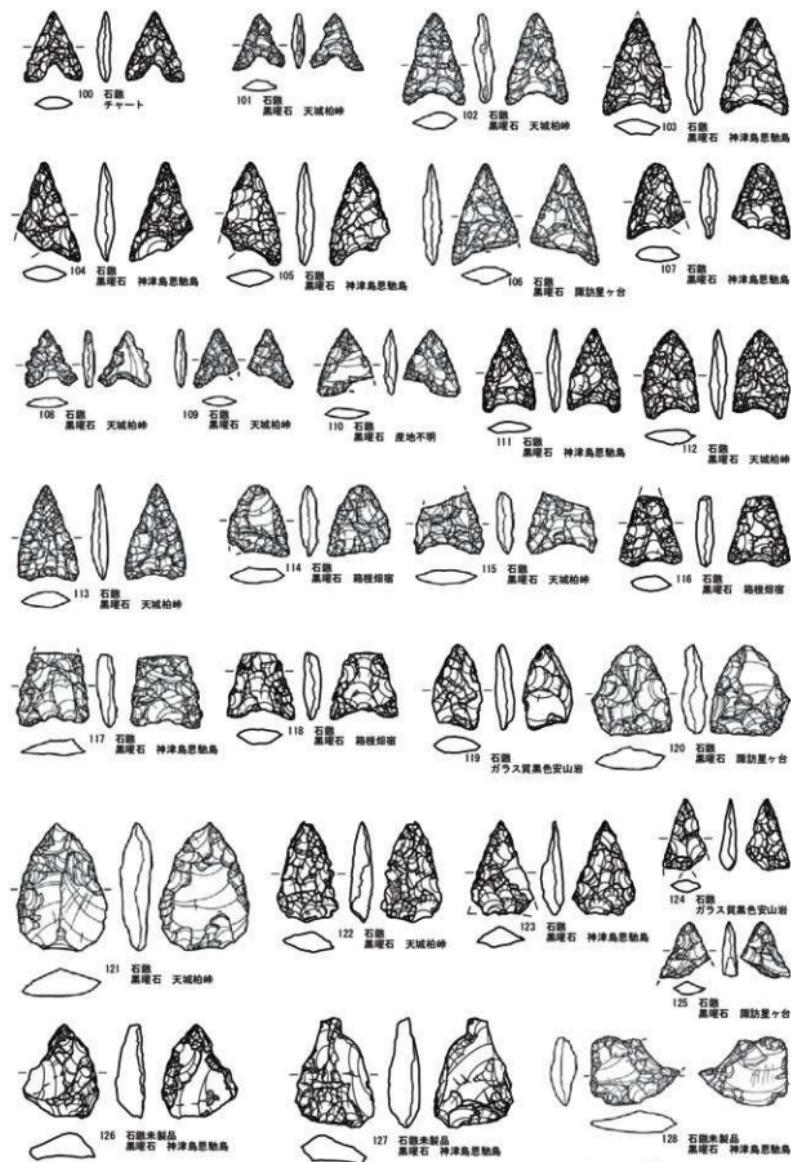
第226図 石器・石器未製品分布図



第227図 スクレイバー類分布図

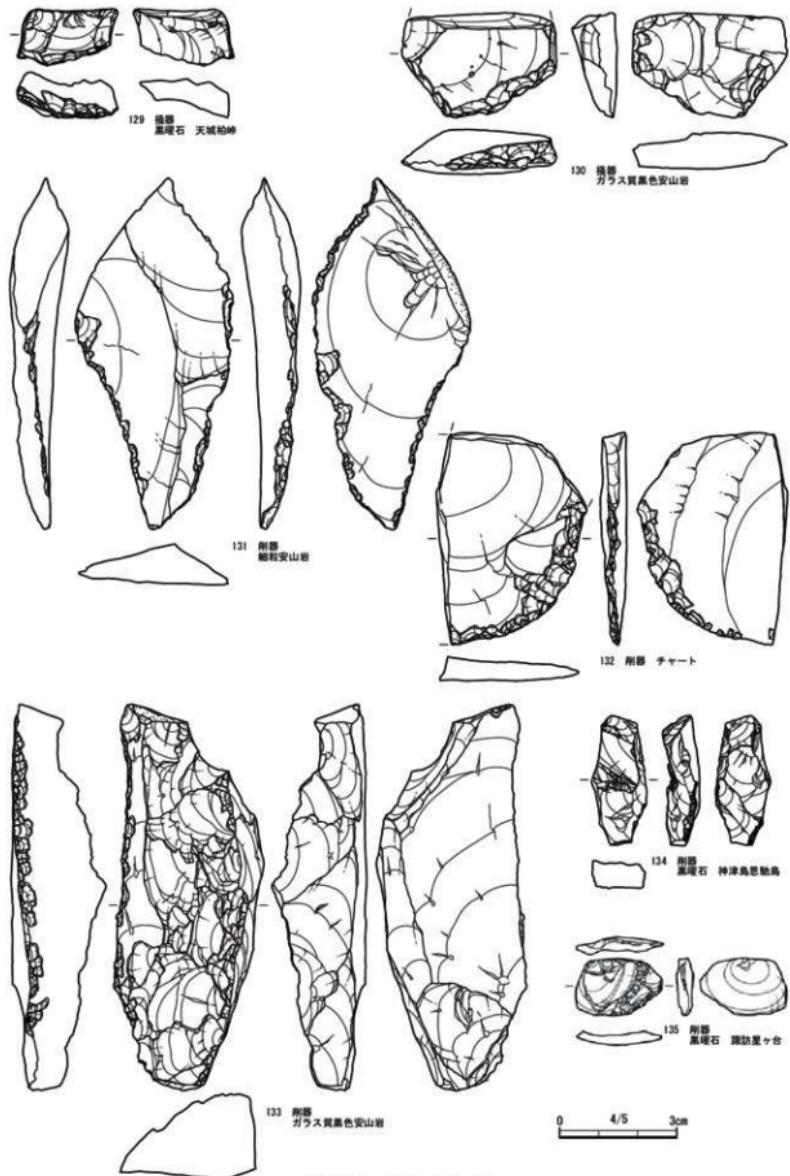


第228図 模形石器分布図

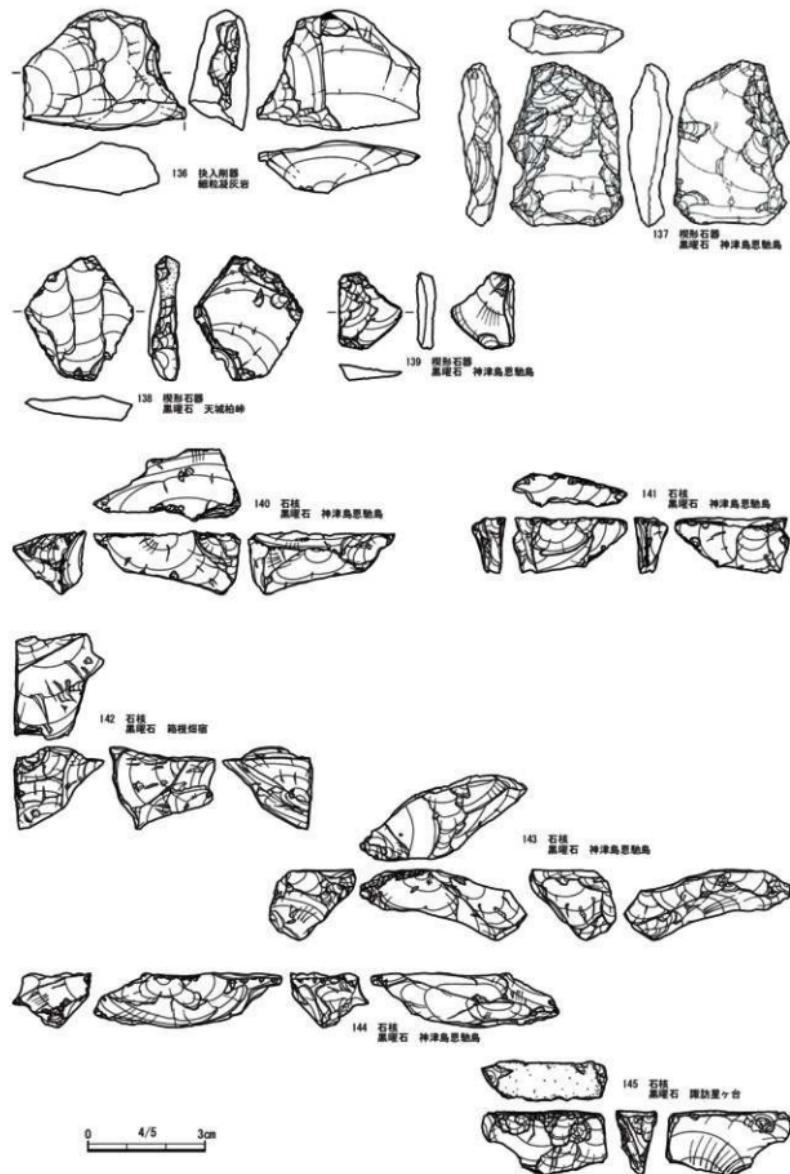


第229図 石巻・石巻未製品

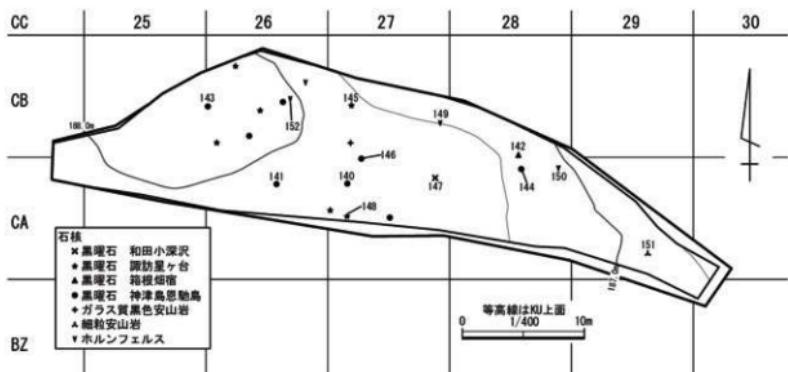
0 4/5 3cm



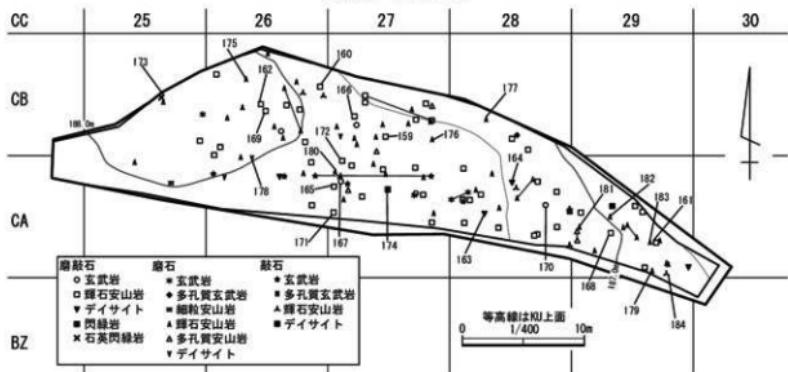
第230図 スクレイバー類



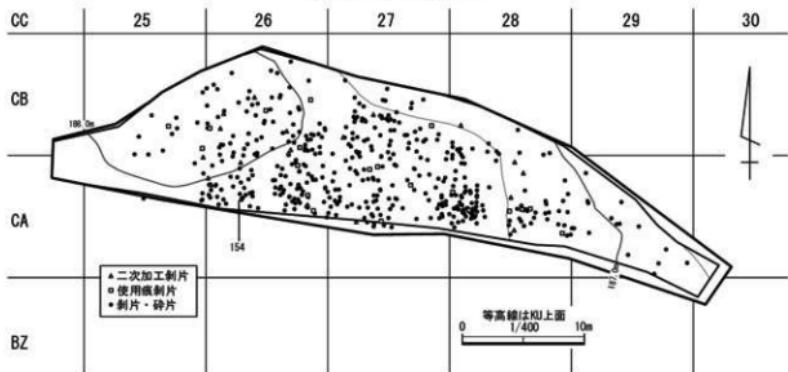
第231図 スクレイバー類・模形石器・石核



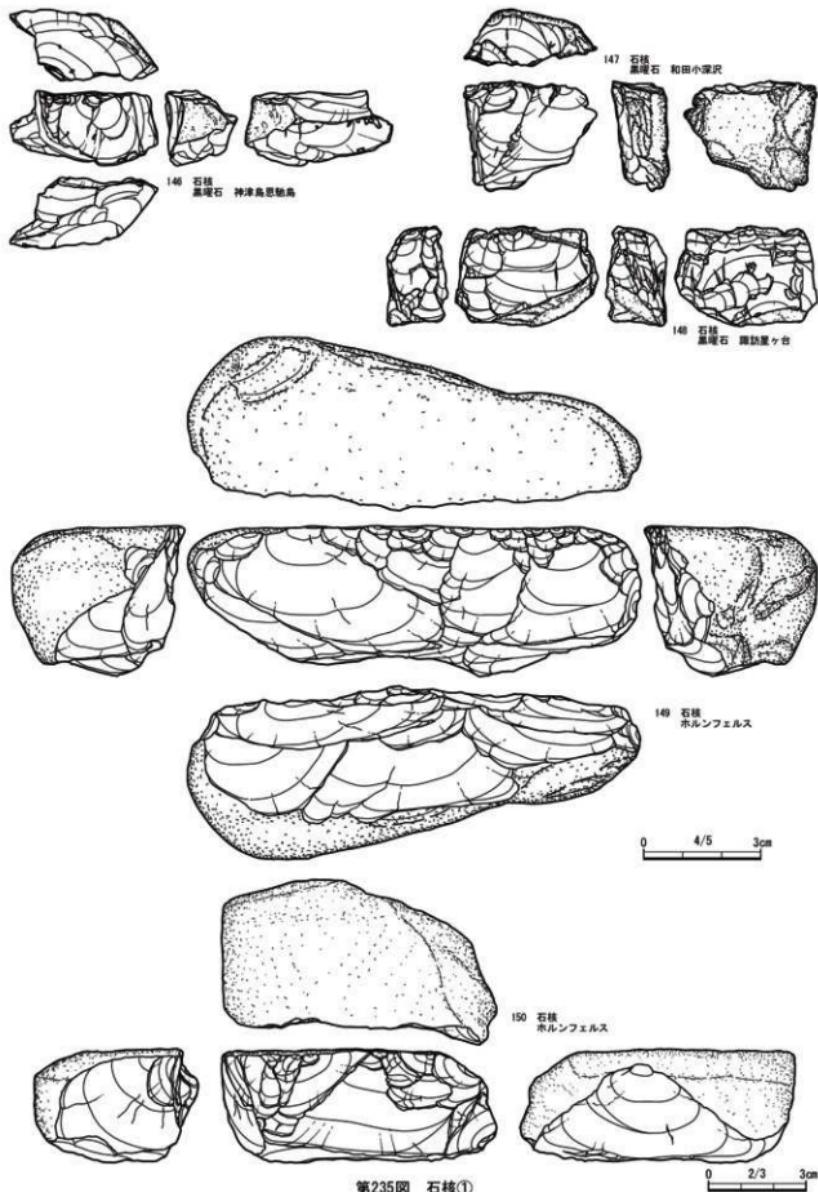
第232図 石核分布図

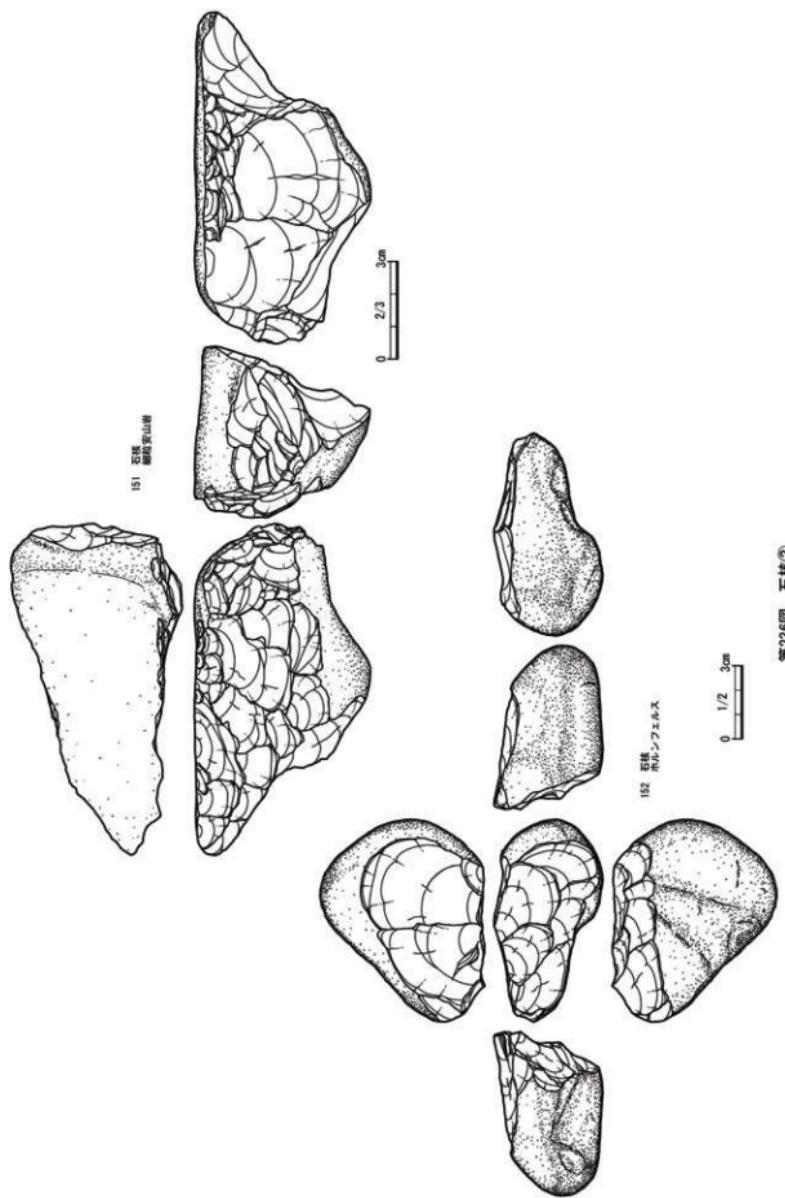


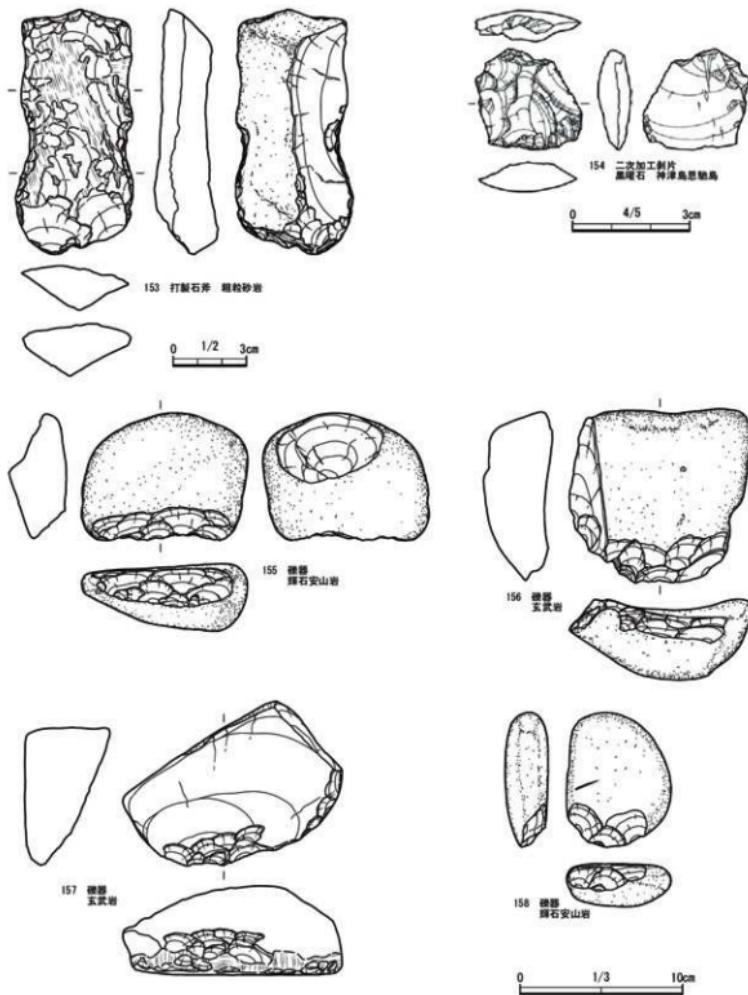
第233図 磨歯石類分布図



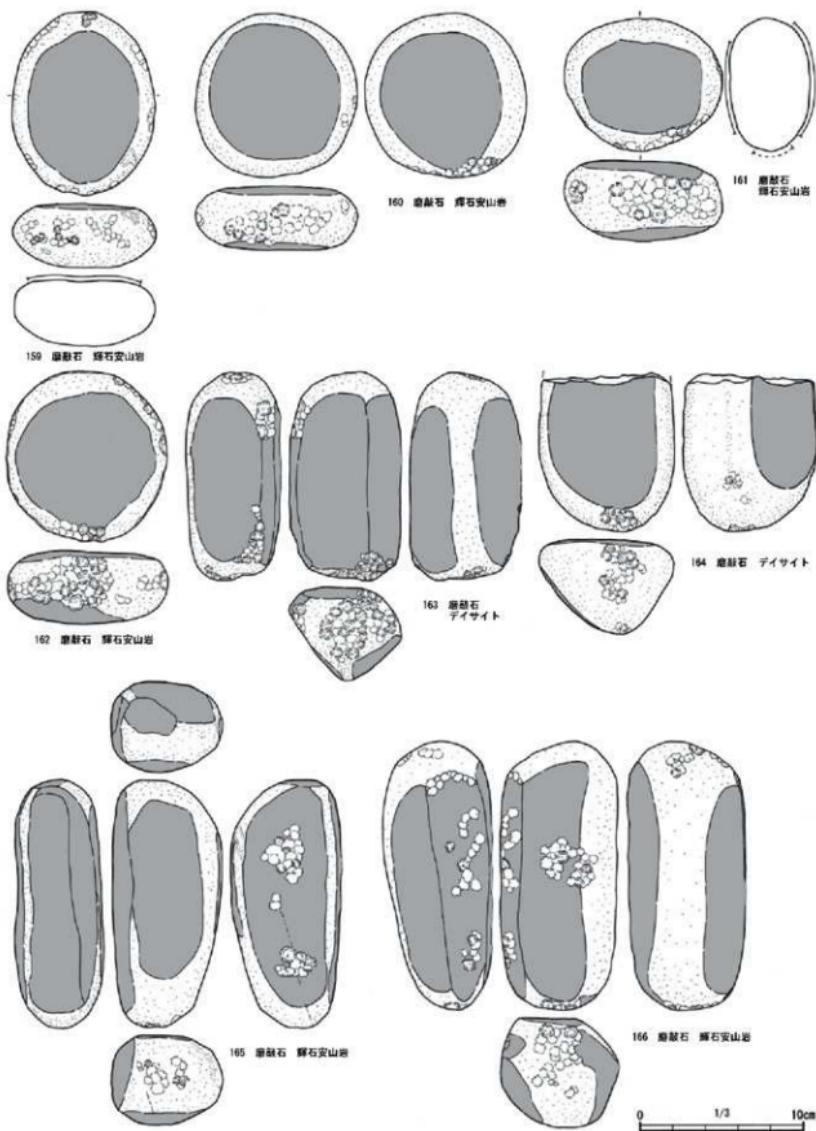
第234図 刻片類分布図



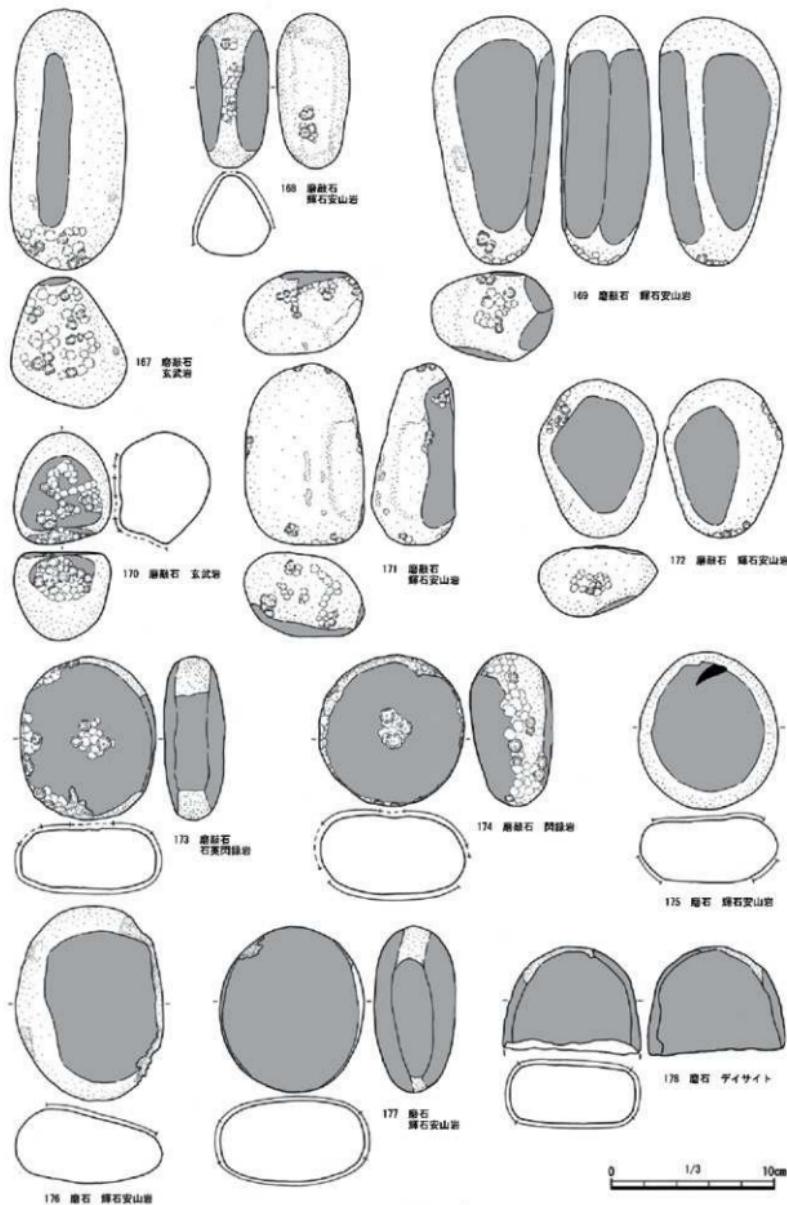




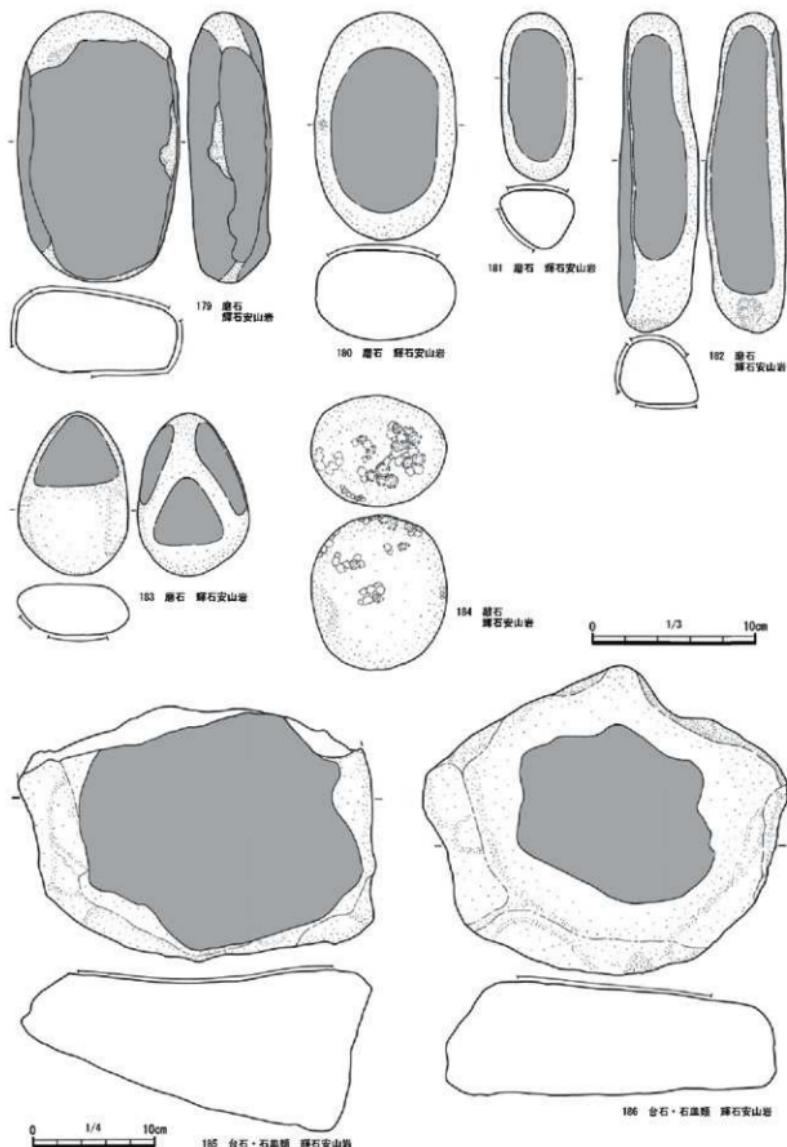
第237図 打製石斧・剥片・穧器



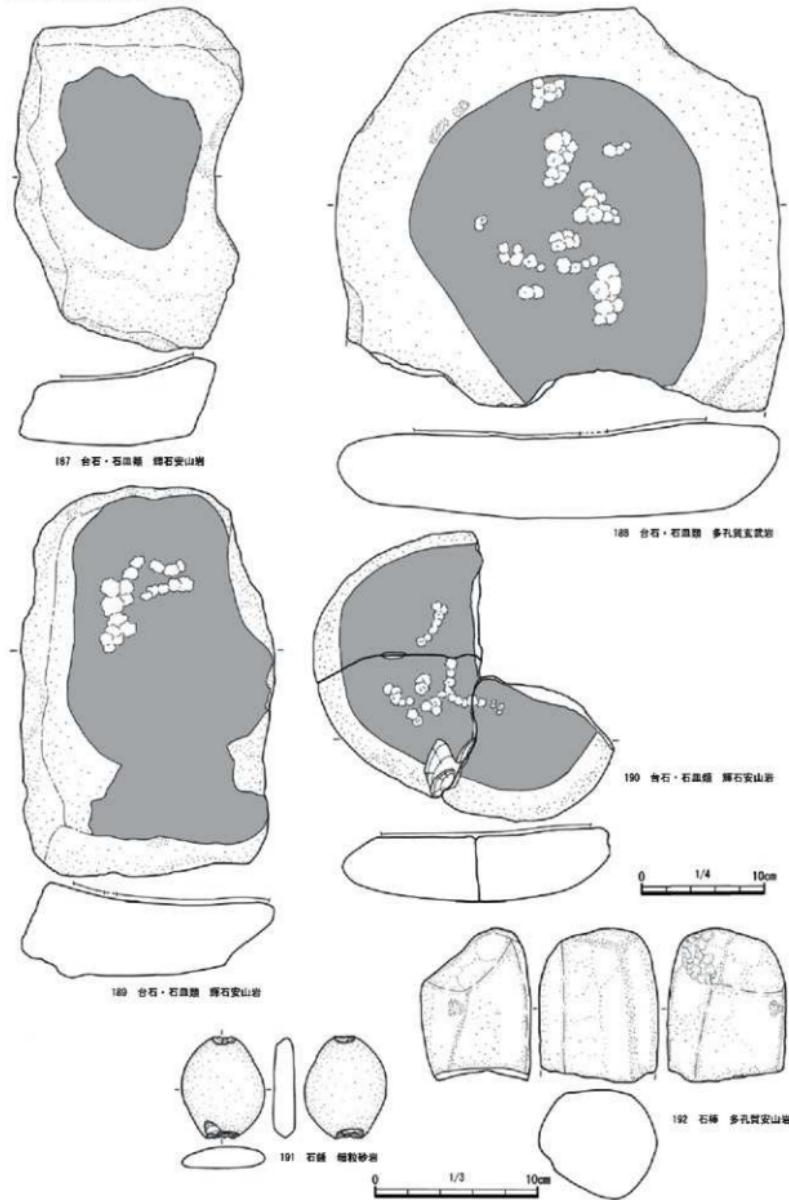
第238図 磨製石類①



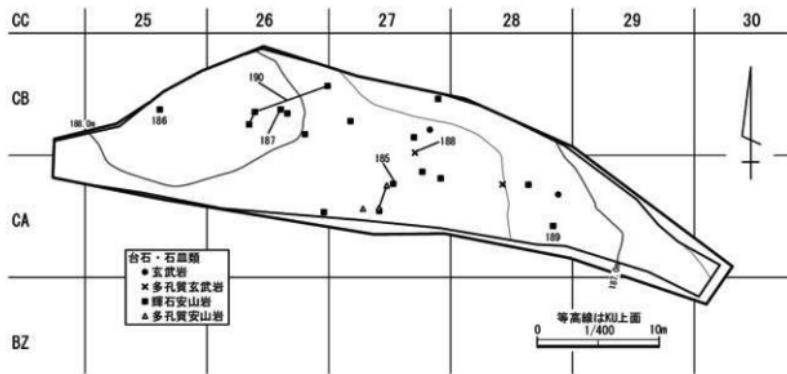
第239図 磨歯石類②



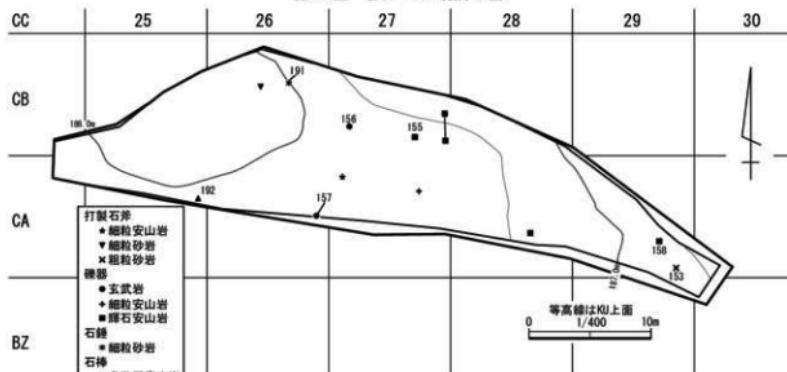
第240図 磨鼓石類・台石・石皿類



第241図 台石・石皿類・石錐・石棒



第242図 台石・石皿類分布図



第243図 打製石斧・礫器・石錺・石棒分布図

山岩を石材とし、横長剥片を素材とする。縁辺に表裏面から細かな剥離を入れて、刃部に仕上げている。裏面には打瘤が残置する。132はチャートを石材とし、横長剥片を素材とする。側縁部に両面から細かな剥離を入れて刃部に仕上げている。133はガラス質黒色安山岩を石材とし、側縁を刃部に仕上げている。134・135は小型で、側縁の一部を刃部に仕上げている。136は抉入削器か。

楔形石器(第228・231図 第56・58表 写真図版82)

137～139は楔形石器である。全て黒曜石を石材とし、当該遺跡で最も多いのが天城柏峠産である。138は下端部に潰れが、また上端部に自然面が観察できる。

石核(第231・232・235・236図 第56・58表 写真図版82)

140～152は石核である。出土位置はC A・C B 26・27グリッドに多く見られ、石材は神津島恩馳島産及び諏訪星ヶ台産黒曜石が多い。149～152は黒曜石以外のホルンフェルスと細粒安山岩を石材とし、自然縞の形状を残す。149・150は平坦面を打面とし、横長剥片の剥離を行っている。

第58表 繩文時代遺構外出土石器計測表①

博団 番号	写真 回数 番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	石材	推定産地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合 番号
100	81	3714	KU	CA-29	石鏡	チャート		1.8	1.4	0.3	0.6	
101	81	11206	ZN	CB-26	石鏡	黒曜石	天城柏峰	1.4	1.3	1.3	0.3	
102	81	11278	ZN	CA-27	石鏡	黒曜石	天城柏峰	2.3	1.6	0.5	1.1	
103	81	8761	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	神津島恩馳島	(2.2)	1.7	0.5	1.3	
104	81	8766	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	神津島恩馳島	2.2	(1.3)	0.5	1.1	
105	81	9918	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	神津島恩馳島	2.2	(1.5)	0.4	1.3	
106	81	12020	ZN	CA-28	石鏡	黒曜石	圓防壁ヶ台	2.3	(1.6)	0.4	1.2	
107	81	5527	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	神津島恩馳島	1.6	(1.4)	0.4	0.8	
108	81	5510	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	天城柏峰	1.5	1.3	0.2	0.3	
109	81	11291	ZN	CB-26	石鏡	黒曜石	天城柏峰	1.5	(1.0)	0.2	0.3	
110	81	10621	ZN	CB-26	石鏡	黒曜石	産地不明	1.6	(1.3)	0.3	0.5	
111	81	10267	ZN	CB-26	石鏡	黒曜石	神津島恩馳島	1.9	1.3	0.3	0.7	
112	81	6539	KU	CA-29	石鏡	黒曜石	天城柏峰	2.0	1.4	0.4	1.0	
113	81	3957	KU	CA-28	石鏡	黒曜石	天城柏峰	2.4	1.5	0.4	1.1	
114	81	4625	KU	CB-27	石鏡	黒曜石	霧視烟宿	1.8	(1.5)	0.4	1.1	
115	81	4631	KU	CB-27	石鏡	黒曜石	天城柏峰	(1.6)	1.7	0.4	1.6	
116	81	6541	KU	CA-29	石鏡	黒曜石	霧視烟宿	(1.7)	1.6	0.4	1.0	
117	81	4102	KU	CB-28	石鏡	黒曜石	神津島恩馳島	(1.8)	1.8	0.4	1.3	
118	81	10668	KU	CA-28	石鏡	黒曜石	霧視烟宿	1.5	1.7	0.4	1.0	
119	81	8030	KU	CA-26	石鏡	ガラス質黒色安山岩		2.0	1.2	0.5	1.2	
120	81	3432	KU	CA-27	石鏡	黒曜石	圓防壁ヶ台	2.3	2.0	0.6	2.2	
121	81	9908	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	天城柏峰	3.3	2.3	0.7	4.8	
122	81	4348	KU	CA-27	石鏡	黒曜石	天城柏峰	2.5	1.5	0.5	1.7	
123	81	8763	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	神津島恩馳島	(2.4)	(1.6)	0.6	1.4	
124	81	8789	ZN	CB-26	石鏡	ガラス質黒色安山岩		(1.8)	(1.0)	0.4	0.6	
125	81	5526	KU	CB-26	石鏡	黒曜石	圓防壁ヶ台	(1.4)	(1.3)	0.3	0.4	
126	81	10617	ZN	CA-26	石鏡未製品	黒曜石	神津島恩馳島	1.7	2.0	0.7	2.5	
127	81	4637	KU	CB-27	石鏡未製品	黒曜石	神津島恩馳島	2.7	2.0	0.8	3.1	
128	81	8762	ZN	CB-26	石鏡未製品	黒曜石	神津島恩馳島	2.3	(3.0)	0.9	4.7	
129	81	11648	ZN	CA-28	擦板	黒曜石	天城柏峰	1.6	2.6	0.8	3.0	
130	81	9347	KU	CA-27	擦板	黒曜石	ガラス質黒色安山岩	(2.7)	3.8	1.1	13.7	
131	81	9917	KU	CB-26	削部	黒曜石	鶴見安山岩	9.0	4.0	1.3	32.3	
132	81	6261	ZN	CB-25	削部	黒曜石	ガラス質黒色安山岩	(5.4)	(3.8)	0.7	16.9	
133	81	7160	KU	CA-27	削部	黒曜石	ガラス質黒色安山岩	9.6	3.6	2.3	82.7	
134	81	4055	KU	CA-27	削部	黒曜石	神津島恩馳島	3.3	1.4	0.8	4.6	
135	81	9135	KU	CA-29	削部	黒曜石	圓防壁ヶ台	1.5	2.2	0.4	1.1	
136	82	3913	KU	CA-28	抉入削部	黒曜石	鶴見安山岩	(3.0)	4.1	1.5	16.5	
137	82	5519	KU	CB-26	楔形石器	黒曜石	神津島恩馳島	4.2	2.9	1.1	12.2	
138	82	8961	KU	CB-25	楔形石器	黒曜石	天城柏峰	3.2	2.7	0.7	5.1	
139	82	11459	ZN	CA-26	楔形石器	黒曜石	神津島恩馳島	1.9	1.5	0.4	1.2	
140	82	3580	ZN	CA-27	石核	黒曜石	神津島恩馳島	3.6	1.7	1.4	6.2	
141	82	11467	ZN	CA-26	石核	黒曜石	神津島恩馳島	1.4	2.8	0.8	2.5	
142	82	6640	KU	CB-28	石核	黒曜石	霧視烟宿	1.8	2.2	2.6	8.8	
143	82	9910	KU	CB-26	石核	黒曜石	神津島恩馳島	1.3	3.9	2.0	8.2	
144	82	3955	KU	CA-28	石核	黒曜石	神津島恩馳島	1.3	4.0	1.8	9.0	
145	82	4644	KU	CB-27	石核	黒曜石	圓防壁ヶ台	1.6	3.1	1.0	4.3	
146	82	3399	KU	CA-27	石核	黒曜石	神津島恩馳島	1.9	3.7	1.8	10.4	
147	82	4161	KU	CA-27	石核	黒曜石	和田小深沢	2.6	3.3	1.3	11.2	
148	82	11292	ZN	CA-27	石核	黒曜石	圓防壁ヶ台	2.6	3.5	1.4	14.8	
149	82	7194	KU	CA-27	石核	ホルンフェルス		3.8	11.4	3.6	232.1	
150	82	3851	KU	CA-28	石核	ホルンフェルス		4.3	9.0	3.4	194.3	
151	82	6315	KU	CA-29	石核	ホルンフェルス		5.3	9.8	4.3	263.8	
152	82	8772	ZN	CB-26	石核	ホルンフェルス		7.2	8.4	3.9	252.8	
153	83	3701	KU	CA-29	打削石斧	粗粒安山岩		9.6	4.7	2.2	127.7	
154	83	11536	ZN	CA-26	二次加工剣片	黒曜石	神津島恩馳島	2.6	2.7	0.8	4.6	
155	83	10552	ZN	CB-27	研磨器	黒曜石	鶴見安山岩	10.9	9.0	4.1	410.0	
156	83	753	KU	CB-27	研磨器	玄武岩		11.8	10.7	4.8	696.8	
157	83	11447	ZN	CA-26	研磨器	玄武岩		13.6	9.5	5.5	740.0	
158	83	6525	KU	CA-29	研磨器	黒曜石	鶴見安山岩	8.2	6.9	2.6	200.0	
159	83	10178	KU	CB-27	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	11.2	8.8	4.1	611.2	
160	83	5534	KU	CB-26	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	10.0	9.9	4.1	627.6	
161	83	6526	KU	CA-29	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	8.2	9.7	4.9	593.4	
162	83	8794	KU	CB-26	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	10.5	9.9	4.5	740.5	
163	83	10440	KU	CA-28	磨歎石	ディサイト		12.8	7.0	5.8	762.0	
164	83	10681	KU	CA-26	磨歎石	ディサイト		(9.5)	8.1	6.0	688.5	
165	83	11277	ZN	CA-27	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	15.1	6.7	5.5	696.8	
166	83	6890	KU	CB-27	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	16.5	7.2	6.7	1133.5	
167	83	10967	ZN	CA-27	磨歎石	玄武岩		15.7	6.8	7.8	1165.9	
168	83	6538	KU	CA-29	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	9.5	4.4	5.1	293.8	
169	83	8778	ZN	CB-26	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	15.1	7.3	5.4	956.2	
170	83	10288	KU	CA-28	磨歎石	玄武岩		6.7	6.0	5.5	340.1	
171	83	11270	ZN	CA-27	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	11.2	7.3	5.0	606.8	
172	83	3478	KU	CA-27	磨歎石	黒曜石	鶴見安山岩	9.7	7.2	4.4	402.3	
173	83	6265	KU	CB-25	磨歎石	石英閃緑岩		10.0	8.4	3.7	516.4	
174	83	4257	KU	CA-27	磨歎石	閃緑岩		9.3	8.9	5.0	615.3	

打製石斧(第237・243図 第56・58表 写真図版83)

153は打製石斧で、粗粒砂岩を石材とする。基端部及び片側主面に自然面が残置する。またもう片側主面の剥離面が摩耗している。両側縁部中位の刃部よりの位置に敲打を加え、柄との聚縛部を設けているが、刃部に近すぎる所以石斧製作当初はもっと長い石斧で、使用による折損に伴い刃部を再生させているのかもしれない。

二次加工剥片(第234・237図 第56・58表 写真図版83)

154は二次加工剥片と考えられる。神津島恩馳島産の黒曜石を石材とする。

砾器(第237・243図 第56・58表 写真図版83)

155～158は砾器である。輝石安山岩と玄武岩を石材とする。157の刃部は擦られたような痕跡が残る。

磨敲石類(第233・238～240図 第56・58表)

159～184は磨敲石類である。そのうち159～174は磨敲石である。扁平で平面が円形を呈し、磨り面が主面、敲打痕が周縁部に認められるタイプは159～162で、棒状のタイプは163～169である。敲打痕は基端部に主に見られるが、168は側縁に集中する。170は球状に近く、171・172は扁平で平面が梢円形である。173・174は主面中央部に敲打痕集中が見られる。175～183は磨石である。平面は円形・梢円形・棒状等のタイプがある。184は敲石である。

台石・石皿類(第240～242図 第56・58表)

185～190は台石・石皿類である。188は栗色土層中から出土している。多孔質玄武岩を石材とし、重量は15.48kgを測る。敲打痕・磨り面が認められる。

石錘(第241・243図 第56・58表 写真図版83)

191は石錘である。扁平で平面が梢円形を呈する細粒砂岩砾を利用する。両端部を打ち欠いている。

石棒(第241・243図 第56・58表)

192は石棒と考えられる。多孔質安山岩を石材とし、面取りがなされている。

第58表 繩文時代遺構外出土石器計測表(2)

標団	写真 図版 番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	石材	推定產地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合 番号
175	9968	KU-CB-26	磨石	輝石安山岩				9.7	8.5	4.0	435.6	
176	7207	KU-CB-27	磨石	輝石安山岩				11.9	9.1	4.6	686.2	
177	4104	KU-CB-28	磨石	輝石安山岩				12.2	8.8	5.0	668.4	
178	11540	ZN-CA-26	磨石	デイサイト				(6.7)	8.3	3.7	333.1	
179	3707	KU-CA-29	磨石	輝石安山岩				16.6	9.9	5.0	1127.6	
180	4332	KU-CA-27	磨石	輝石安山岩				14.0	8.5	5.8	920.9	
181	10159	KU-CA-29	磨石	輝石安山岩				10.3	4.5	3.7	255.4	
182	6537	KU-CA-29	磨石	輝石安山岩				19.4	4.8	4.1	632.7	
183	6527	KU-CA-29	磨石	輝石安山岩				9.0	6.8	3.3	306.3	
184	3706	KU-CA-29	磨石	輝石安山岩				9.5	8.3	6.8	709.1	
185	4392	KU-CA-27	台石・石皿類	輝石安山岩				(29.0)	20.6	14.6	11840.0	
186	10107	KU-CB-25	台石・石皿類	輝石安山岩				25.4	39.5	9.7	9560.0	
187	10099	KU-CB-26	台石・石皿類	輝石安山岩				28.5	17.9	8.5	5050.0	
188	10550	KU-CB-27	台石・石皿類	多孔質玄武岩				(32.4)	36.5	8.6	15480.0	
189	12019	ZN-CA-28	台石・石皿類	輝石安山岩				31.9	20.8	8.3	7960.0	
190	5178	KU-CB-26	台石・石皿類	輝石安山岩				(20.5)	(22.6)	5.2	3183.0	109
190	8761	KU-CB-26	台石・石皿類	輝石安山岩				—	—	—	—	109
190	8762	KU-CB-26	台石・石皿類	輝石安山岩				—	—	—	—	109
191	83	5492	KU-CB-26	石錘	細粒砂岩			6.2	4.9	1.4	65.7	
192	10002	KU-CA-25	石棒	多孔質安山岩				(9.4)	7.2	6.7	660.9	

第4節 弥生時代以降の遺構と遺物

1 概要

富沢内野山V遺跡及び周辺の確認調査では、弥生時代以降と思しき遺構が確認されている。遺構の種類は集石、土坑、小穴、炉跡である。遺構はCA・CB25グリッドに集中する。

2 遺構

(1) 集石(第244・245図 第59表 写真図版73)

当該遺跡において弥生時代以降の集石と推定されたのは5号集石である。CA28グリッドに位置し、新期スコリア層中で確認された。礫は31点で構成され、分布範囲は1.43m×0.80mである。時期は不明である。

(2) 土坑(第244・246図 第59表 写真図版73)

当該遺跡において弥生時代の土坑と考えられたのは2号土坑である。CA25グリッド北辺に位置し、周囲に小穴や炉跡が位置する。土坑の平面は歪な円形を呈し、長軸は1.67m、短軸は1.61m、深さは0.31mを測り、平坦な底面をもつ。なお土坑内出土の炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した結果、 $2,140 \pm 20$ yrBPという数値が得られた。詳細は附編を参照されたい。

(3) 小穴(第244・246図 第59・60表 写真図版73)

小穴はCA25グリッドに位置する2号土坑を取り巻くように、6基確認された。平面は円形、梢円形等様々で、3号小穴で長径0.68m、短径0.49mを測り、小穴群中最大であるが、深さはどの小穴でも0.1~0.2m程度で浅い。覆土は何も炭化物粒と焼土粒を多く含む赤褐色土が主体である。2号小穴からは小礫と共に土器193が出土している。土器の時期から弥生時代末と考えたい。

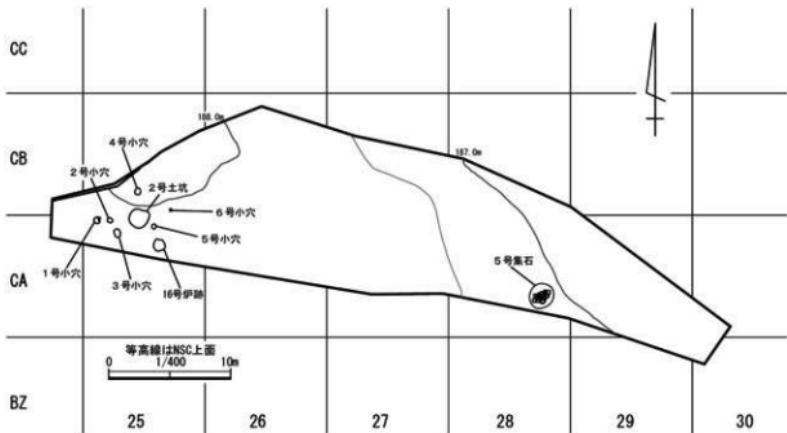
(4) 炉跡(第244・246図 第59表 写真図版73)

土坑や小穴が集中するCA25グリッド内に16号炉跡が確認されている。新期スコリア層で確認されており。平面は歪な円形を呈し、長径0.99m、短径0.93m、深さ0.33mを測る。覆土1層から被熱した土器片が出土している。土器の時期から弥生時代と考えたい。

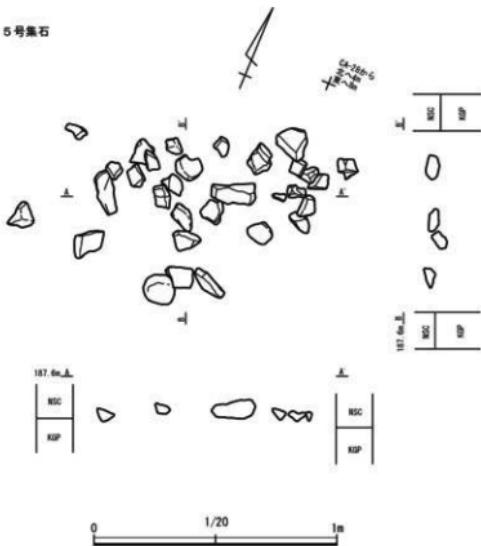
3 遺物

(1) 土器(第246・247図 第60・61表)

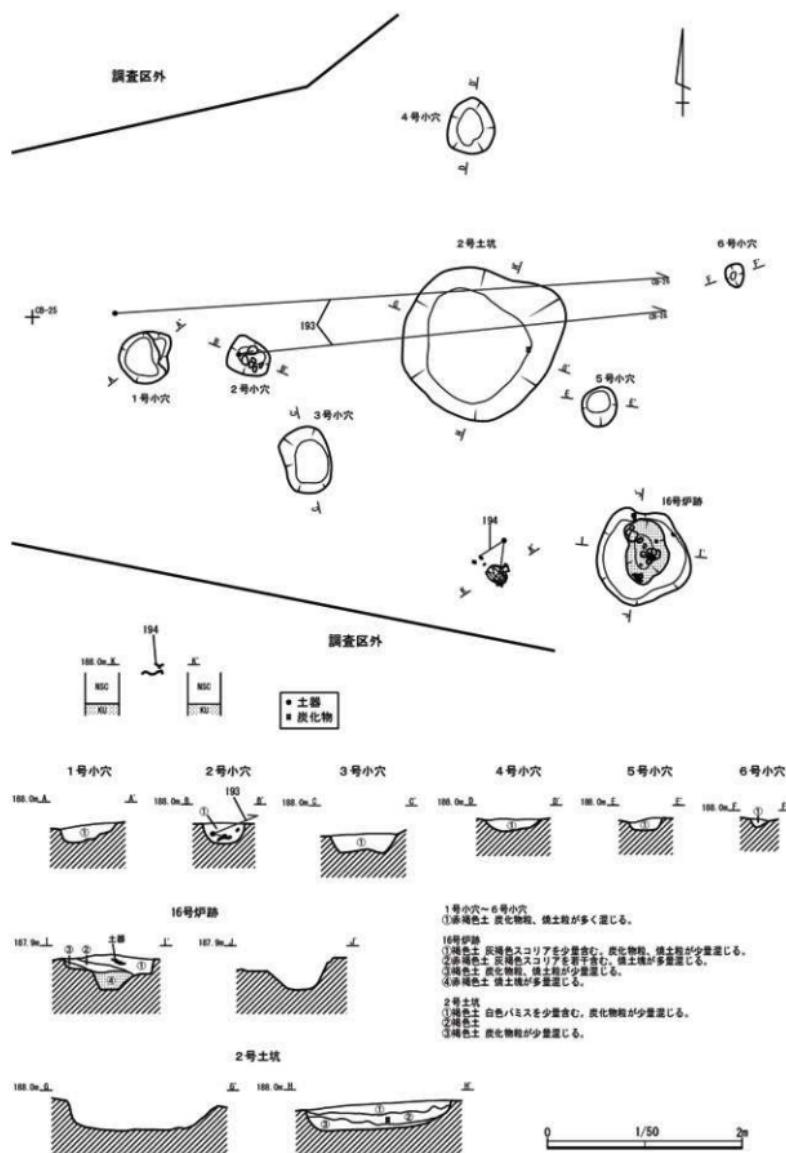
193は壺の底部である。底部外面に木葉痕が認められる。弥生時代末か。194は台付甕である。口縁部から台部まで残存している。胴部下位の作りが歪んでいる。胴部中位から上位はハケ調整が施されている。口唇部には刻目が施されている。出土位置は炉跡から西へ約1mの位置で、新期スコリア層面上で出土している。弥生時代末か。



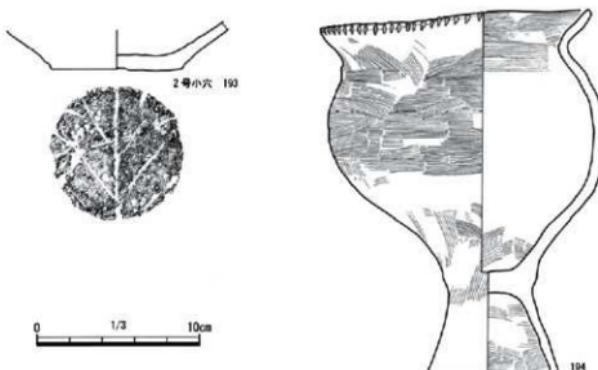
第244図 弥生時代以降の遺構位置図



第245図 弥生時代以降の集石



第246図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構群



第247図 弥生時代以降土器

第59表 弥生時代以降の遺構計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土器	石器	礫	炭化物	計	備考
5号集石	SY01	CA-28	ZN	1.43	0.80	-			31		31	
2号土坑	SF38	CA-25	NSC	1.67	1.61	0.31				1	1	
1号小穴	SP20	CA-25	NSC	0.58	0.53	0.21						
2号小穴	SP21	CA-25	NSC	0.44	0.37	0.20	5		5		10	
3号小穴	SP22	CA-25	NSC	0.68	0.49	0.19						
4号小穴	SP23	CB-25	NSC	0.57	0.48	0.12						
5号小穴	SP24	CA-25	NSC	0.42	0.36	0.13						
6号小穴	SP25	CB-25	NSC	0.24	0.19	0.09						
16号炉跡	FP06	CA-25	NSC	0.99	0.93	0.33	11		3		14	

第60表 弥生時代以降遺構内出土土器観察表

遺構名	桜田 番号	遺物番号	層位	グリッド	種別	器種	残存部位	器面調整		測量値	備考
								外面	内面		
2号小穴	193	接合244	NSC	CA-25	弥生土器	壺	底部	ミガキ		底径 80mm	木葉底

第61表 弥生時代以降遺構外出出土土器観察表

桜田 番号	遺物番号	層位	グリッド	種別	器種	残存部位	器面調整		測量値	備考
							外面	内面		
194	接合249	NSC	CB-27	弥生土器	壺	口縁～底部	ハケメ	ナデ	割み	ハケメ ナデ 口径 166mm 器高 223mm 底径 81mm 合併

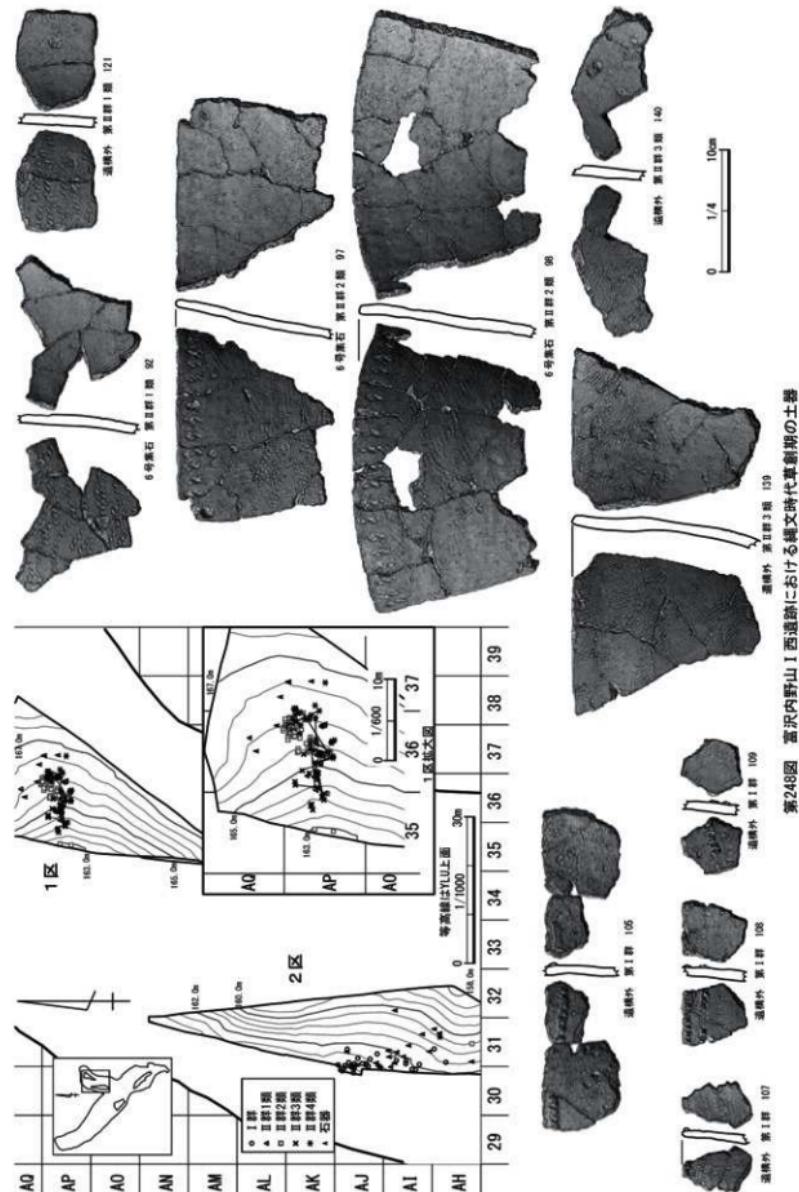
第6章 総括

前章まで富沢内野山Ⅰ西遺跡を含む4遺跡の遺構及び遺物に係る報告を行った。頁数に限りがあることから、本章では縄文時代草創期土器を概観して、総括とする。

草創期の遺物は4遺跡共に散見され、中でも該期の遺構・遺物は富沢内野山Ⅰ西遺跡で多く見出されている。縄文土器第I群とした隆帯文土器は2区に限定される。第I群は2区5号集石82、遺構外105～112のうち①105・106、②107、③108・109、④82・110～112が別個の個体と考えられ、文様は隆帯文のみで構成される。個体①は立ち上がりがわずかに内傾し、部位が口縁部付近なのか、胴部中位付近か判断に躊躇する。個体②は口唇部付近の隆帯文より下位は無文である。個体③は2条の隆帯文を横位に巡らし、隆帯文の直下・直上には別の文様を配置した痕跡は無い。個体④は107と同様、外面口唇部直下に隆帯文を巡らす。また111・112の横位隆帯文が同一と捉えられ、口唇部から間隔をあけて巡らされたものと推定される。そして、これら2条の横位隆帯文による区画内に、82・110・111に見る斜位の隆帯文が配置された可能性を想起する。上記の個体①～④には豆粒文、ハの字爪形文や横位短隆帯文は見られず、また縄文時代草創期における隆起線文系土器群でいう密接化された隆起線文とは文様構成上の親縁性は少ない。個体①～④は沼津市葛原沢第IV遺跡で見出された葛原沢Ⅰ式の特徴の一つである「器厚は厚く、織維を多量に含有」していないものの、個体①～③は幅6mm程度を測る隆帯を文様の主体と成す葛原沢Ⅰ式に類似し、また個体④は葛原沢Ⅰ式B類でいう垂下する隆帯文と、隆帯に稜線が認められる点が類似する。

縄文土器第II群は1～5類に分類している。押圧縄文土器と考えた第II群1類は1区1号集石79、1区6号集石85～93、遺構外113～123である。胎土と施文、器厚及び出土位置から114、118、123以外は同一個体の可能性がある。横位と斜位に施された絡条体圧痕文を特徴とし、91で理解できるように胴部は直線的に立ち上げ、絡条体による施文は広範囲である。多縄文系土器でも古期に位置付けられる押圧縄文土器段階において、まず想起されるのが葛原沢Ⅱ式である。葛原沢Ⅱ式は池谷氏により「施文は横位密接を基調とするが、部分的に斜位施文を介在させて器面が分帶されるものがある」という特徴が示されている。しかし当該遺跡第II群1類は横位・斜位を基調とし、間隔をあけた絡条体の施文である。また胎土も件の葛原沢Ⅱ式のように「薄手の胎土に金色の雲母を多量に含む」ものではない。一方、葛原沢Ⅱ式新段階に比定される沼津市清水柳北遺跡第14号集石遺構出土土器群には、第II群1類に類似する間隔をあけた絡条体による施文が認められる。池谷氏により「まばらな絡条体圧痕」とされた当該施文について、伊豆市(旧大仁町)仲道A遺跡でも出土例が認められると指摘されている。施文の状態から当該第II群1類は清水柳北遺跡から仲道A遺跡にかけての段階かと推定する。

回転縄文土器と考えた第II群2類は1区6号集石94・97・98、遺構外124～138である。胎土と施文、器厚及び出土位置から①94・125～138、②97・98が別個の個体と考えられる。個体①は口縁部を微かに内傾させ、外面に絡条体圧痕文を横位・斜位に格子状に施す。136はおそらく口唇部直下から胴部下半部にかけての接合資料と考えられ、やや内湾気味の胴部である。口縁部付近の絡条体圧痕文が文様帶となり、下位には縄文が施されている。また134で示されるように平坦な底部を持つ。また個体②の口唇部直下押圧文は自縄自巻か。その下位には縄文が施文されている。多縄文系土器でも新期に位置付けられる回転縄文土器段階において、想起される類例では仲道A遺跡の土器群である。個体①は仲道A遺跡II群2類b種に、個体②は仲道A遺跡II群1類b種に類似する。これらは口縁部付近に押圧文を主体とする文様帶を設える点で共通する。



第II群3類は表裏縄文土器である。1区1号集石80、遺構外139～141が該当する。4点とも同一個体か。口縁部は微かに外反させ、口唇部に縄文側面圧痕が施文される個体である。燃糸が施文の中心で口縁部外面付近の条の走行は縱位、内面は斜位～横位である。表裏縄文土器は葛原沢第IV遺跡、仲道A遺跡の他に沼津市丸尾北遺跡とイタドリA遺跡での出土が知られ、第II群3類は草創期末と理解される。

第II群4類は無文土器である。6号集石95、遺構外142～151が該当する。142・143は口縁部資料で共に指頭により押圧したものと考えられるが別個体と思われる。また底部資料である95は胎土等から146・151と同一個体と考えられる。胴部外面には文様は見られず、内面に横位のナデが施されている。4類は少なくとも4個体と考えられるが、それぞれ特徴的な文様が見られない。

統いて¹⁴C等の年代観について触れてみる。附編の土器付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS)により、縄文時代草創期の土器に関する数値が得られた。第I群107と108の¹⁴C年代及び暦年較正年代(1σ)は、前者が12,230±40yrBP、12,206calBC～12,053calBC、後者が12,350yrBP±40、12,572calBP～12,180calBPと報告され、後者の暦年較正年代は2つの範囲で示されている。また第II群1類91が10,480±40yrBP、10,581calBC～10,450calBCで、暦年較正年代は2つの範囲で示されている。第II群2類98が10,430±30yrBP、10,472calBC～10,208calBCで、暦年較正年代は4つの範囲で示され、さらに第II群4類147は11,290±30yrBP、11,290calBC～11,186calBCという数値が示された。この数値では第I群は第II群に時期的に先行することになる。ただし第II群4類147について、第II群1～2類よりも古い年代観が提示され、本来的に第I群に該当する可能性を残した。近隣地での成果として長泉町八分平E遺跡出土の隆起線文土器が11,920±50yrBP、11,901calBC～11,771calBCの範囲を示された。当該第I群は八分平E遺跡の隆起線文土器より時期的にやや先行する可能性を想起させる。

第248図に第I・II群の出土分布を示したが、これにより該期の生活区域の2区から1区への移動が想像される。加えて草創期の2区は第I群にはほぼ限定される点から、尖頭器類の所属は第I群に伴うものと理解できる。一方の1区の草創期は、第II群4類147の¹⁴C等の年代観を仮に評価対象とするならば、やや時間幅を見込むことになる。これら富沢内野山I西遺跡1・2区共に草創期以降も生活区域として機能し、漸移層から富士黒土層中に早期以降の遺物が混在している。結果、石器について尖頭器類以外の草創期石器の抽出が困難である。特に6号集石での上ノ坊式96が見出された点から、人為的もしくは植物性攪拌の影響を草創期包含層に与えていると想像される。富沢内野山III北～V遺跡で尖頭器が計7点出土している点から、生活区域たる富沢内野山I西遺跡1・2区付近を核として、狩猟エリアが環状に拡がる様を想像するに足る。既に葛原沢第IV遺跡における葛原沢I式期第1号配石址から尖頭器、石鎌、削器、磨石等が出土し、特に磨石が該期の植物質食糧への依存の可能性を示すものとして評価されているように、富沢内野山I西遺跡においても、今後狩猟以外の生業の有様に詳細に検討が加えられるものと考える。

主要参考文献

- 漆畠 稔 他 1986 「仲道A遺跡」 大仁町教育委員会
- 関野哲夫 1989 「清水柳北遺跡発掘調査報告書その1」 沼津市教育委員会
- 池谷信之 他 2001 「葛原沢第IV遺跡(a・b区)発掘調査報告書1」 沼津市教育委員会
- 池谷信之 2006 「東海東部の草創期編年」 「東海地方縄文時代草創期の諸問題」 東海縄文研究会
- 辻谷昌彦 2008 「静岡県を中心とする東海地方の多縄文系土器群について」「縄文草創期後半の諸様相」 縄文セミナーの会
- 佐藤雅一 2008 「隆起線文系土器群」「総覧縄文土器」 アム・プロモーション
- 谷口康浩 2008 「多縄文系土器」「総覧縄文土器」 アム・プロモーション
- 富樫孝志 2012 「八分平E遺跡出土縄文土器の再報告」「研究紀要」 創刊号 静岡県埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	すそのしとみざわ・ももぞのいせきぐんII							
書名	裾野市富沢・桃園の遺跡群II							
副書名	第二東名事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	勝又直人・西田真由子							
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261(代)							
発行年月日	2013年3月25日							
ふりがな 所収跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町	道路番号					
富沢内野山 Ⅰ西遺跡 確認調査	静岡県裾野市富沢 内野山518-1他	222208		35°17'29"	138°89'48"	20011225 ~ 20020327	954m ²	確認調査
富沢内野山 Ⅰ西遺跡 本調査Ⅰ期	静岡県裾野市富沢 内野山518-1他	222208		35°17'29"	138°89'48"	20020801 ~ 20030314	1,715m ²	記録保存調査 (盛土場建設)
富沢内野山 Ⅰ西遺跡 確認調査	静岡県裾野市富沢 内野山518-1他	222208		35°17'29"	138°89'48"	20030201 ~ 20030228	96m ²	確認調査
富沢内野山 Ⅰ西遺跡 本調査Ⅱ期	静岡県裾野市富沢 内野山518-1他	222208		35°17'29"	138°89'48"	20030403 ~ 20030731	4,056m ²	記録保存調査 (盛土場建設)
富沢内野山 Ⅲ北遺跡 確認調査	静岡県裾野市富沢 内野山地先・桃園 地先	222208		35°17'50"	138°89'51"	20011225 ~ 20020327	76m ²	確認調査
富沢内野山 Ⅲ北遺跡 本調査	静岡県裾野市富沢 内野山地先・桃園 地先	222208		35°17'50"	138°89'51"	20020401 ~ 20030120	1,810m ²	記録保存調査 (道路建設)
富沢内野山 Ⅳ西遺跡 確認調査	静岡県裾野市富沢 内野山地先・桃園 地先	222208		35°17'62"	138°89'23"	20011225 ~ 20020327	177m ²	確認調査
富沢内野山 Ⅳ西遺跡 確認調査	静岡県裾野市富沢 内野山地先・桃園 地先	222208		35°17'62"	138°89'23"	20020401 ~ 20020628	181m ²	確認調査
富沢内野山 Ⅳ西遺跡 本調査	静岡県裾野市富沢 内野山地先・桃園 地先	222208		35°17'62"	138°89'23"	20020401 ~ 20030120	3,436m ²	記録保存調査 (道路建設)
富沢内野山 Ⅴ遺跡 確認調査	静岡県裾野市 桃園地先	222208		35°17'74"	138°89'43"	20020401 ~ 20020628	22m ²	確認調査
富沢内野山 Ⅴ遺跡 本調査	静岡県裾野市 桃園地先	222208		35°17'74"	138°89'43"	20020401 ~ 20030120	520m ²	記録保存調査 (道路建設)

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富沢内野山Ⅰ西遺跡	集落	旧石器時代	礫群・石器集中	ナイフ形石器・錐器・削器・楔形石器・石刃・細石刃・石核・尖頭器・磨石・戴石・台石	
		縄文時代	集石・土坑・炉跡	縄文土器(草創期・早期・前期・中期・後期)、尖頭器・石鑿・錐器・削器・石器・楔形石器・石核・打製石斧・磨敲石・台石・石皿・罐器・吳形部分磨製石器	静岡県内でも稀有である縄文時代草創期の土器が出土。
		弥生時代		弥生土器・有孔磨製石器	
		平安時代		土器器・灰釉陶器	
	散布地	中世～近世	土坑・溝跡	鐵製品	
富沢内野山Ⅲ北遺跡	集落	旧石器時代		尖頭器	
		縄文時代	住居跡・土坑・小穴	縄文土器(早期・中期・後期)、石鑿・錐器・削器・石器・楔形石器・打製石斧・磨製石斧・磨敲石	縄文時代中期の集落遺跡。
	散布地	中世～近世	土坑・溝跡		
富沢内野山Ⅳ西遺跡	散布地	旧石器時代	土坑	尖頭器・ナイフ形石器・石刃・細石刃・錐器	
		縄文時代	集石・土坑・炉跡・溝跡	縄文土器(早期・前期・後期)、尖頭器・石鑿・錐器・削器・打製石斧・磨敲石	縄文時代早期の炉跡群を確認。
		中世～近世	土坑・溝跡・道路状遺構		
富沢内野山Ⅴ遺跡	散布地	旧石器時代	礫群	尖頭器・削器・楔形石器・石刃・細石刃・磨敲石	
		縄文時代	集石・土坑・炉跡	縄文土器(早期・前期・中期)、尖頭器・石鑿・錐器・削器・楔形石器・石核・錐器・磨敲石・台石・石皿	旧石器時代から弥生時代までの遺構・遺物を確認。
		弥生時代	土坑・炉跡	弥生土器	
要約				第二東名建設事業に伴う、土盛場及び建設用道路設置箇所における4遺跡の発掘調査。いずれも旧石器時代から縄文時代の遺物・遺構が多く確認されている。 富沢内野山Ⅰ西遺跡では第IV黑色帶より上位にて、礫群等が確認される。また縄文時代草創期の土器が出土。静岡県内でも稀有の資料例となった。富沢内野山Ⅰ西遺跡及び富沢内野山Ⅲ北遺跡では愛鷹山東麓では数少ない縄文時代後期の土器群を確認している。	

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第31集

裾野市富沢・桃園の遺跡群II

第二東名土3地点・C R36地点
 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 裾野市-10
 (第1分冊)

平成25年3月25日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
 〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
 TEL 054-262-4261㈹
 FAX 054-262-4266
 印刷所 文光堂印刷株式会社
 〒410-0871 静岡県沼津市西間門68-1
 TEL 055-926-2800